

2019 多文化共修 科目 B 報告集

多言語社会とコミュニケーション

担当教員：岡 智之

2019 年度秋学期 | 木 5 限

目次

課題レポート	1
朝鮮学校訪問感想文	19
ブラジル人学校訪問感想文	28
最終受講者アンケート集計	32
最終レポート集	39

課題レポート

マンガ『クラスメイトは外国人』感想

(1) ディエゴの物語への感想

この物語を読んだ後、ディエゴは日本語に障害があったから、日本人学生と喧嘩してしまうかもしれないと思った。しかし、続いて読むと、実際の状況はもっと複雑だと思う。一方、ディエゴは日本語があまり上手ではない。そのほか、他の日本人学生もあまりブラジルのことに詳しくない。両方もお互いのことを知らない上、言語でコミュニケーションすることもできなく、矛盾が生じるのは当然のことだ。

これは子供たちのせいではないと思う。しかし、外国人がどんどん日本に来るという背景で、こういう場面が多くなっていく。そのため、学校では国際理解教育が必要とされている。国際理解の授業で、日本人学生に外国のことを教えて、外国人学生に日本のことを教える。これで、お互いのことをより流暢に理解し合うことができると考えられる。

私も日本に来た後、いろいろな国の人と交流して、お互いに対する偏見と誤解を解いた。

(2) ユへの物語への感想

ユへの物語を見た後、交換留学の時の中国人の友達たちのことが浮かび上がった。彼女たちの中国語の名前が日本語で話すと、とても聞きにくくて、自分で日本語の名前「キホ」「アキ」などを作った。授業中でもプライベートでも、みんなは作りの名前を呼んでいた。そのため、私はよく彼女たちの本名を思い出せない。同じ中国人同士なのに、お互いの本名がわからないのは本当に変なことだと思った。今から考えると、これは私たちは外国人として来日して、文化的な権力関係の中は日本の文化より弱いということだと思う。

在日コリアン三世のユへも同じで、外国人としてずっと日本にいる間、では日本の文化にしたがおうとしている。朝鮮人だけど、朝鮮に行ったこともなく、朝鮮語もできなくて、国に帰るのも容易ではない。そして、日本に生まれて、もう日本の生活に慣れた上、日本にいたいという気持ちも持っているのではないかと思っている。でも、自分が朝鮮人ということは周りにいじめられるという残酷な現実があって、狭間にいる彼女はただ自分の「朝鮮人」という身分を隠さなければならない。

しかし、今外国人がどんどん日本に来るという時代で、日本人とより多くの外国人と一

緒に生活するのは遠くない未来で、やはりもと広い心をみんなを受け取るほうがいいではないか、私はそう思っている。

人と人が分かり合うためには、相手のことを知る必要があります。相手のことをよく知らないと、偏見や差別の原因になることがあるからです。お互いのことを知る努力するのは、共に生きていくうえで、とても大切なことなのです。ディエゴのような子供たちは、自分の意志とは関係なく、親に連れられて日本にやってきたので、最初はきっと日本のことは詳しくないはずですが。習慣や考えの違いの原因で、自分にとって矛盾しているところもきっとあります。クラスメイトと喧嘩するときには、自分の国なら、お互いの言いたいことをすべていうことで、問題を解決する環境だったのですが、日本に来たら、そういう時にまず謝りなさいと先生に言われても、すぐには納得できないわけです。そういうところは、文化と考えの違いがあるので、相手のことをよく知って、気持ちをきちんと伝えてたら、よりよい関係になるかもしれないと考えます。

ディエゴのような外国で生まれてから生活してた人とは違って、ユエは日本で生まれて育ってきた外国人という人も多いです。20世紀は国々の間で、戦争があり、植民地になっから様々な政策が実施されたことで、人口の移動も多くなりました。ユエのおじいさんも前世紀の戦争の原因で、仕事を求めて日本にわたりました。長年日本で働いて、戦争が終わった後、たくさんの方が自分の国に帰ったのですが、仕事が見つかれなくて生活に困ってたたくさんの方々はそのまま日本に残りました。ユエのおじいさんもその中の一人でした。その原因で、ユエのように、外国人とはいえ、日本語しかしゃべれな子供もたくさんいます。そういったよう歴史を知らないとなりの人たちのこともよくわからないはずで。なので、外国人というのは、必ずしも顔は日本人とは全く違い、自分の国の言語が喋れて、日本語はわからないというわけでもないです。

そうやって世界につながる隣人たちと積極的にかかわり気持ちや相手のことをよく知りたい気持ちを持ち、きっとお互いにとって親しい関係になります。

ディエゴの物語の質問・ユエの物語の感想

○ディエゴの物語の質問・感想

このディエゴの話を読んで、私は日本の学校に通うことになった外国人児童の苦労や大変さを初めて知りました。私は今まで田舎の学校だったせいか、小学校～高校までの間にクラスや学校に外国人生徒はいませんでした。そのため、日本の学校に通うような外国人生徒のことなどを考えたことがありませんでした。ディエゴの場合、最初の方は周りの友達からも興味を持たれていたのですが、時間が経つにつれてディエゴに対して面倒くさく

なっていました。そして、いつしかディエゴのことを仲間外しにするようになってしまいました。日本語が上手く話せないような、更には異文化を持つ児童・生徒とその他の子どもに対して学校の先生としてどのように指導し、接していくか考えさせられました。自分たちの文化だけが中心であると考えず、多くの文化があることを子どもたちに理解させて受け入れることができるように伝えていきたいです。質問としては、ひとりぼっちでいる姿を見たディエゴの先生は実際にどのような接し方をして指導をしていたのか。ということでした。

○ユへの物語の感想

ユへの話を読んで、日本に来た朝鮮人のことを深く考えるようになりました。私は朝鮮人学校に行った際にも感じたのですが、日本に来てもお、独自の朝鮮語や朝鮮の文化を大切に尊重して使い続けるということを素晴らしいと思いました。そもそも、歴史について、1910年に旧日本による朝鮮併合が行われて、その後に韓国も日本の統治下と同じに扱いになったために、日本で徴兵令が出された際には日本列島内だけでなく韓国でもそれが適用されて徴兵が行われたために日本人として戦争に参加させるという名目であったために韓国人にだけ強制連行を執り行った訳ではないと高校の勉強では習った記憶があります。その割には、朝鮮人は当時日本人に差別やいじめを受けていたということは矛盾しているような気がします。日本のために韓国からやってきて戦争に参加したと言う割には、韓国人は日本人じゃないからと言って差別をするのは理解できません。しかし、授業でやったように在日朝鮮人はとても多いとされています。したがって、社会全体が在日朝鮮人のことを理解し受け入れることで彼らの文化を尊重するような多文化共生社会になるのではないかと考えました。

多文化共修科目B 課題レポート

「クラスメイトは外国人～デュエゴ・ユへの物語～」を読んで

デュエゴの物語では、はじめはブラジルからやってきたデュエゴに対して興味を抱き、日本語がよく分からないデュエゴを助けてあげていたクラスメイトたちが、文化の違いにより少しずつ離れていってしまう様子が描かれていました。

日本の現状では、これが深刻化した場合いじめなどにもつながり、外国にルーツを持つ子供たちが学校に通えなくなる問題も起きています。私は、この問題は単に誰かを責めるようなことではないと思います。文化の違いは簡単には理解できないことであり、幼い子供たちとなおさら受け入れ難いものがあります。しかし、特に日本は、自分とは異なる相手を理解し尊重するという風潮が薄いのです。自分の習慣が当たり前であり、他の国の文化は普通ではないといった考え方があると思います。

ユへの物語では、同じ日本に住んでいながら、在日朝鮮人という存在について認識ができていない様子が描かれています。私は、これは日本の教育に問題があると思います。

在日朝鮮人は戦後日本に住み続け、今でも日本の社会で共に生活しています。どうして日本に来ることになったのか、正確な歴史や細かな経緯が子供たちに教えられず、それが相手を認識していない現状につながっています。このように相手を知らないまま共生していると、それが差別につながり、社会問題に発展しつつあると思います。

デュエゴ、ユヘの物語から共通に感じたことは、差別問題は相手に対する無知から生じているということです。

これからの日本では、外国人労働者の受け入れが急速に増加し、日本で暮らす外国人の数は一層増えていきます。この現状の下で、外国人との共生は大切な問題となります。

私は、特に教育現場が重要な場であると思います。クラスにいる外国にルーツを持つ子供たちの文化的背景についてしっかりと説明して、お互いを尊重することの大切さを日本の子供たちに教えていくべきです。

外国にルーツを持つ子供たちが、自分を恥じずに生活していける場が作られていく必要があると思います。

多文化共修科目 B

第1話 ディエゴの物語～海をこえてきた転校生

・質問

1. ディエゴの物語を読んで感じたことや考えたことを書きましょう。

物語を読んで、ディエゴのように「自分の意思とは関係なく、親に連れられて日本にやってきた」子供たちが、我々の身近にいることが分かりました。

確かに、グローバル化の進展とともに、日本に限らず、世界中の人口移動に伴い、異文化間の摩擦が激しくなります。しかし、多文化共生教育を学んできた私は、「郷に入っては郷に従え」のような「同化教育」ではなく、異文化を知ったうえで、お互いに尊重し、共生していくことが何よりも大事なことだと思っています。

2. 日本の教師は、外国人の子どもたちに、どのような指導や支援をしたらよいと思いますか。

日本の教師が、外国にルーツを持つ子どもたちに指導や支援する際に、まず、彼らの文化や生活習慣を理解することが不可欠なとこだと考えます。例えば、マンガの中では、先生側は彼らが喧嘩した理由を問わず、ディエゴに「謝りなさい」を要求し、そのような「日本的な習慣」の捉え方に注意しなければならないと思います。また、外国人の子どもが日本での生活を慣れるまで、授業だけではなく、周りの子どもとのコミュニケーションをフォローしていく工夫も必要だと考えます。

第2話 ユヘの物語～私が日本で生まれた理由

・感想文

金ユヘの物語を読んで、日本で生まれて育てたユヘが在日韓国人三世であり、韓国語が喋れないことが分かりました。彼女が日本で生まれた理由は、「1945年までの35年間朝鮮

半島は日本の植民地だった」ので、祖父母の生活が苦しくなり、ユへの両親に連れられて、日本に来ました。その後、日本が戦争に負けて、植民地でなくなったけれども、日本政府が在日朝鮮・韓国人への帰国支援をせず、さらに、「故郷に帰っても家もなく」、「仕事も見つかるかどうかわからない」、「朝鮮戦争が始まった」などの理由で、「けっきょく約 60 万人のひとが日本に残った」という歴史が分かりました。

その中、最も印象的だったのは、日本の植民地であったため、朝鮮語を使ってはいけないことでした。すなわち、「見えないひとびと」と呼ばれる在日朝鮮・韓国人のことです。いじめや差別問題を避けるため、日本的な名前を使い、日本で暮らしてきました。当時、植民地を統治するため、「同化教育」がある意味では必要かもしれませんが、これからの時代では、非常に危険な思想だと考え、社会の発展とともに、多様な文化を理解し、良いところを受け入れ、時代とともに新しい文化を創り出すことが重要だと思います。

課題 1. ディエゴの物語の質問

質問 1.

日本人の子どもにとって、自分と異なる環境で育ってきた外国人のクラスメートは、言葉にせよ行為にせよ、すべてが斬新であり、その新しさがいずれそうでなくなることに気づくことはなかなか難しいのではないだろうかと思います。しかし、親だったり、先生だったり、それを子どもたちに教えてあげるような役割を担う誰かがいるのはきわめて大切なことだと思いました。また、実は同じ環境で育てられている者同士も一人ひとりが違うのに、なぜか見た目やことばに違いがみられる相手がマイナス的な評価を受けやすいだろうかについて考えることに我々が追われているといえるのではだろうかと思いました。

質問 2.

教師としては何よりも教師自身が有する価値観を生徒側に押し付けてはいけないと思います。一方、例えば、バイリンガル教員のように、普段から子どもの言語学習だけではなく、外国人生徒と日本人生徒とのつながり、彼らの家庭と学校とのつながり、そして、国籍や文化背景などの壁を乗り越える幅広い教養と豊かな人間性を培うため、常に子どもたちの「心」を育むことを念頭におくべきだと思います。また、自分の気持ちを混ざり合った言語を用いて表現する子どもたちがいたりするとしたら、それに対応できる「まず話を聞いてあげる」という姿勢をもたなければならないと思います。

課題 2. ユエの物語の感想

私がボランティアとして通っている中国人留学生を対象にした大学進学塾ではでこのような子どもがいました。両親とも中国人であり、彼女は生まれが日本なのだが、小3の時、

親の仕事上の関係で、中国に連れていかれました。その後、中1の時再び親の都合により、日本に戻ってきました。したがって、彼女は中国語も日本語も中途半端にしか学んでおらず、専門用語が沢山出ている社会などの科目は大変難しいと言っていました。

もちろん、言語の問題だけではなく、日常生活や学校生活においても、授業内容も人間関係も彼女にとってきわめて大きな負担だと私に打ち上げました。彼女よりマンガの主人公であるユエは、母国の血が自分の体の中で流れているが、生まれも育ちも日本であるため、母国と日本との違いとか自分は一体何人とかのような疑問をもったことすらもなかったとでしょう。それにもかかわらず、周りの友達に自分があるべき姿は何であるかと指摘されても、おそらく彼女にとっては「なぜですか?」「なぜそうじゃないといけないですか?」といった自分への問いかけから徐々に落ち込んでいくのではないのでしょうか。

そうした疑問に対して、結局答えも出せず、「わからないまま」でおわってしまうのは彼女のような育ちをもつ外国にルーツをもつ子どもたちに最も痛い経験であると思います。

そうならないため、どのような文化背景に立って育ってきた子どもに対して、彼ら（彼女ら）は「何人」ではなく、彼（彼女）自身であることは、グローバル化の進展に伴う現代社会に生きる我々がもつべき姿だと思いました。

多文化共修科目 B

① ディエゴの物語を読んだ質問

質問は特にありませんでした。

疑問に感じたのは、この話に出てくる教師の姿勢です。

ドッチボールでの出来事や最後の場面のような差別的ともとれる子供の発言は良くないことですが、小学生であれば突然やってきた“外国人”に戸惑ってしまうのは当然だと思います。その中で子供だけで関係性を作ることは難しいことが予想されるため、教師が積極的に子供たちの間に入るべきではないのでしょうか。今後このように“外国人”が学級にいることがより身近になることが予想されます。初めからいる場合はもちろんですが、転入してくる時には特に教師のサポートが重要であると考えます。

② ユエの物語の感想

私は大学生になるまで“在日”と呼ばれる人々のルーツを知らずにいたため、この話に登場する日本人学生の反応に共感する部分が多くありました。

歴史的背景を正しく認識することは難しいかもしれませんが、話を聞いたことがあるかどうかは大きな違いがあると思います。間違った理解をしないよう、また学級内にいる当事者に配慮する必要がありますが、小学生のうちから“在日”という存在について知る機会があると良いと思いました。

多文化共修科目 B 課題レポート

ディエゴの物語の質問

1, ディエゴの物語を読んで、まずはケンカの仕方も文化によって違いがあることに驚きました。国によっては納得ができるまで話し合う文化があり、そうではない日本人の生徒がトラブルの際にうまく折り合いをつけるにはどうしたらいいのだろうかという疑問が湧きました。また、ディエゴはケンカの際の先生の言葉にも納得ができず、その後、彼の活発さがなくなっており、些細な言葉一つでも、異文化の出来事の影響力の大きさを感じました。

2, 日本の教師が、外国人の子供たちを指導する際、日本人の生徒と接する時よりも丁寧に言葉を選び、指導や対応が終わった際にどんな些細な疑問でも聞く時間をとることが大切だと考えます。例えば、ディエゴを指導した先生が「ごめんなさい」ということを伝えるとき、「あやまりなさい」という言葉で話しかけ始めるのではなく、「どうしたの?」という言葉をかけ、教師側が冷静になり聞き手に回るべきだと思います。外国人生徒の指導や支援は慣れてない教師が多く、慌ててしまうかもしれませんが、教師として落ち着いた行動をとるべきだと思います。また、心の教室等での定期的なメンタルヘルスの支援も必要だと思います。些細な言葉の行き違いや、日本人生徒が発端のトラブルの際、外国人生徒が自分のせいだと責任を感じたり、孤独感を感じさせないように精神的なアプローチも視野に入れ支援を考えるのが良いと思います。

ユへの物語の感想

私はユへの物語を読み、在日韓国人・朝鮮人の背景を始めて詳しく知りました。「同化政策」などの言葉自体は歴史の授業で学びましたが、「キム君もパク君もいない」という言葉にはかなりショックを受けました。他にも似たような政策や事件について、その年号と名称などは学びましたが、何も深くは知らないなと気がつかされました。今回のユへさんのように日本語を流暢にはなせ、周りにも理解がある友達がいる方ばかりではないはずであり、学校教育として詳しい背景を学ぶ機会が増えるといいなと思います。

【ディエゴの物語】

物語の冒頭では、外国にルーツを持つディエゴがそれを活かしながらも上手くクラスに馴染んでいる。しかし、物語半ばより、文化の違いから彼自身の表情が曇ってしまっているのが見て取れる。

教師の対応に着眼すると、ディエゴとクラスメートが喧嘩に発展した後、一方的に暴力を奮ったディエゴに対し、謝ることを強制している。それに対し、クエスチョンマークが標すように、ディエゴ自身は彼自身の行動の何が問題を起こしているのか理解していない

い。物語の流れから、ディエゴに悪気は無く、日本のドッジボールのルールを知らないディエゴが、クラスメイトにボールをいきなり当てられ驚いて怒ってしまうのも無理は無い。彼自身にドッジボールのルールを説明する対話から始めなければならないと思った。また、今後の彼がより馴染めるように、トラブルに巻き込まれた日本人児童や周囲の児童にも彼の誤解の要因を説明する等のアフターフォローが必要になってくると感じた。個々の外国人児童のレベルにもよるが、ディエゴのように日本のポピュラーなレクリエーションですら初めてだというパターンも多く存在すると考えられるため、教師は様子を見ながら説明に努めなければならないと考えた。更に進んだ段階の話だが、外国人児童がクラスにいるという利点を活かし、彼らの母国の文化を彼ら自身に紹介させることによって、彼らの文化に誇りを持たせ、ほかの日本人児童にも異文化への理解を深め、世界への興味関心を引き出すということが可能であると考えた。しかし、普通学校においては、日本人児童の指導で手一杯な教師が殆どであり、それに割く時間や人材が不足している事実がある。

【ユへの物語】

私は高校で日本史を専攻していた為、日本が朝鮮に布した策や法についての知識を多少持っている。だからこそ、在日朝鮮人に対しての問題は、非常にデリケートに扱わなければならない根強い問題だと思う。物語の中では、彼女自身終始明るく振舞っているが、物語の終盤の一言が標すように、今まで日本で生活するにあたって多少の困難を抱えてきたことが考えられる。私の大学の先輩も、在日韓国人ではあるが、日本語には不自由しておらず、彼女から打ち明けられるまでは全く分からなかった。彼女は教員養成課程に属してはいるが、教師になる事は叶わないようだ。

物語の中では、作中の無知な女の子たちがユへに対し、韓国に関する質問を投げかけている。異文化理解、多文化共生するということは、過去を知らずにできるものではないと思う。日本がもっと彼女らにとって生きやすくなるためには、正しい歴史教育は必要であると感じた。

多文化共修科目 B 課題「ディエゴの物語、ユへの物語を読んで」

ディエゴの物語は、最初はブラジルからやってきたディエゴに対して日本人たちが優しく日本の習慣について教えていたのに、文化の違いにお互い困惑して壁が出来てしまうというものだった。確かに子どもだったら、何回も繰り返し教えるのはだんだん面倒くさくなってしまいうだろう。また、いきなり自分とは異なる文化を目の当たりにした時に、その知識の少なさから受け入れることが困難だと考える。また、外国人も同じように日本の文化のことを知らないケースが多いうだろう。ディエゴは、日本人が自分は悪くないのにとりあえず謝っている姿を理解できていなかった。授業などで異国の文化を知ることができる

ように配慮することが大切だと考える。

ユヘの物語は、在日韓国人のユヘがなぜ日本にいるのか、また在日外国人に対する差別について書かれている。ユヘは韓国の名前なのに韓国語を話すことが出来ないが、ほかにもそのような人はたくさんいる。とある芸人は見た目がインド人なのに日本生まれ日本育ちで、日本語しか話すことが出来ない。この物語やそのエピソードを踏まえて私が考えたのは、私たちは浅い知識を持っているだけで知った気になっていることが多いのではないかと、ということだ。ユヘは外見で韓国人と判断されて韓国語を教えてほしいといわれていたが、本当は在日3世で韓国語は話せない。また先述の芸人も、見た目が外国人のようだからというだけで何度も職務質問を受けているという。実際に私もこの物語を読むまで、在日外国人が差別をされるからという理由で自分の身分を隠しているとは思ってもみなかった。

二つの物語を読んで、私にはまだ知らないことがたくさんあると思った。多文化共生という言葉自体を大学生になって初めて知った。せっかく多文化共生コースがある大学に来て授業を受けているので、知らないことをまだまだ知りたい。そして周りの人々に伝えたい。

文化共生科目 B 「クラスメイトは外国人」感想

<ディエゴの物語、ブラジル>

物語の中において適切、不適切な支援がそれぞれあると感じた。まず、冒頭のクラスメイトの関わり方はディエゴにとって安心できるスタートであったと思う。言語の違いを生徒がすんなりと受け入れ「こんにちは」などの挨拶、学校の場所、休み時間の遊びの誘いなど学校生活に適応するためのきっかけ作りになると感じた。教師も給食の際に牛乳をポルトガル語でなんというか聞くなどの生徒に関心を持ってもらう工夫が見られる。

しかし、後半の学校生活では不十分な支援が多い。特に「暴力はいけません」「あやまりなさい」という指示はディエゴの心情や状況を考慮していない。言語が不十分に使えない状態では、遊びや授業で自分の気持ちがうまく伝えられないことがあるだろう。生徒間でトラブルが起きた際には教師がお互いの意見を聞くことはもちろん、異なる言語や文化を理解し合おうとする姿勢を育てることが必要なのではないかと。最後の場面で生徒が「めんどくさい、わがまま」とディエゴを表現している。確かに支援が必要な状態を負担に感じることはあるかもしれない。ただ、考え方や文化の違いを受け入れるためには不可欠なステップだと私は思う。学校生活を共に送る上で、互いの価値を認め、差別や偏見なく関わる環境を作るきっかけ作りに教師が果たす役割は大きい。ただ「いけません」「仲良くしなさい」と指導するのではなく、なぜ文化が違うのか、なぜ差別してはいけないのかを生徒の視点に立って伝えていくことが必要だと感じた。

<ユヘの物語、在日コリアン>

在日朝鮮人の存在は、小学校や中学校の授業でも習った記憶がある。しかし、その歴史や現状を詳しく知らないのはやはり「存在が見えない」からではないかと感じた。後半の場面で、ユヘが「学校にはいじめ、社会では差別や偏見がある」と話している。同じ人間そして日本社会で生活しているはずであるのに「生きづらい」状態を強いてしまうのはまさに人権、文化の侵害だと考える。戦後日本に残った朝鮮人への蔑視、差別がいまなお続いていたり、理解が深まらなかったりすることには学校教育や周囲の大人の影響も大きいのではないだろうか。私も多文化共生についての知識や学習を積み重ねているつもりだが、幼少のころ祖父母に言われた「左利きはチョン（朝鮮人）だから直しなさい」という言葉が忘れられない。子供は大人より自分と異なる文化や言語を柔軟に受け入れることもできるが、大人のそうした偏見や差別さえも受け入れてしまう。学校教育ではそうした在日コリアン、ブラジリアンの存在や歴史もふまえた上で「多文化・多言語」社会のなかで暮らしていくことにさらに重点を置いた学習を推進するべきだと感じた。

<多文化共生と学校教育、支援について>

この冊子を読んで、良くも悪くも子供にとって周囲の大人や環境が差別意識、偏見に大きく影響することを学んだ。文化や言語の違いを知るだけでなく、違いがあっても気にすることなく一緒に生活することが最終的な理想だと思う。教育を学ぶ者として、多文化共生を子供にどう伝えていくべきか、今後も学習していきたい。

多文化共修科目 B

課題: まんがクラスメートは外国人の感想文

「出身はどこの国ですか」、「何人ですか」などの質問は、人間の頭の中に国と国籍は繋がっているという考えが設定されているのを見られる。しかし、前から様々な理由で自分の国ではないところに住んでいる外国人が多くいる。

人間は、生まれてから最初に獲得したことが頭の中に自動的に設定されて、その人の考えや行動に大きな影響がある。それで、それぞれの国は、独特な言語、文化、信念があることで、その国に生まれた人、海外に生まれてもその国の環境やその国の文化や考えを持つ両親に育てられれば、国籍に関係なく、別の環境に移動しても、獲得した考えや行動を持って成長する。その点で、『まんがクラスメートは外国人』に載せる話のように親に連れられた外国人の子供、海外で生まれ育つ外国人の子供は自分の国ではないところに住むとき様々な問題が起きる。

ディエゴの場合は、「外国に繋がる子」として新しい社会に入ったことである。ディエゴは自分の「アイデンティ」を守って、自分が獲得した出身の文化、考え方のままで新し

い環境に引越して、「異文化」や「違う考え方」で問題になった。しかし、人間は環境に合わせる工夫のスキルがあると思って、お互いに相手の心を配慮すれば、少しずつお互いの文化を学んだり、認めたり、して「何人」に関係なく皆一緒に平和に存在できると信じている。

一方、ユヘの場合は、「日本で生まれた外国人の子供」である。ユヘの場合は日本語もできるし、日本文化も慣れているので、生活の面にはあまり問題にならないと思うが、「アイデンティ」の面は問題があると思う。海外で生まれた外国人の子は、家族に出身の文化や考え方を厳しく教えても、生まれた国の環境に育てるので、自分の出身の文化や考えを 100 パーセントに獲得できると言えない。育ち環境（行き先の国）の文化を獲得してしまうか、自分の出身と生まれた国の文化をどちらも途中で獲得してミックスになってしまうか、自分のアイデンティティを 100 パーセント守ることは難しいと考えてる。

私も「外国に繋がる子供」ではないが、留学生としてクラスメイトに対しては外国人である。しかし、タイにいるとき、ちゃんと日本語も日本文化を学んだので、日本文化を理解して、日本に来たばかりのときはディエゴとユヘの話のようなことを体験したが、ディエゴとユヘの話ほどひどくない。そのため、「世界の異文化」に関する学ぶ必要があると思う。

ディエゴの物語

ディエゴは初めて日本に引っ越し、学校に入ったようだ。言葉の壁もありながら、文化的な相違点もある。転校生なので周りにこれまで会ったこともない人ばかりだということも含めて考えていくと、友達の中々作りにくい環境だと分かる。実は私も似たような経験をしたことがあり、ディエゴの悩みに共鳴する。私は小学生の頃、3回も転校した。一番最後の転校はイギリスからスウェーデンに引っ越したので、言語の面ではハードルがいくつかあった。ディエゴのように一言もしゃべれなかった状態ではなかったが、やはりクラスメイトの方が一段と勝っていて、劣等感を感じてしまった。今でも並みのスウェーデン人より少し劣っていると感じている。自分が転校した時に、クラスメイトは全員すでに仲良くし合ったので、その関係に入るのに苦労した。それなのに、十分に友達を作り、スウェーデン社会に割とスムーズに入ったと思う。ディエゴの場合は確かに難しいが、時間の経過につれて言葉の壁が段々崩れていき、日本文化に慣れるので、最初の段階は率直に言えば仕方ない状況だと思う。それにもかかわらず、仲間外れやいじめは絶対に許してはならない。

ユヘの物語

外国らしい名前を持ち、外国人だと思われることが世界のどこにでもあると思う。外国人かどうかを尋ねる人は、大体、悪意を持っていないので悪くないと思うが、聞かれるのがいやな人がいるので、私は人口の混ざったスウェーデンやイギリスにいる時はあまり出身

のことを話題にしないことにしている。

一方、ユヘが日本生まれ日本育ちなのに自分のことを外国人だと思っていることを不思議に思う。私は高校では、スウェーデン生まれのベトナムと中国のハーフのクラスメイトがいて、どちらかというとそのクラスメイトの方が「スウェーデン人」という呼び方がふさわしいと思う。なぜなら、あの人は生まれも育ちもずっとスウェーデンだったし、私は白人であっても生まれも8年間の滞在もイギリスだったので、自分のことを普通のスウェーデン人だと思わない。しかし、見た目だけから判断を下してしまうと、私の方がスウェーデン人らしいと言う人が少なくないだろう。アイデンティティを先祖の由来に任せるのではなく、自分の生きた人生で作るべきだと思う。

マンガクラスメイトは外国人感想文

私の専門は数学教育です、色々な学生を教えた、例えば皆同じ教科書を使って、それぞれの考えが違います。

授業する前には学生の考えを理解します、学生の思考を把握する後はちゃんと最適の授業を教えます。

外国人と交流するは同じな事です、世界中の国は沢山有る、文化や風習はそれぞれです、もしちゃんと理解しなければ、交流の時は様々な問題が行います。

例えばディエゴはドッジボールと言うスポーツが知らない、如何すれば全然解らない、そしていきなりボールで頭に直撃する。

ディエゴが怒るは当然の反応ですが、でも皆がディエゴを責めている、加えて先生がクラスメイトに謝るを要求する、きっと苛められると考えている。

台湾は最初で中国の領土に加えたのは清でした、この前は色々な国に支配しています、更にこの先には既に「生番」と呼ばれる原住民達が住んでいた。

中国の政府は外国の人を皆追い払って、原住民の資源を奪って。

後に統治していた日本政府や今の中華民国は各自の言語を使って、民に要求した。中華民国は更に意見を持つ台湾人エリートを沢山処刑した、台湾の文化や方言はどんどん減っていた。

漫画の中のストーリーは沢山発生している、昔も今も。如何交流するのは皆が勉強しているの課題です。

ディエゴの物語を読んでどうして出身国が違うというだけでいじめられたり、周りの生徒と仲よく遊ぶことができないのだろうかという疑問が頭の中に浮かんだ。また、ディエゴの

物語で先生は最後に、そんなこと言っちゃいけませんとディエゴを擁護するような発言をしているが先生はどうしてそのようにディエゴがクラスで過ごしづらい、授業に出席したくないと思う前にディエゴにもう少しちゃんと寄り添ってあげられなかったのだろうかと思ふ疑問に思う。そもそもドッチボールでボールを顔面に当てられディエゴが怒って先生が「ディエゴ暴力はいけません」とディエゴを制しているが、先生はディエゴがドッチボールをそもそも理解していなくてなじめていなかったこと、他の生徒が悪ふざけでディエゴにボールを当てようとしていたことを知ってあの発言をしたのだろうか。そのようなことを知らず、またディエゴの気持ちを理解しようとせずに出ディエゴを怒るのはおかしいことだと思ふ。日本の文化と外国の文化が違うということをもっと意識すべきだし、なにより相手のことを知りお互いのことを考え、自分の気持ちを伝えあうことが大事なのではないだろうか。また、この物語を読んで多くの人が「外国につながる子供たち」に対する理解をもっと深めるべきだと思ふ。ユへの物語を読んで約 60 万人の朝鮮人が日本に戦争後も残ったことを知りとても驚いた。

戦争後故郷に帰っても植民地の支配で生活基盤が破壊され生活のめどが立たないなどという理由で朝鮮に戻らない、あるいは日本政府が帰国のための支援をせず彼らが日本で稼いだお金を持ち帰ることも制限したために挑戦に帰れなかった、いわゆる在日朝鮮人がとても多くいることは知っていたがまさか 60 万人もいたとは知らなかったし予想をはるかに超えた。また、戦時には植民地のひとびとに日本語を強要したり、「創氏改名」を行い日本的な名前に無理やり変えさせる同化政策が行われていたことは知っていたが終戦から何十年も経過している現在にもその影響は及んでいることをこの物語で知り日本は本当にとんでもないことを戦時中に朝鮮人はじめ様々な外国人に行ってきたのだと実感するとともにとても悲しくなった。物語の中でユヘが「本当の名前を名乗ると日本では生きにくい」と語っており、本当の名前を明かすと学校でいじめられたり、社会に出ても就職差別を受ける可能性があるために自分の本当の名前を隠しながら生きていることを知った。なんで日本が朝鮮人に対して悪いことを一方的に行ったのに、自分の本当の名前を隠さないと生きづらい生活を被害者である多くの在日朝鮮人がしなければならないのかと、とても疑問に思った。

『蒼のシンフォニー』を見た感想文

『蒼のシンフォニー』を見て、いろいろ勉強になった。朝鮮学校と在日コリアンのことにもっと詳しくなった。朝鮮学校は、日本で生まれ育った在日コリアンのこどもたちが、民族の言葉や歴史、文化などを学ぶ学校である。生徒たちは高校 3 年生になると、“祖国”である朝鮮民主主義人民共和国を訪問する。映画はその“祖国”への訪問を物語った。

周知のように、今朝鮮半島は大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国二つの国がある。なぜ映画の中の生徒たちにとって、“祖国”は北朝鮮なのか。この間、私は授業の課外活動で、一つの朝鮮学校を訪ねた。学校のポスターやスローガ

ンなどを見ると、朝鮮学校は確かに北朝鮮に親しい。インターネットで調べると、歴史的や政治的な原因があって、とても複雑だ。でも、映画は一つの原因を教えた。北朝鮮は日本の朝鮮学校に援助費をあげることである。日本政府は朝鮮学校を「高校無償化」から排除するというので、北朝鮮からの援助は大切そうだ。「高校無償化」からの排除だけでなく、今朝鮮学校も「幼保無償化」から外されたそうだ。多民族社会で在日コリアンの問題はまだ深刻らしい。映画の中で、生徒たちは北朝鮮の姿を自身の心と体で感じ取った。私も目で北朝鮮を感じた。生徒たちはとても親切に招待された。一番印象深いのは生徒たちが朝鮮の芸術学校を訪ねた時のことだ。生徒たちは一緒に歌を歌ったり、運動会を開いたりして、仲良くなった。私は生徒たちの笑顔に感動される。離れた時、みんなが泣きなした。子どもたちが“祖国”の愛を感じたと思う。

生徒たちは在日コリアンの問題をすごくわかる。問題改善のために自分なりに努力している。ある生徒は、社会がもっと朝鮮学校のことを注目してほしいために、コンピューター入力の大会で連続優勝を取った。多くの生徒は教師になり、民族教育を守りたがる。朝鮮学校の生徒たちは学校を信頼し、愛する。生徒たちは自分が受けた以上の愛を子供たちに届けたいと言った。とても感動する。生徒たちがいつも笑顔をして、幸せになれるように祈る。

多文化共修科目 B レポート課題

今回の多言語多文化を主題としたレポート作成に際し、公用語が約2つ存在し、島々によっても異なる言語が用いられているフィリピンについて述べて行きたいと思う。フィリピンに着眼した理由としては、自身が夏休みを利用し、フィリピンのセブ島に旅行へ行き、様々な言語が飛び交う様子を目の当たりにし、日本で生まれ育った私にとっては衝撃的な体験をしたため、また来年の8月よりフィリピンの大学へ交換留学が内定しているため、タガログ語と英語を勉強しており、より詳しく言語事情を調査してみたいと考えたからである。フィリピンは、7000以上の島国から形成されており、タガログ語を主体としたフィリピン語を母語とし、その他準公用語として英語、他にもセブアノ語、イロカノ語、ヒリガイノン語、ビコール語、ワライ語、パンパンゴ語、パンガシナン語等数多くの言語が認識されている。以下、言語と人口の割合である。

1位

タガログ語

25.12%

2位

セブアノ語

21.44%

3位

イロカノ語

8.68%

4位

ヒリガイノン語

8.12%

5位

ワライ語

3.54%

(出典：Philippine Statics Authority)

これだけ数多くの言語が存在する為、母語をフィリピン語とする人口は全体の4分の1という事実から、フィリピンの言語の多様性を伺う事ができる。多くのフィリピン人は、英語、フィリピン語、地元の言語と3カ国語を扱える人が多い。英語圏と近い距離ではないフィリピンで英語が用いられる原因は、過去にアメリカ合衆国が植民地としてフィリピンを治めていたからという事実が大きい。加えて、日本、スペインもそれぞれフィリピンの1部を植民地としていた時期があり、タガログ語の時間の数え方等にスペイン語の影響が出ている。私は、準公用語として英語を制定している国として、フィリピンだけではなくベトナムにも訪れたが、ベトナムでは街中の人に対しては英語はほぼ通じないという印象を抱いた。空港勤務の人や、ホテルマンなど、教養を必要とした職業柄の人々には問題なく通じた。フィリピンで英語が通じる理由として、積極的な言語教育の政策や改革が挙げられる。実施された、或いは現在も取り組まれているものとして、二種言語教育施行指針(1974年文部省令)や、「k to 12」と呼ばれる制作が存在する。二言語教育施行指針とは、1957年から1974年まで文部省による教育政策は、小学校の低学年(1、2年次)においては、土着語を教育用語として初等教育を施す、この間に教科目として英語を教える、小学校中学年(3年次)以降、英語を教育用語とすることに備えさせる、国語としてのフィリピン語を学校3年次より正規の教科目として教える、というものであった。また、「k to 12」に関して、これは、幼稚園(kindergarten)を義務化し、義務教育自体を2年間延長するというものである。早期の言語教育を目的とした政策である。また、過去は多言語教育に対しても積極的であったため、二言語教育施行指針の土着語教育がそれに当て嵌る。それぞれの地域の学校でそれぞれの言語が英語に加えて用いられている。また、共通した言語の強化として、タガログ語がフィリピン語と称され、共和国の公用語として、また初等・中等教育の教育用語として、さらに必修語科目として30年以上にわたり教授・学習されてきた。現在の言語教育や文化面でフィリピンが抱えている問題としては、職員自体の英語力の欠落、土着語の消滅などが挙げられる。職員の英語力低下に関して、英語の必要性を感じる機会の低下が考えられる。その為、英語を用いて教育する事が義務付けられていても、正式な英語を用いる事がないケースや、

別の言語を用いてしまう傾向にある。土着語の消滅に関しては、1974年以降、二言語教育施行の細目として挙げられたものにより、経費が嵩む等の理由により以前と比較して土着語教育の優先順位が下位に来てしまった。言語の消滅は文化の消滅と繋がりをため、非常に重要な問題であると考え。多言語多文化として成り立っている国であるからこそ、多様な方向性から言語教育を行い、文化を尊重する教育を施すべきだと考える。

参考

<https://philippines-university.jp/dialects-language-philippines/>

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AA%E3%83%94%E3%83%B3%E8%AB%B8%E8%AA%9E-1448803>

東南アジアの言語政策 その六 フィリピン共和国(二)

藤田剛正 著

長崎大学 東南アジア研究所 / The Research Institute of South Eastern Asia, the University of Nagasaki 出版

<http://hdl.handle.net/10069/26524>

年少者日本語教育フィールドワーク感想文

この度は日本の小学校での日本語学級の実態を見られて、とてもいい経験になったと思う。前は中国の大学の日本語授業と日本の大学の留学生科目しか体験したことがないから、今回は日本での外国のルーツを持つ子供たちに触れ合って、日本での年少者日本語教育にすこし実感してきた。

まず、教室の飾りはとても異国を感じられる。いろいろな国の国旗と言葉が見られた。教室の壁には子供たちとかかわりがある国の国旗とその国の言語で書かれた言葉が貼っている。教室の入り口に子供たちが書いた自己紹介が貼っている。子供の母語で書かれている。私は交換留学する時、一度東京学芸大学附属小学校に見学したことがあって、その時見た様子が結構違うと思う。小学生の年、日本語がそれほど上手ではない子だから、授業の時は大変騒がるのではないかと予想したが、みんなが大人しくて、先生の話をちゃんと聞いてくれた。

しかし、日本語がわからないふりをして、子供たちと日本語で交流できなくて、すこし残念だ。日本の小学校で、中国人の子と中国語で話せるのもとても珍しい体験であった。その二人の子の日本語能力が違うのは予想内が、中国語の能力も結構異なっていることに驚いた。男の子の中国語能力が女の子より強いとはっきり感じられる。そして、インタビューの際、同じグループの中に、中国語がわからない子供たちがやや冷たくてつまらない顔をしていた。そのため、中国の子もすこし他の子の反応を気にしながら、私と話していた。私はすこしその子供たちの状況を聞いてみたら、アメリカの子から、「あなた英語できる？」と聞かれた。私はすこし英語ができるけど、雑談するほどではないから、あの子はすぐ飽きてしまった。この学校は英語を特色にしているから、外国語の地位ランキングには、英語が一番高いだろうと考えられる。

そして、先生かたのお話により、確かに外国のルーツを持つ子供に日本語を教えるにはより実感できるが、その裏面には子供たちとその親たちの努力にも関係あるではないか。中国人の子たちは親に中国語の塾に通わせるのは、お金と時間を両方かかる。もし家庭が不富裕で、親が忙しかったら、その子供の教育は学校で完全に解決できないということになると考えられる。

「多文化ヒューマンライブラリーに参加して」

11月30日、世田谷区で行われた「多文化ヒューマンライブラリー」に参加した。人を本に見立てて対話をする「ヒューマンライブラリー」に参加するのは初めてで新鮮だった。対話した数冊から、特に印象に残った2冊の感想を述べる。

① 吉田さん 吉田さんは、バンコクで国際 NGO の職員として働いている。途上国の教育支援についての話を聞いた。吉田さんが国際 NGO の職員になるきっかけは、バンコク

のスラムで子どもたちが遊んでいる線路の上に麻薬使用後の注射器が落ちているところを見たことだったらしい。私は、子どもたちに安全な遊び場がないこと、子どもの身近なところに麻薬や犯罪があることに衝撃を受けた。吉田さんはそういった環境の中で、教育の重要性を考え図書館を設立する活動をしているという。スラム育ちでありながら首相の通訳を務めたオラタイさんは、図書館に通うことで夢を叶えたという。私は、生涯学習コースで図書館司書の資格取得のために勉強している。経済状況や環境に関わらず平等に知識を得ることができる図書館の重要性を改めて感じた。また、日本から多くの支援がなされていたスラムの地域で、東日本大震災が起きた際募金が行われ、一日で100万円集まったという話も印象的だった。

スラムに住む人々は自分の生活に手いっぱいだというイメージがあったが、もしかしたら競争に追われる先進国の人々よりも優しさを持っているのかもしれないと思った。国際協力は豊かな国から貧しい国に一方的に支援をするものだと思っていたが、経済的な貧富の関係ない助け合いにつながるのだと知った。

② ミルトンさん ミルトンさんはコロンビアで生まれ、麻薬が蔓延する母国に嫌気がさし24年前に来日した。その後超過滞在者として入管に収容された。長期収容と再収容を繰り返し、命を奪われる可能性があったため難民申請を何度もしたが、未だに認められないという。まず私は、日本がどれほど安全な国であるかを知った。吉田さんの話にもあったが、子どもの頃から麻薬や犯罪を身近に感じることはなく、テレビを見て存在は知っているが自分とは違う世界の話というイメージだった。また、難民についても考えさせられた。日本は難民の受け入れに消極的であるし、国際的にも難民とされるのは紛争や迫害などの場合のみとなっている。ミルトンさんは犯罪を密告したところ、釈放された犯人に命を狙われ首元にナイフを当てられたという。同じように命の危険がある中で、難民申請が通らないのは本当に正しいのだろうかという疑問に思った。しかし、申請をすべて受け入れるときりがないことや日本に受け入れの体制が整っていないことを考えると、簡単には結

論を出せない難しい問題だと思った。

朝鮮学校訪問感想文

2019 年 西東京朝鮮第一初中級学校 学校見学の感想

私にとって初めての朝鮮学校への訪問の機会となった。以前から朝鮮学校の存在を知ってはいたが、身近に通学する人も知らず、漠然と在日コリアンの子どもが通う学校という知識しかなかった。今回の学校見学、授業公開で多文化共生への新たな疑問や気づきが生まれ、改めて在日外国人問題への関心が高まったと感じている。特に3つの点を中心に感想と自分の考えをまとめておきたい。まず一つ目は、母国語教育について。校内の掲示物は主にハングルで書かれており、生徒の自己紹介等も1年生から中学3年生までハングルであった。授業も朝鮮語で行われていたが、唯一「日本語」の授業では黒板の板書、発言も朝鮮語を使わない形態をとっていることに驚いた。日本では中学生になっても英語の授業では日本語をベースに展開し、主に文法や単語を学ぶのに対して、朝鮮学校では詩の朗読や発声など実用的な面を重点的に学んでいると感じた。これはやはり生活基盤が日本であり、テレビや買い物など日常的に接する言語が日本語だからなのではないか。実際、教室で友達とは朝鮮語で話し、廊下で保護者とは日本語で話すという生徒も多くいた。多言語を習得しながら学習することには学力以外のメリットもあるはずだ。しかしある本で、朝鮮学校に小学生から入学する場合には、朝鮮語がわからず学校になじめない、日本語を使うことが「悪」のように感じてしまうことがあると知った。言語

は学習だけでなく社会生活全般にも影響を及ぼす。朝鮮学校の生徒が母国語（朝鮮語）と外国語（日本語）をどう捉えているか関心を持った。次に二つ目は、朝鮮学校を卒業した後の進路について。授業内容は日本の小中学校と大きく変わらず、英語や歴史、家庭科なども学習していた。ただ、中学2年生の英語を見学した際、日本の学習進度より遅れていること気がかりだった。当然日本の学習指導要領に沿っていないはずなので問題はないと思うのだが、子供たちにとって朝鮮高等学校、朝鮮大学校以外の進路を考えた時に支障は出ないのだろうか。もちろん民族教育や言語教育は重要だ。しかし日本社会で生活するということは、社会生活全般を通して日本人と同じ環境で生きるということだ。未だ学歴社会意識が根強い日本では、就職や進学に支障が出ないともいえないと感じた。朝鮮学校で学んだ子供たちが社会に出た時、在日コリアンであることを隠したり、不要な差別を受けたりするのでは民族教育の意味がなくなってしまうばかりか、新たな対立を生みかねない。調べたところ、現在では朝鮮高級学校を卒業し、朝鮮大学校に進学せず一般の大学を受験する場合、高卒認定試験を受験しているという。進学の選択肢が国籍や金銭によって狭められてしまうことがないよう、朝鮮学校の生徒にも日本と同等の卒業資格を与えるなどの対策は講じるべきか否か考えた。朝鮮学校がいわゆる一条校でないということも絡む複雑な課題だが、必要不可欠な議論だと思う。三つ目は幼保無償化問題について。見学の後説明会に参加し、現状や今後の課題について講話を伺った。現在の日本は奨学金の拡大などで「学び」を応援しているかのように見える。しかし「学び」は「育ち」の上に成り立つものであり、「育ち」の支援なくして「学び」

は促進されないだろうというのが私の考えだ。この観点からすると、朝鮮学校が幼保無償化の対象外とするのは「育ち」の阻害なのではないかと感じる。今回の説明会で初めて知った国の対応を考えると、確かに財源や制度の壁はあるかもしれないが現状のままでは「民族差別」と捉えられてもおかしくない。無償化の目的は「子供の健やかな育成と保護者の負担の軽減」であり、ここに国籍や障害の有無等の差別があってはならないはずだ。朝鮮学校の掲示物や保護者の話を聞いて、いかに地域との触れ合いや朝鮮文化の発信に力を入れているかも理解できた。多文化共生を推進していく社会になるためには、まず産業やビジネスではなく、教育の分野から制度とともに変わる必要があると私は考えている。幼保無償化問題はその壁を越える第一歩になるはずだ。今回説明会に参加していた保護者の方々のように、無償化への熱い思いを他人事にせずこれからも考えていきたい。

今回の朝鮮学校訪問を通して、いかに自分が幼保無償化、在日コリアンの歴史、朝鮮学校の現状に無知であったかを感じ、大いに反省している。しかし実際に授業や生徒の様子を見学して新たな考えや疑問を持つことができた。ただの見学で終わらせず今後の学習に生かすために、自分の専攻である社会福祉と関連させてさらに深く学んでいきたい。

～朝鮮学校に実際に行って学んだこと～朝鮮学校が東京にあることを知ってはいたが実際に立川の学校に行くまでは全く朝鮮学校がどういうものかすらあまり理解していなかった。そもそも朝鮮学校はみんな親が朝鮮人で韓国語を母語として話す子供たちが通っているところだと思っていた。しかし実際は全く異なった。親は日本人という生徒や韓国語ではなく日本語を第一言語として話す生徒もたくさんいることを知ってとても驚いた。また、幼保無償化説明会で司会の人も長時間説明していた人も幼保無償化関連について質問していた保護者の方たちもみんな韓国語ではなく日本語で話していたことにも驚いた。しかし学校のなかでは生徒は日本語でなく韓国語で話していた。廊下で自分たちにあつた時も韓国語であいさつしてくれた。また、友達と話しているときも韓国語を使って楽しく話をしていた。授業も韓国語で行われていた。しかし日本語の授業になるとそれまで韓国語を話していた生徒たちがいきなり流ちょうに日本語で会話

したり日本語で先生に質問していたりと急に变化した。発音やイントネーションもおかしいところは見られず音読も声が小さいというような点はあったがみんなとても上手に日本語で音読していて先生の質問にも積極的に挙手して日本語で答えていて日本人学校の授業参観の様子とほぼ同じものだった。そのようなほかの授業では韓国語で話していた生徒が日本語の授業になった瞬間变化した様子を見てとても驚いたとともに言語の使い分けがこの年齢でできてしまうのかと感心した。さらに自分たちを驚かせたのは彼らが使っていた日本語の教科書だ。日本語の教科書には韓国語は一文字も記載されていないページがほとんどで自分たちが学生だった時に使っていた国語の教科書とほぼ同じではないかと友達と話していた。日本人が英語の授業で使う教科書は英語の単語や文章を説明したり補うものとして日本語が記載されているのが普通だ。日本語で書かれていないと英語だけではとてもではないが理解できないからだ。しかし朝鮮学校の日本語の教科書には全く韓国語が見当たらない。それで日本語を学ぶことができるのだなあとても驚き、また彼らが学ぶ日本語のレベルが想像していたよりもずっと高くて驚いた。実際に朝鮮学校に行ったことで今までの自分の朝鮮学校に対する理解がとても浅いものであったなと感じさせられたとともに、朝鮮学校に通う生徒の学んでいる内容や朝鮮学校についての詳しいことをいろいろと知ることができたので行ってよかったなと思った。

朝鮮学校見学の感想

朝鮮学校を見学して最も印象に残っているのは言語の使い分けです。"日本語"の授業時間以外は教師も生徒も韓国語を使っており、その使い分けが生徒同士の会話や話し合いなどのやりとりにも反映されていて驚きました。しかし、その中で教師が「そうだね」「うん」といった日本語で生徒の回答に反応していることが多く、韓国語に同じような表現が存在しないのか、もしくは自然と使っているのかという点が気になりました。また、机の並べ方などが日本の学校と似ていたため、韓国(朝鮮)本国ではどうなっているのか調べたところ、同じようになっていることがわかりました。この点はギャップに苦労することがなく高等学校などに進学する際に適当しやすく良いと思います。一方で、ブラジル人学校など、本国と日本の"学校文化"があまり似ていない場合はどうしているのかという疑問をもちました。これは見学と直接関係ありませんが、朝鮮学校の教員の採用をどのように行なっているのかという点にも非常に興味をもちました。免許制度があるのか、教育実習は行うのか、人材不足などの問題はあるのかななどを今後調べていきたいです。

西東京第一朝鮮初中級学校訪問 感想

私は長野朝鮮初中級学校出身であり、他の地域の朝鮮学校の様子を見てみたい、また、日本の友達と共に訪れることで、朝鮮学校についてたくさん説明してあげたいという気持ちでこの訪問に参加しました。外観や校舎の中の様子は出身校とあまり変わらず、生徒たちの授業の様子や廊下の装飾なども似たような印象を受けました。一緒に参加した友達は、子供が流暢に日本語と朝鮮語の両方を話すことに驚き、朝鮮語であふれる教室に新鮮な印象を受けていたようでした。私は実際に通っていたのでこの環境が当たり前のように過ごしてきましたが、日本の友達からすると、まず在日朝鮮人という存在がどのようなものか正しく分からず、子供たちがなぜ少数ながらも朝鮮学校に通うのかも疑問に思っていたそうです。そのような人たちが、朝鮮学校の実際の様子に触れて、子供たちが生き生きと学んでいく姿を見てくれて、自分の立場からするととても嬉しかったです。現在、朝鮮学校の数は減少しており、同時に生徒数も激減しています。朝鮮学校に対してネガティブな印象を抱く日本の方もいると思うし、今も無償化問題などの差別は続いています。私はこの問題を解決するためには、今回のこの訪問のように、実際に日本人との交流を行ったり、朝鮮学校の様子をみてもらうことで、在日朝鮮人という存在を理解してもらうことが大切だと思っています。これからの時代では、ただ在日だけのコミュニティの中で抗議していても、日本での友好な関係は築けないと思います。私は今回の訪問のように、自分のこの立場を生かし、日本に暮らす人と在日朝鮮人の架け橋のような役割を果たしたいと考えています。そのためにこれからもこのような活動に積極的に参加し、または自分の力でも企画したりして、もっと多くの人に朝鮮学校を身近に知ってもらえるように尽力したいと改めて思いました。

朝鮮学校訪問感想文

以前に小学校や中学校を何回か訪問したことがあるが、この課外活動を通して、初めて各種学校を訪れることができた。朝鮮語は一言もしゃべれないで中々授業内容についていくのに苦労したが、これまで未知の学校状況をある程度覗き込めたと思う。私自身は母国でも外国のバックグラウンドを持っているのに各種学校に通ったことがなく、いつも普通の国立学校に通ってきた。各種学校を体験できてうれしい。科目ごとに先生も生徒たちも言語を切り替えてすぐに対応していたのが印象に残った。生徒たちの日本語と朝鮮語の手際のよい使い分けにも驚いた。英語の授業で流れた音声ファイルに多少不自然で強調の間違った英語を聞いた。先生の見せた単語では逆に強調がちゃんとを表す記号がつけられてよかったが、やはり音声ファイルや先生の発音には微妙に違和感を感じた。廊下の方にはテレビで流れていた生徒たちが自分で作ったストップモーション・アニメーションも非常に面白かった。幼稚園が無償化されたのを当日の説明会で初めて聞いて、朝鮮学校側の主張がよく伝わって、理解できたと思う。私の考えでは、幼稚園と小中学校だけでなく、幼稚園から大学まで全ての教育は無償化されるべきだ。なるべく公平な社会を築き上げる

ために、仕事や社会進出の根拠となる教育を公平に受けられる環境を作るのが最も重要だ
と思う。したがって、朝鮮学校の無償化運動に成功を祈っている。

多文化共修科目 B 課題「朝鮮学校見学を終えて」

私は群馬県出身で、通っていた中学校の近くに朝鮮学校があった。たまにその学校の近く
を通っていたのだが、学校の壁にハングル文字が書かれていたり校庭が高いフェンスで
囲われていたりしたこと、朝鮮学校自体に近づきたい雰囲気を感じていた。しかし今
回西東京朝鮮第一中学校を訪れたことによって、私のその考えは見事に吹き飛ばされた。
まず私が驚いたのは、先生はもちろん生徒やその親も朝鮮語と日本語を使い分けられて
いたことだ。先生が朝鮮語と日本語を使い分けるのは、生徒に教える上でとても重要なこ
とである。しかし、生徒や親でさえも使い分けられるのは予想していなかった。私が生徒
に話しかけられたのは、韓国料理・ホットクを食べるかどうか聞かれた時だった。最初は
朝鮮語で話しかけられ私が困惑していたら、親に朝鮮語で「その人は日本人だ」と言われ
らしく、日本語で「ホットク食べますか？チーズとあんこがあるけど、どっちがいいで
すか？」と流ちょうな日本語で聞かれた。日本語の授業があつたり家庭で日本語を話す機
会があつたりするとは思いますが、まるで日本人の両親のもとに生まれ日本で生まれ育ったか
のように日本語が口から出てくる様子は私を戸惑わせるほどのものだった。また、社会の授
業の時に朝鮮語でまぐろと言った後に日本語でまぐろと言っていた。私は、授業で日本語を
学ぶよりも日常の会話で日本語の勉強をした方が自然と頭の中に入ってくると考える。

また、私は最近多文化に関する授業を受ける機会が多いが、それらほとんどで教えられ
るのは日本にいる外国人のアイデンティティの問題だった。例えば、外国人が日本で暮ら
すうちに母国の言語や文化を忘れてしまうことがあるという。しかし西東京朝鮮第一中
学校では、先生がチマチョゴリを着ていたり家庭科の調理実習で韓国料理のホットクを作
ったりしていた。朝鮮人である児童・生徒が母国のことを誇りに思うことは、日本に暮ら
す外国人として大切なことだと考える。身の回りから母国の文化を自然と吸収出来ること
は、改まって学ぶよりも子どもたちにとって良いことだと思う。今回の朝鮮学校見学を通し
て私が思ったことは、多数の国の人たちが共に生きていくためには相互理解と譲り合いの
精神が大切だということだ。多文化共生において、互いの国やその文化を理解しようとす
る姿勢は必須である。それが多文化共生の第一歩であるし、要だからだ。私がそれに加
えて必要だろうと考えているのが、考えを譲り合うことだと考える。異なる国・文化を持つ
人間同士であるから、そこには当然齟齬が生じる。その時に
争ったり反対に皆引いたりするのではなく、「この国はこうだから今回はこうしよう」な
ど譲り合うことによって互いに対して更なる興味・関心が出てくるだろう。私は外国の
人に遠慮してしまうことがある。しかし、きちんと話をして相手のことを知ることによっ

皆が心地よく暮らせる社会になると思う。今回の朝鮮学校見学で、多文化共生の第一歩として「知ろうとすること」が重要であると理解できた。今度は私が周りの人に教える番だ。

西東京朝鮮第一初中級学校・附属幼稚班訪問の感想

今回の在日朝鮮人学校の訪問は私にとって初めてのことであり、大変貴重な経験となりました。朝鮮人学校というものがあるということは今まで聞いたことはあったのですが、詳しいことは何も知りませんでした。さらに、私は今まであまり朝鮮人と関わったことがありませんでした。したがって、朝鮮人学校で見るものはその多くが私にとってはとても新鮮なものでした。まず、私にとって1番驚いたことは学校ではほとんどのことが朝鮮語が使われていたということでした。授業や掲示物、子どもたちの日常会話までもが全て朝鮮語でありました。正直、朝鮮語に触れたことの無い私にとっては何もわかりませんでした。しかし、授業の中では日本語の授業というものも行われていて日本で生活する上では必要となる日本語の学習も行われていました。また、女性の先生や中等部の女子生徒は韓国人女性の正装であるチマチョゴリを着装していたことにも驚きました。もしかしたら、学校参観だということで正装をしていたのかもしれませんが、初めて見た私にとってはとても刺激的でした。これらのことを踏まえて、私は在日朝鮮人学校は朝鮮の文化や言葉を大切にするという異文化尊重において重要な役割を担うのではないかと考えました。朝鮮を離れて、先祖たちが日本という異国の地に来たとしても、朝鮮という故郷の文化や言葉を尊重し、自分たちの子どもや子孫へ朝鮮という故郷の教育を受けさせて、郷土愛や多文化理解を進めるということは非常に素晴らしいことだと思いました。授業で受けたように、昔は朝鮮人たちは日本で差別やいじめを受けていたという事実もあったようですが、今回訪問した西東京朝鮮第一学校の子どもたちは自分たちが朝鮮人であるということを誇りに思い、文化や言葉を大切にしているように感じました。また、このような学校での教育や取り組みをもっと日本人は知っていくべきだと考えました。私を含め、多くの日本人はこのような在留外国人学校のことを知らない人が多いと思います。しかし、外国人学校ではその国での文化や言葉を尊重し、日本にも適応できるような日本語教育も進められています。これらの実態を見ていくことで、日本人は多文化共生の考えも広まっていき、異文化理解やエスノセントリズムの解消にも繋がっていくと思いました。朝鮮人学校側は幼稚園の無償化に当西東京朝鮮第一学校は含まれていないと言っていましたが、日本全体がもっと在日外国人学校についてのことを知り、理解が深まっていくと在留外国人学校もその他の一条学校と同じように考えられていくのではないかと考えました。将来、学校の先生を目指している私としては、これからも、いろいろな外国人学校などを見て行って多くの実態や現状を把握していきたいです。

朝鮮学校見学の感想

はじめに 11 月 16 日に国立市の西東京朝鮮第一初中級学校へ見学に行った。学校では幼稚園から中学校のクラスが設けられている。今回はわたしの日本の学校参観の初体験で、いろいろ驚き、そしていろいろ勉強した。自分が多言語社会、あるいは多文化社会との繋がりについてより高い理解ができた。同行者のいろいろな国からの方とも交流でき、意味深い課外活動だと思った。

1 学校生活について キャンパスの構成とスケジュールは日本の普通の学校とほぼ同じだが、先生たちがチマチョゴリを着て授業するのにインパクトを受けた。小学校までは西洋式の制服をだったが、中学校から女の子たちもチマチョゴリを制服としてきているのを感じた。アイデンティティが意識されるように学校と親側の考えを持ったと思う。授業参観で、中学一年の家庭の授業が一番印象に残った。授業で朝鮮(韓国)の屋台料理を学生たちに作らせた。日本で見たことのない料理だった。

2.言語教育について 校内の張り物で書く言語は三つあると最初に気づいた。英語、韓国語、日本語の授業にも参観した。三つの言語の中で平気に暮らしている学生と先生たちを見て、感心した。そこで疑問と思ったのは、彼らにとっての母語、母国語、外国語などの概念はどう言うものなのか。混乱する時があるのか。自分の中で二つ以上の文化がある彼らは、どうやって取り入れているのかを気になった。

3.幼保無償制度からの除外について 日本の幼保無償制度が行なっていると以前から少し知っているが、外国人学校が外れているのが初めて聞いて、驚いた。わたしから見ると、朝鮮人学校の学生たちは日本人とほぼ一緒だが、福祉制度は一緒ではないのが不思議と思うからだ。そこで意識したのは、育たれた文化は一緒だとしても、国籍の制限は消えていかないということ。スピーチをした先生は「差別」ということばを使っていたが、それを聞いた学生たちはどんな気持ちだろう。福祉の差別は見られるが、日常生活にも差別が見られるかも知らないと思ってしまった。その差別を避けるには、彼たちはアイデンティティを捨てることになるかも知らない。それは多言語社会、あるいは多文化社会に適していないに違いない。スピーチに使ったパワーポイントで見たデータでは、朝鮮人学校だけではなく、他にもいろいろな外国人学校が存在するのがわかった。中にも在日コリアンが特別性が持っていると思う。彼たちは先駆者にも言えると思ったので、応援する気持ちもあった。

終わりに マイノリティの生き方について、ヴァイアリングのことも生き方について新た

な考えができた。多文化社会の構築には一人一人の力が必要とされていると意識した。

朝鮮学校訪問の感想 11月16日に、先生とクラスメートと一緒に西東京朝鮮第一初中級学校を訪問して、いろいろ勉強になりました。この学校は大きくないですが、幼稚園から中学三年までのクラスを開設していて、運動場や生徒向けの娯楽施設などもあります。きれいな学校だと思いました。一階の廊下で、生徒たちの教科書を展示していました。私の目を引くのは家庭科目の教科書でした。中には食べ物を作ったり、かばんを編んだりする内容があります。面白そうです。中国の学校では、このような家庭科目はほとんどないです。日本語科目の本以外の教科書はすべて朝鮮語で書かれます。先生の紹介によって、日本語科目以外の授業も朝鮮語でします。朝鮮学校は母語を大切にすることが分かりました。9時50分に、授業が始まりました。教室に入って、壁に子供の絵や笑顔の写真などを貼ってあることに気づきました。教室をきれいに飾って、温もりを感じられました。授業で、先生はpptや写真を使うことだけでなく、道具もたくさん使いました。歴史の授業で、先生は古代の橋のモデルを持ってきて、生徒たちに近く見させました。生徒たちはよりやすく理解できて、とてもいい方法だと思いました。初1の国語の授業で、子供たちは歌いながらハングルの発音を勉強していました。すごくかわいいです。私も知らないうちに子供と一緒に歌いました。家庭の授業で、生徒たちはホットケーキを作りました。そして、見学していた私たちにシェアしました。美味しかったです。授業参観を通して、学校は実践を重視することが分かりました。昼に、学校の幼保無償化説明会に参加しました。日本政府は外国人学校幼児教育施設を「幼保無償化」から外すことについて紹介しました。印象深いのは「就学前の子供の成長にとってかけがえのない時期に、母語・継承語で幼児教育・保育を受けられる権利、自己のアイデンティティを育む教育を受ける権利を奪うことになる。」という話です。在日朝鮮人の問題の理解が深まりました。

多文化共修科目 B 朝鮮学校訪問感想文

朝鮮学校を訪問して驚いたこととして、日本語の授業をすべて日本語で行っていたことがあります。私はてっきり朝鮮学校に来ている子供たちはみんな朝鮮語しか話せないから朝鮮学校に通っているのだと勝手に思っていたのですが、後で先生に聞いたところ、朝鮮学校に通う子供たちは基本的に日常会話は日本語であり、朝鮮語(国語)は第二言語であると知りました。ということは、英語は第3言語であり言語学習において日本の普通の学校とは違うのだと思いました。そして、日本語が第1言語なのなら日本人が通う学校に行けばいいのとも思いましたが、よく考えてみると、日本の学校では朝鮮語を学べない。朝鮮語を学ぶことは日本に住む朝鮮人にとってとても大切なことであり、朝鮮語を学ぶことで朝鮮の文化や、アイデンティティを守っていけるのではないかと考えました。1つ不思議

議に思ったことがあります。先ほど朝鮮学校に通う子供たちの第 1 言語は日本語であると書きましたが、子供たちが話しているのを聞いていると、韓国語で会話しているのがわかりましたし、挨拶をしてくれる子供の挨拶は「アンヨハスニカ」と韓国語でした。これはなぜなのでしょう。日常会話が日本語であるから学校ではできるだけ韓国語を使うようにしているのでしょうか。または日本語も韓国語も同じように話せるけれど、韓国語に愛着があるのでしょうか。すごく不思議に思いました。次に最後の説明会についてですが、最近になってやっと幼保無償化が実現したものの、やはりもっと前から導入してほしかったと思います。日本人だけの幼稚園保育園では認められていたのに、朝鮮学校やブラジル人学校だけ対象外というのでは差別です。話は変わりますが、説明会も、説明会の資料も日本語だったのはどういうことなのでしょう。気になるます。

ブラジル人学校訪問感想文

2019 多文化共修 B 群馬県太田市ブラジル人学校訪問を終えて

○Escola Pitagoras での交流を通してここでは主に日本で中高生にあたる生徒の皆さんと交流を行い、グループ内でさまざまな話を聞くことができました。日本語のレベルもそれぞれ異なり、「小学校は公立に通っていたため流暢に話せる」場合もあれば、「家でも学校でも生まれてからずっとポルトガル語しか使っていない」場合もありました。生徒同士の会話は全てポルトガル語でしたが日本語の授業で漢字を勉強したり、挨拶を覚えたり日本の文化を授業で学んでいること聞き、日本に親しみを持ってくれていることを嬉しく思いました。質問を通して新たに気づいたことは、学校外で母語を話すことに抵抗があるかと質問した際に、全員がないと笑顔で答えてくれたことです。また日本は道路や店も清潔で、親切な人も多く、言葉は異なっても住みやすいと話してくれました。長年日本で生活している生徒が多いからかもしれませんが、日本語が得意ではなくても友人との交流や学校生活を通じてうまく日本での生活とバランスを取っていると感じました。将来について聞いたところ、すぐに働きたい、留学したい、ブラジルに帰って仕事を見つける等様々でしたが学校でどれほどサポートを受けられるのか気がかりでした。日本では高校在学中に進路指導、就職を支援する制度が整備されていますがブラジル人学校を卒業する生徒の将来についてどれほど保護者、教師、生徒本人の連携があるのでしょうか。質問はできませんでしたが、支援制度や現状について今後調べていきたいと思います。また留学生の方が流暢な英語で日本語とポルトガル語の通訳をしてくださったのですが自らの英語力の至らなさを痛感し、やはり世界の共通言語である英語力はその文化、言語を理解し共有するうえでも不可欠であると思いました。反省して勉強し直します。

○日伯学園高野理事長のお話を伺ってブラジル

人学校で学ぶ生徒の課題や、支援制度の少なさ、行政との関わりについて学びました。特に保護者の就労や金銭面で子どもの環境が左右されてしまう現状は一刻も早く改善すべきだと思います。日本では子どもの貧困や引きこもりが近年の大きな課題として議論されていますが、外国籍の子どもの「学びたい」気持ちを支える制度の整備は後回しにされていると感じざるを得ません。労働力として大人を外国から集めても、共にやってくる子どもに十分な支援（教育）をしなければ、結局税金の徴収や治安の面でも長続きしない取り組みになると思います。そればかりか、ダブルリミテッドの話にもあったように自らのアイデンティティや言語、文化を失わせてしまうことは重大な人権侵害でもあります。保護者の不安定な就労や、精神的なケアの不足（愛情の飢え）の現状を知り、もはや学校や教育行政だけで対応できる問題ではないと感じました。しかし、自治体では公立の小学校できえ外国籍の子どもの対応が喫緊の課題であり、各種学校であるブラジル人学校の支援にまで手が回らない状況なのかもしれません。私は社会福祉を専攻に学んでいますが、このような現場にこそソーシャルワークの力が発揮できると思います。教師でも、自治体の窓口職員でもないソーシャルワーカーが家庭と学校、行政に介入し環境整備を支援することで、子どもにとっての「最善の利益」を守るべきだと感じました。子どもの学習や将来を支えたいのに、金銭や保護者の事情によって諦めざるを得ない日伯学園の現状があると知り、教師にならない自分がこの課題に対してどう向き合うか考えるよい機会になりました。「多文化共生」の前に、まずはひとりひとりの日本での生活を保障することが必要なのだと思います。親の経済力に頼りきらず、学校教師のボランティア精神に頼りきらず、子どもの学習意欲に頼りきらず、誰か（人）そして何か（金や制度）に任せきりにしない「多文化共生」という概念をこれから作っていくべきだと感じました。○総括今回の見学に参加して、いかに普段自分自身が日本人であることに甘んじているかを痛感し反省しました。多文化主義、多言語主義を学ぶ上で一番大切なのは違いや課題を知ることではないのかもしれませんが、今一番私たちに求められているのは日本という他者（他国）を排斥する風潮が強い国で、どれほど「自分と違う」ことを「当たり前」と捉えられるか、ということなのではないでしょうか。多文化問題に限らず、ジェンダーや障害の分野でも共通する考えだと私は思います。多数派が生きやすい国は、少数派にとって生きていることが辛いと感じさせてしまう国です。そしていつ自分が少数派の人間になるかわかりません。外国人労働者の現状についての話を聞いた時に、マイノリティの人、不利を被っている人を支えることは本当の意味で国を強くすることにつながると感じました。確かに手間やお金はかかるかもしれませんが、ですがそれを越える人の教育や仕事を守らずして、国の安全や子どもの成長は保障されないと思います。私は教師にはなれませんが、子どもやその家族が困難な状況に陥っても、その人が望む生き方を守ってゆける社会福祉の力を発揮できる人間になりたいです。今回の見学では、自分の多文化共生に対する価値観を見直す大切な経験を得ることができまし

た。岡先生、ガイドの富樫さん、参加者のみなさん、高野理事長、ブラジル人の先生と生徒の皆さんにここに感謝の意を表したいと思います。今回はありがとうございました。

ブラジル人学校訪問 感想

今回の群馬県太田市での課外活動では、おもにピタゴラスブラジル人学校での生徒たちとの交流、ブラジル料理バイキング、ブラジルマーケットでの買い物、日伯学園の方のお話を聞く機会など、様々な経験をする事ができた。

一番自分の印象に残っていることは、ブラジル人学校の生徒たちとの交流である。

学校の施設や授業の様子しか見ることができないと思っていたので、実際の生徒たちの生の声を聞くことができたのはとても貴重な経験であった。

私一人に対して生徒4人ぐらいのグループで、たくさん質問をした。私は主に、自分のアイデンティティについて、日本での暮らしのことについて、日本語のレベル、日本人との交流についての質問をした。一番驚いたことは、彼らのほとんどが日本語を話せていないことであった。彼らの中では日本で生まれ育った人も多く、日本での暮らしは長いはずである。しかし彼らによると、ブラジル人は集住しているため日本語を使わずとも生活できてしまい、学校の授業もほぼポルトガル語で行われるので、日本語を使う機会も少なく、日本人の知り合いもほぼないということだった。私はここで自分（在日コリアン）との大きな違いを感じる事となった。彼らの中には、日本語をしっかり学べてカリキュラムも整っている日本の公立学校に通ってみたいと言っている人もいて、日本における外国人学校が果たせる役割についてももう一度考えさせられた。

日伯学園の方のお話では、現状での外国人学校が直面している問題について、生の声をうかがうことができた。近年、様々な国から日本にやってくる人が多く、言語面で対応しきれないことや、先生やボランティアの数が足りないことなど、やはり現場では困難な問題が多いと感じた。一番印象に残ったのは、質問の中で院生方がお話していた、新宿区の取り組みについてである。新宿区では、外国にルーツを持つ子供たちへの様々なサポートが行われおり、通訳を制限付きでつけてあげることなどがなされているようだ。一番驚いたことが、その取り組みをするにあたっての考え方である、「幼い頃にしっかりサポートして日本語を学ばせてあげて、将来に立派な大人として働いてもらい tax として返してもらおう」ということである。こんな考え方を全国の自治体で持ってくれたらどんなに良いだろうと思った。

本日の訪問で、自分が知らなかった現場の問題について触れ、貴重な経験をする事ができた。今後さらに自分でも勉強して、考えを深めていきたいと思う。

ブラジル人学校訪問における感想レポート

11月21日に太田市の *Escola Pitagoras* と大泉町の日伯学園のブラジル人学校に訪問しました。私にとっては、そこが初めてブラジル人と会う機会となりました。まず最初に *pitagoras* に行くと驚いたことは、生徒のほとんどが日本語を上手く話すことができないということでした。私の感覚では、立川市にある朝鮮第一学校の子どものように、日本語と母国語を使い分けているものだと思っていました。しかし、実際はほとんどの生徒が日本語が上手く話せず、多くの場面で英語でのコミュニケーションをとることがありました。後々話を聞いてみると、彼らの家族はもちろん、ご近所やその住んでいる地域がブラジル人が集中して住んでいてポルトガル語を使う環境が確立しているということでした。つまり、生活範囲がブラジル人コミュニティ内におさまっており、住んでいるはずの日本の日本語に触れる機会が少ないとのことでした。このような閉鎖的な空間が成り立っているという事実に私は衝撃を受けました。また、他に私にとって驚きのことは、多くの生徒が生活的に苦しく、卒業後すぐはアルバイトなどの仕事に就きたいと考えていたということでした。恐らく、先に述べたように、日本語の習熟度的な問題もありなかなか進学という道を選択することが難しいということもあるのかもしれませんが、なにより、経済的に進学をするための費用を工面することができないということを生徒たちは口にしていました。ブラジル人一世の子孫たちが多くを占めているという場ではありますが、なかなか安定的な収入を得られるような仕事に就くことができなかつたり、継続的に仕事を続けることができないなどの理由で多くの収入を得ることができないということがあったようです。これらのことは、負の連鎖として繋がっていると感じました。ブラジル人コミュニティの中で生活が成り立っているために日本語が上達しないことがあり、そのために、日本人も多く通うような学校に進学できなかつたり、安定的に多くの収入を得られるような仕事に就くことができないなどの現象が起こって、それが後の子孫へも受け継がれていくのではないかと考えました。また、次に訪問した大泉町の日伯学園では理事長の高野先生から直接貴重なお話を聞けました。今受講している授業の中で聞いていたり、勉強はしていましたが、現実的な話を聞くとやはり、驚くことが多かったです。一番驚いたことはダブルリミットについてのことでした。ダブルリミットとは、幼い頃から使用している言語環境から別の環境へ連れてこられた子どもたちがその出生地の言語も連れてこられた異国での言語もどちらも中途半端な発達段階で切り替わったために上手く扱うことができないということを指します。実際、このダブルリミットは現在の在日外国人の子どもたちに多いとのことでした。多くの子どもたちが、両親や身内たちの都合で半ば強制的に異国の地日本に連れてこられた子たちについて当てはまりやすいものです。子どもが幼いうちであれば言語の上達も難しくは無いとの事でしたが、ある程度成長した子どもになればなるほど、新しく異言語を習得するのは難しくなるとのことでした。それこそ、このようなダブルリミットは先程から述べているような、進学・進路の不自由に繋がっていくと考えました。ま

た、朝鮮学校でも同じようなことを訴えていましたが、在日外国人学校ということで国や町などの行政からなかなか望み通りの教育における支援等を十分に受けることができずに、経済的に厳しい状態になっているとのことでした。

子どものことを考えると、将来の選択肢が狭まってしまっているという現実問題を聞いて、私は胸が苦しくなりました。ブラジルなどの当該国の政府と日本政府が協力して子どもの将来のことを考えたような支援にもっと力を入れていくべきではないかと考えました。私の周りを含め、今後、日本自体が多文化共生社会になっていくと考えられます。そのような子どもたちへも十分な教育を受けさせて選択肢や可能性をできるだけ広げてあげられるような社会になっていくことを願っています。そのためにも、今回の訪問での貴重な経験をいかして、将来、教育の現場に参加していきたいと考えました。最後に、個人的に驚いたこととして、ブラジル人男子のサッカーの上手さでした。ブラジル人の男子はみんなサッカーが好きなようでリフティングは想像以上に上手でした。サッカー大国ブラジルの国民性かな。と、自己解決していました。

最終受講者アンケート集計

回答者数 8 名

I. 留学生（日本人学生）と共に学んで、よかった点、改善すべき点をあげてください。

よかった点：たくさんの異文化や異言語に触れることが出来た／日本人の学生と会話ができよかったです。／自ら母国の話に基づき、互いに文化の違いについて話し合い、文化間の異同を明らかにすることができる。／他国の言語政策、歴史、考え方を知ることができた／日本人である私たちとの観点の違いや、言語についての解釈が様々であることを学ぶことができました。多言語文化を学ぶ上でとても参考になった。／日本人の方言や日本人の言語に対する考えが前より分かるようになりました。／今まで外国人と触れ合う機会があまりなかったため、外国の文化からどのように外国人と接した方が良いのかを学ぶことができた点／日本と海外の国の違いや文化を学べること／

改善すべき点：固定されたメンバーとしか交流が得られなかった／何度もグループで話したんですけど、名前さえ知らないクラスメートもいます。自己紹介とグループディスカッションの時、名札を付けたほうがいいと思います。／中国出身の留学生の人数が多かったため、話が限られていた。／日本語のレベルがみなさんとでも高かったのも、もう少しお互いに意見を交換したり、ディスカッションする機会があってもよかったと思います。／自分の母語と日本人の日本語などとの比較ができればなと思います／席が自由だったので、留学生は留学生、日本人学生は日本人学生で固まってしまい、期待していたようなコミュニケーションがとれなかった点。／もっと積極的にアクティブラーニングができれば、もっと楽

しかったと思います。

II. この授業の趣旨である「多言語社会」への理解とコミュニケーションができたと思いますか。

1. 多言語社会への理解が深められましたか。 はい 8 いいえ わからない

多言語社会の多様性、多言語主義、複言語主義、英語と母語、難民問題などの理解は深くなりました／前半の授業では、方言について発表し、そして、ゲストティーチャーの話も含め、多言語社会への理解が深められたと思う。／外国語だけではなく、手話や方言、琉球言語なども言語として考えるようになった。／海外からみた日本の言語について理解が深まりました。／一つの国で多言語の人々が暮らすことのメリット、デメリットを知ることが出来た。／ある程度は理解できた。

2. コミュニケーションができたと思いますか。 6 はい いいえ 1 わからない 1

クラスに中国人、日本人、韓国人、タイ人やスウェーデン人がいますから、普通できないコミュニケーションができたと思います／チームワークによって、色んな話を話し合い、コミュニケーションができたと思う。／ろう文化と手話のゲストの方と少しだが一対一でコミュニケーションをとることができたのが印象的だった／非常に多くの多言語について相互理解しコミュニケーションを交わしました。／あまり予想していたほどコミュニケーションをとることができなかつた。／まだまだ話したことのない人が何人もいるから／

III. 授業の各トピックについて、評価（5. 非常に良かった。4. よかった。3. 普通。2. あまりよくなかつた。1. よくなかつた。）とコメントをお願いします。

1. 多言語主義、複言語主義と言語教育 5 ④、4④. 3. 2. 1.

コメント：複言語、多言語主義についての理解が深まった。また、英語教育についても考えさせられた。／多言語主義と複言語主義の定義をはっきりと分かりました。多言語社会における言語教育は英語にだけ集中したらよくないと思います。母語も大事にした方がいいです。他の言語への支援も必要だと思います。／多文化共生教育の基礎知識として、非常に重要な部分である／教育の重要性を考えさせられた／自分の視野が大きく広がりました／非常に実用的で、学んでためになったと思います／ろうが言語であることを知ることができた／違いを理解できた／

2. 移民の言語使用と母語教育－在日コリアン、在日ブラジル人 5④. 4③. 3①. 2. 1.

コメント：見学などの貴重な経験ができて大変満足できた。／漫画を読んだから、

在日外国人問題と難民問題をよりやすく理解できました。／2年生の必修科目として、同じような授業を受けたことがあり、それほど新しい話ではないが、勉強になった。／実際に行って現場の雰囲気を感じることができた／朝鮮学校も見学して、問題点は理解できた。実際にどのような状況で母語教育が行われているのかもっと知りたいです。／社会の一部ではあるが、理解が深まったなと思います。／受講生に在日コリアンの方がいたので、リアルな話を聴くことができた。／実際に本人たちに話を聞くことができた／

3. ゲストトーク：琉球諸語と危機言語

5③. 4④. 3①. 2.

1.

コメント：最も興味あるトピックであり、とても勉強になった。／初めて琉球諸語について勉強しました。言語は人間の大切なものだと思います。危機言語の復興についてももっと勉強したいと思います。／琉球諸語と危機言語についての知識を身につけられた。危機言語はなぜ守らなければいけないのか考えさせられた／実際の復興活動も学ぶことができた／危機言語の状況について学べて楽しかったです。／自分たちの方言も危機になるかもしれないことが分かった／

4. ゲストトーク：アイヌ語とアイヌ文化

5③. 4④. 3. 2. 1.

コメント：2番目に興味のあるトピックであり、実際の音声など聞いて大変興味深かった。／アイヌの昔話はとても面白かったと思います。北海道に行ったら、アイヌの博物館に見学したいと思います。／日本にある言語であり、日本語ではない「アイヌ語」の歴史を明らかにした／アイヌ語の危機的状況をもっと知りたかったです／ネイティブ話者がもはや存在していないというのを初めて知り、少し驚きました。／教科書でアイヌについて学んだことがあったが言語が危機に瀕していることは知らなかったもので、とても勉強になった。／全く知らなかったアイヌを少し理解することができた／

5. ゲストトーク：ろう文化と手話

5⑦. 4①. 3. 2. 1.

コメント：実際に耳の聞こえない人からの話は大変興味深かった。／とても有意義な授業だと思います。ろう者の生活における問題、ろう者の考えなどが分かりました。簡単な手話も学んで、とても面白かったです。／一生に覚えるほど感動した。今までの視野が狭いと感じ、物事を考える際により柔軟な思考方法を身に付けなければならぬと感じた。／ろう者や手話への関心が高まった／手話の現状は初めて知り驚きました／初めてろう者とコミュニケーションができて、日常生活での困難が少し分かるようになってきて、またろう者と会うことがあれば参考にします。／友達が聴覚障害を学んでいるのでろうには馴染みがあり、楽しんで受けられた。／同じ宮崎県出身の方がこのろう文化や手話についての活動をしていて、よいインスピレーションになりました。

／

IV. 授業の方法について、よかった点、改善した方がよい点などを挙げてください。

よかった点：留学生とのグループワークや留学生との交流／先生と客員ティーチャーの説明も分かりやすいと思います。／専門のゲストティーチャーの話を聞き、非常に勉強になった／多くのゲストの話を聞いたことが非常に意義深かった／ゲストティーチャーの講義が豊富で勉強になった／全体的に非常に興味深くて、とてもためになったと思います。／話し合いが多かった点／多くの人と触れ合う時間があった／

改善した方がよい点：授業にやる気のない日本人学生／ある程度の知識がなければ、先生の話についていけない可能性がある。／グループワークはもっと参加を促してもよいと思いました／時間切れが少し多かったです。／留学生と日本人学生を交互に座らせなかった点。／時間／

V. 課外活動について、よかった点、改善した方がよい点があれば書いてください。

よかった点：貴重な経験ができた。子どもたちと触れ合う機会もあり楽しかった。／実際に朝鮮学校を訪ねて、学校の雰囲気を感じしたり、授業を見学したりしたら、在日コリアンの状況と問題への理解が深くなりました。／多くの選択肢（活動）を紹介していただいたため、この授業を受けていなければ自分からは参加しなかった活動に参加し、様々な経験ができた／授業の学びが、実践的な場で生かされていることを感じることができました。／普段行けない場所に行ったらたくさんの新しいことを知ることができました。／授業でなければ行くことのできないところに行けた点。

改善した方がよい点：平日ではなく、休日に行ってほしい。／参加できなくて、申し訳ございません。／私がちゃんと聞いてなかったのが悪いのですが、仕組み（10点分行けばよいなど）を第一回の授業から説明していただきたかった／授業を見ている様子が面白かったがなかなか理解できませんでした。／日程の関係で行けなかった点

VI. 母語・方言紹介の個人発表について、よかった点、改善した方がよい点などをあげてください。

よかった点：発表することで、改めて自分の奄美大島の方言の魅力を確認できた。／様々な国や地域の言語・方言の特徴を知りました。／どの国にも方言があり、それぞれの地域に独自性と価値があることを深く知ることができた。また、発表に向けた準備によって自分の地域についても詳しく調べられた／語の詳細まで学び、国への理解がより深まりました。／様々な言語や方言について勉強できました／調べること

によって自分の方言を見直す良いきっかけになった点。／この発表で他の国の人たちにも存在を知ってもらい良い機会になりました／

改善した方がよい点： 準備のしていない日本人学生の発表／時間が足りなかったから、最後はグループで発表することになりました。いくつかの言語の紹介を聞かなくて、ちょっと残念でした。／時間をもっと多くとってもよかったです。／発表の準備の期間が少し短かったです。／全員がみんなの前で発表できなかった点。／発表の仕方／

VII. 最終発表について、よかった点、改善した方がよい点などをあげてください。

よかった点： 自分の好きなテーマに取り組むことが出来た。／チームワークで、メンバーと親しくなりました。／チームワークによって、様々なルーツを持つ生徒のコミュニケーションが取れる点がよかった。／系統だったテーマをもとに多くの視点から言語について知るよい機会でした。／発表の準備の期間が少し短かったです。／今まで学んだことを復習し、深められた点。／伝えたいことは伝えることができた／

改善した方がよい点： グループで取り組んだため、やる気のない日本人学生がいるせいで負担が重くなり迷惑／顔合わせのディスカッションは一回で、来なかったメンバーもいました。もっと検討したら、よりよい発表ができると思います。／モチベーションがなさそうな人が何人かいた。／グループワークへの参加状況がなかなか把握できず大変でした。／ほぼ全員がオーバーしちやって、かなりの時間がかかってしまいました／時間配分の点／準備不足

VIII. この授業を受けて、自分の考えに変化がありましたか。また、今後どのように生かしたいと思いますか。

1. 授業を受ける前と受けた後で考えに変化がありましたか。どのようなことを学びましたか。

多言語や危機言語についての理解が深まり、寛容になった。／英語教育について考え直しました。以前は英語を勉強しなければならないと思っていたんですけど、今は自分が好きな言語を勉強したらいいと思います。言語教育政策も他の言語をもっと支援すべきだと思います。とても印象深いのはろう文化です。ろう者の考えを理解し、これからどうやってろう者と交流するのかが分かりました。手話も一つの言語だということを知りました。／一年間の授業を受け、本当に勉強になり、考えも柔軟に変わったと感じた。特に、障害者が健常者かの判断基準というものの存在価値とは何かを考え始めた。確かに、差別や偏見をなくす

ことが難しいと思い、少しでも現状を改善していきたいと思う／言語に対する意識に大きく変化があった。特にろう文化と手話について、授業を受けるまでは一切知らなかったし、考えることが無かった。ゲストトークの前の授業に私は欠席していたため、私はその日のゲストがろう者であることを知らなかった。席に着いた時、身振りだけでもっと後ろに下がるよう伝えられて戸惑ってしまった。駅員がゲストの方を耳が聞こえると思い対応し、嫌な思いをしたと話していた。きっと私も駅員と同じ行動をとってしまったと思う。自分の当たり前が決して誰にでも当てはまることではないと学んだ。帰り際には、手話を覚えたため「ありがとうございました」と伝えることができた。知識を身に着けることでより多くの人とコミュニケーションをとれるのだと感じ嬉しくなった。知識や言語の可能性を知った。／多言語文化や多言語主義はただ知識として持つだけでは不十分であるという考えを持つことができました／たくさんの方言の話聞き、標準語から独立したものだと考えるようになりました。／受ける前は、日本にこんなに多様性があるとは思っていなかった。授業を受けるうちに様々な人が共に暮らすことのメリット・デメリットを知ることが出来た。／国際的に幅広くもっと世界について知りたいと思うようになりました／

2. これからの学生生活や将来の生活にどのように生かしたいと思いますか。

積極的なコミュニケーションと在日外国人児童への接し方を注意したい。／今もう一つの言語を勉強しようと思っています。個人の発表を準備した時、以前気づかなかったことを気づきました。自分の方言を詳しく知るようになりました。今後、他人に国とふるさとの文化を紹介する時、役に立つと思います／今後、外国人材サービス事業から始まり、大学で学んだ多文化共生の知識を活かして、在日外国人もしくはこれから日本に渡ってくる外国にルーツを持つ人々をサポートしていきたいと思う。／あらゆる言語を尊重したい。様々な言語に対する知識を増やしより多くの人とコミュニケーションを取りたい。／どうしても普段の生活圏には日本語が多くを占めているので、図らずとも多言語への理解が浅くなってしまおうと思います。この授業で学んだ多言語主義の知識を生かし、専攻である社会福祉の学びにも取り入れていきたいと思っています。／母語で話す時、自分の方言を変えないでそのまま使いたいと思います。伝わらなかった時に分かりやすく説明しますが、やはり方言をなくしたくないので、その存在を保ちたいと思います／同じ学科に留学生がいるので、積極的にコミュニケーションをとってみたい。また、ろうの方ともお話をしてみたい。／海外にいつか永住しようと思います／

IX. 全体として、この授業について、よかった点、改善した方がよい点、感想などがあれば何でも書いてください。

今回のこの授業は概ね満足しています。しかし、日本人学生の一部にはやる気のない学生がいてそのほんの一部の人たちのせいでグループ活動や話し合いに大きな支障が出てしまい、とても迷惑がかりました。そのほか、日本人学校見学などの非常に貴重な経験がで

きたことは大変嬉しかったです。またなにかの機会があれば、授業履修等なかったとしてもお誘いがあれば、積極的に参加したいと思います。／客員ティーチャーの授業も内容に関するプリントがあった方がいいと思います。この授業でいろいろ勉強しました。本当にありがとうございます／単なる言語や文化だけでなく、現在の日本社会における在日外国人の実態を明らかにしたい。つまり、調査結果から推測したうえで、現場に入り、教育段階の児童生徒のみならず、その後の進路も見学できたらいいなあと考える。(生活現場・仕事現場)／時間内に終わっていただけるとありがたかったです。(アクションペーパーを書く時間を取って3分前など…)／フィールドワークでの学びが大変勉強になりました。実際に目で見て、人と対話してこそ得られるものがあることを実感できたのでよかったです。授業内外を通して、さまざまな国の文化や言語についても学ぶことができ、とても充実した授業でした。選択できたことを嬉しく思います。ありがとうございました。／同和問題についても同時に学んでいたのも、多様性の良いところ、悪いところを俯瞰的に見ることができた。留学生の方と触れ合う機会や外国人学校に行く機会もそうそうないので、人生において良い経験をたくさんすることができた。／たまにこの時間何をすればいいの?となったことがあった。いろんな人と話すことができたので楽しかった／

最終レポート集

多文化共修最終レポート

1) 発表内容について

私は上海の出身で、方言紹介は上海弁について発表した。実際に調べると、上海で喋られている方言の日本語の呼び方は上海弁と上海語で、二つあることを気づいた。それは、上海の方言はもう一つの言語として扱われるべきかについて、学界は論争しているようだ。確かに、呉地方以外の出身の人はほとんど上海の方言はわからないが、本当に別の言語で扱われたほうがいだろうと考えながら、より深く調べた。日本語で書かれた上海方言についてのサイトでは、「上海語」と呼んでいる。そして、「CiNii」で調べた上、上海語で検索したら、41件の結果が出て、上海弁で検索したら、0件の結果が出た。日本の学界では、上海の方言は中国語に属する言語ではなく、もう一つの言語として扱われることに驚いた。そのため、最後は「上海弁」ではなく、「上海語」を発表のテーマにした。そして、発表する時もいろいろ問題があった。一番気になるのはやはり自分が上海人だが、上海語はあまり話せないことである。特に、日本人に上海語の発音は日本語に近いと紹介していた時、自分はある上海語の発音をうまくできず、同じ上海出身の朱さんに任せなければならなかった。こういう時は、自分は自分の故郷のことばへの理解や習得の不十分に悔しかった。もちろん、これは中国の中央政府から上海や他の地方へ方言政策にはよく関わっている。私は小学生の時、学校では上海語をしゃべるのを控えようとしている。それは、先生も上海語をあえにしゃべらないことと壁に書いている「普通話をしゃべってください」の標語に影響されていた。朱さんもおばあさんに強制的に上海語を話させたから、上海語を話させることになった。近年の調査では、呉地方の若者の方言習得率年々下がっていることが明らかになった。上海の政府も方言復興政策を行っているが、上海語はどのように救われるかまだ未知である。残念だが、時間が少ないため、発表の時、政策面の話はあまり詳しく紹介できなかった。しかし、この発表を通して、私ははじめて自分の故郷のことばに再認識してきた。今後も上海語の状況に

ついて、目を向けていきたい。

グループ発表では、私は「年少者日本語教育」という授業でのフィールドワークを生かしたいため、あそこで見た「年少者日本語教育の現状」について発表した。具体的にどのような活動をしたという質問が来たため、すこし活動の内容と学習の様子を紹介する。

活動の内容について、まず学芸大の大学生は児童たちと話し合っ、児童たちは大学生にインタビューして、情報を記録する。そして、大学生が準備した自分の情報を載せたポスターを児童に見せて、児童たちは自分を持っている情報をポスターに比較して、自分たちがどの大学生をインタビューしたかを判断する。

学習の様子について、児童生徒が教師の指示に従い、正座で座って静かに授業の開始を待っている。最初は中国人児童があまり教師からの通訳の指示がわからなく、自分たちが中国語でインタビューすればよいと思っていたようだ。その後、教師はまた指示し、中国人児童の後に、もう二人の児童が入って来た。私は中国人児童の翻訳を通し、他の児童と交流できたが、他の児童は中国語がわからなく、ややつまらない顔をしていた。私の質問に、「あなた英語できるか」と逆に聞く。二人の中国人児童の中国語能力がすこし分かれている。男の子のほうが、インタビューする時、シートに直接中国語で書き込んでいた。女の子のほうが、少し考えた後、シートに私が言った中国語の内容にすこしずれている日本語を書いた。

しかし、日本語がわからないふりをして、子供たちと日本語で交流できなくて、すこし残念だ。日本の小学校で、中国人の子と中国語で話せるのもとても珍しい体験であった。その二人の子の日本語能力が違うのは予想内が、中国語の能力も結構異なっていることに驚いた。男の子の中国語能力が女の子より強いとはっきり感じられる。そして、インタビューの際、同じグループの中に、中国語がわからない子供たちがやや冷たくてつまらない顔をしていた。そのため、中国の子もすこし他の子の反応を気にしながら、私と話していた。私はすこしその子たちの状況を聞いてみたら、アメリカの子から、「あなた英語できる？」と聞かれた。私はすこし英語ができるけど、雑談するほどではないから、あの子はすぐ飽きてしま

った。この学校は英語を特色にしているから、外国語の地位ランキングには、英語が一番高
いだろうと考えられる。

2) 授業全体への感想

この多文化の授業には、各国の学生と交流して、お互いの文化を理解できて、非常によい
経験になった。外国語だけではなく、その外国語の方言、日本語の方言など、言語のあらゆる
形にはいろいろな魅力を持っている。スウェーデンやタイの母語話者が彼たちの母語に
ついて説明してくれるのはなかなか珍しいことと思っている。そして、私はもともと中国の
方言について、あまり詳しくなかったが、この授業を通して、自分の国の言語もすこしわか
るようになった。

そして、授業にはいろいろな先生が来て、とても豊富な授業内容を聞けることになった。
本来日本は単一言語国家という印象を抱いた。しかし、日本方言について、国立国語研究所
の연구원たちの研究成果を聞いて、日本には多様な言語があることをわかった。一番印象に
残ったのは、ろう者の授業で、本当にろう者の先生がくることである。私は中国のネットで、
中国のろう者の実態を調べてみたら、社会からの支援は日本より全然足りなかったようだ。
中国のろう者には中国語ができる人は半数足らず、その中、読唇術ができる人は半数ぐらい
状態だ。つまり、中国でのろう者はより主流社会から離れていることがわかる。先生の言
うことにより、日本ではろう者に日本語と読唇術を教える学校がある。ろう者の文化に何か
影響、差別のことをとも言って、せめて主流社会への入り口をちゃんと作っているのはとも
でいいことだと考えられる。もちろん、先生の経歴から言えば、ろう者として話せるのはと
てもすごいことだが、聴者に差別されて、つらいことになってしまったこともある。こうい
う事態を減らすため、多文化授業が必要されると思っている。社会により弱い人たちの文化
や言語を主流社会に伝えるのは重視である。

この授業で勉強したことや感じたことなど、今後の生活と学習に役に立つと思っている。

多文化共修科目 B レポート課題

「授業を振り返って」

1 自分の発表とその振り返り

① 津軽弁紹介

私は、青森県の津軽地方出身であるため、津軽弁について紹介した。内容は津軽弁のルーツ、特徴、青森県弘前市の紹介などである。津軽弁は、イントネーションや語彙が標準語と大きく違い、外から来た人に通じにくく、メディアでも面白く取り上げられることが多い。

その理由の一つとして、津軽弁は大和言葉やアイヌの言葉がルーツになっていることが挙げられる。けちという意味の「ほいど」は仏教用語が由来であったり、ねこを指す「ちゃぺ」は半濁点が特徴的なアイヌ語から来たものであったりする。私は、アイヌ語と関わりがあることは何となく知っていたが、自分が現代で話している言葉が大昔に都で使われていたものであるとは知らず驚いた。言語において、新しい発音や単語が生まれるのは栄えている中心地であり、そこから時間をかけて周りに広がる。そのためこのようなことが起こる。他の授業でイギリスの方言についても勉強する機会があったが、同じような現象が見られた。方言の成り立ちには法則があると学んだ。もしかすると現在東京の女子高生が話している言葉が、数百年後、津軽のじっこばっこ（おじいさんおばあさん）の日常会話で使われているのかもしれないと思うと興味深かった。また、津軽弁が通じにくいもう一つの理由に、口を開けないということもある。青森は寒く人々はあまり動きたくないため、口を開かない発音であるうえに、もごもご話す。同じような特徴は秋田の方言にもみることができる。

発表のために調べることで、深く考えず使っていた自分の方言について詳しく知ることができた。

② 公立学校における外国人児童の受け入れについて

グローバル化や外国人労働者受け入れの拡大に伴い、日本では日本語がわからない子どもが急増している。インターナショナルスクールやブラジル人、朝鮮人学校などもあるが、その中で私は公立学校における外国人児童の受け入れについて調べて、発表した。

・動機

このテーマを選んだ理由の一つとして、自分自身が公立学校出身であることが挙げられる。青森の田舎の学校であったが外国人児童は数人いた。小学校の時、フィリピン人の母と日本人の父を持つ子と同じクラスだった。外国人ではないが、おそらく父親とは離れて暮らしていて、他の児童より日本語はわかっていなかったと考える。勉強は得意ではなく、人前で発表する時はあまり流暢に話すことができない印象があった。そのためクラスメイトからからかわれることも多かった。先生はフィリピン人の母を英語

の先生として迎えてクラス全体に異文化理解を図ったり、勉強面では補講を行ったりはしていたが、体系的な支援の仕組みが整っていたとは思えなかった。私が、大人だったらどういった支援ができたのか、増えてゆく外国人児童対策はどうなっているのか興味があった。また、外国人児童は公立学校に通うのが最適解であるべきだという私の考えも理由の一つである。確かに、朝鮮人学校を実際に見学してみて、同じような境遇の子が集まっていたり、授業の中で英語、日本語、朝鮮語の3つの言語が身につけられたりと環境が整っていた。特殊学校も良い手段であると思う。しかし、一条校として認められていない、補助金の減少、公立学校への受験が難しいなど様々な課題がある。また、外国人労働者の低賃金が問題になる中で、高額な授業料が必要なインターナショナルスクール通わせられる家庭は少ない。国全体で外国人労働者を受け入れようとしているのなら、その子どもの教育も公的なものであるべきだ。

・内容

現状として、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は大幅に増加している。文部科学省の調査によると平成28年の日本語指導が必要な児童生徒数は43,947人と平成18年からの10年間で1.7倍増加した。学校での対策として、「特別の教育課程」による日本語指導、多言語翻訳システムなどICTを活用した支援、日本語指導のための職員配置などがある。「特別の教育課程」とは単なる補講とは違い、一人ひとりに応じた学習計画を用意し、日本語指導と教科指導を統合しながらカリキュラムのことである。こういった対策が掲げられているが、対応できる教員の不足、国籍、理解レベルなど生徒の多様化、散在化、など依然として様々な課題が残る。

そこで私は、学校だけではなく、地域や家庭と連携して子どもを支えることが重要であると考え。地域からの支援は公民館などでの放課後日本語教室・学習支援、お祭りなど地域の活動への積極的な受け入れ、文化交流会などが挙げられる。また、地域との連携よりの学習の場の多様化を目指す。私は生涯学習コースで学芸員免許取得のための勉強をしている。博物館を使って、見る、触る、聞く、体験する学習を提供したり、ICTを使った多言語の解説を用意したりすることで、学校以外の学びの場を与えることができる。次に家庭からの支援だが、現状として親も日本語がわからないことが多く、子どもの学校生活を支えられていない。受験においても日本人家庭に比べ圧倒的に情報が不足しているため不利になってしまう。受験説明会、ふりがな、多言語を使用した手紙、ガイドブックの配布など日本語がわからない親が子どもを支えられるようにする取り組みが求められる。

公立学校で外国人児童を指導するうえで最も注意しなければいけない点は「児童に同化を強要しないこと」である。アイデンティティを奪うことになるし、日本人児童にも影響しいじめにもつながってしまう。そうならないためにも、日本語を教えるとともにアイデンティティの形成に深くかかわる母語の教育が重要となってくる。公立学校

はインターナショナルスクールなどに比べて外国人児童が少ない。それは個を重視しやすいいということでもある。クラスで母国を紹介させる、母語で話すよう親に協力を求める、子どもに合った指導をするなど、母国に誇りを持ち複数の国にルーツを持つことをコンプレックスではなく「強み」にできる教育を目指すべきである。

・評価、改善点

文部科学省のデータなどだけではなく自分の体験を入れて話すべきだったという指摘をいただいた。先に述べた小学校の同級生の話などをすれば良かった。また、声が聞き取りづらかった、顔が下を向いていたなどの指摘も受けた。発表の際話を伝えられないというのは、相手に納得してもらい以前の問題でありあってはならないことである。残りの大学生活だけではなく社会にでてからも発表やプレゼンの機会が多くあると思うため、今後必ず気をつけたい。

2 授業全体の感想

授業を通して、言語に対する知識や関心が深まった。当たり前のように話していた言語は概念であり、アイデンティティであり、文化であり、重要な意味を持つのだと知った。また、手話や日本の方言、中国、タイ、韓国、スウェーデンの言語や文化、社会問題について、ゲストや留学生、実際に住んでいた人に教えてもらったため、より詳しく興味を持って学ぶことができた。しかし、せっかくの多くの人とコミュニケーションをとれる機会をもっと利用すべきだったと考える。自分から積極的に話しかけ、留学生や他学科の人と交流すべきだった。

参考文献

- ・ 文 部 科 学 省 ホ ー ム ペ ー ジ
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06070415/006.htm)
- ・ 平山輝男ほか編『日本のことばシリーズ 2 青森県のことば』明治書院、2003年

多文化共修科目 B 最終レポート

1. 自分の発表内容と振り返り

○言語紹介—在日コリアンの言語使用について—

(1) 発表内容

在日コリアンとは、日本の植民地であった時期に日本へ渡ってきた朝鮮人と、その後も日本で生活している子孫のことである。朝鮮人として日本で生きる在日コリアンは二つの言語を使って生きる背景を持っている。日本で生まれ育ち習得した母語としての日本語と、自分のルーツである母国語としての朝鮮語を使用する。在日コリアンは日本で生まれ育っているので、日本語力は日本人と変わらず、言われなければ在日コリアンだと気づかれない。しかし、在日コミュニティの中では朝鮮語を使用することが多いので、そこにはっきりと自分たちのルーツも存在している。ここで興味深いことは、二つの言語を使用しているので、特に子供たちの中で日本語と朝鮮語を混ぜたような会話が見られることである。面白おかしくもありながら、日本と朝鮮のどちらともつながりを持つ子供たちの背景をよく表しているといえる。在日コリアンの例だけにとどまらず、日本は多様な社会となっており、日本語を話しているからといって全員が日本人とは言い切れない現状がある。日本には多様なルーツを持つ人々が暮らしているということを、みなさんに理解してもらいたいと考えている。

(2) 質問・評価、成果・課題、今後の展望

韓国からの留学生の方の意見と共に、韓国では使われていても在日コリアンの間ではあまり使われない朝鮮語があるという話題になった。そこで私は、北朝鮮で使われている言葉、韓国で使われている言葉、在日コリアンが使う言葉にどのような差があり、なぜそれが生まれたかという疑問を持つようになった。私は在日コリアンが使う言葉しかよく理解していないので、その部分についてこれからもっと調べていきたいと考えた。

また先生から、よく在日コリアンの間で使われる韓国語とは少し異なる言い方についての質問を頂いたが、自分自身も詳しく把握できていなかった。在日コリアンとして自分の立場から発表する機会だったので、もう少し勉強が必要であったと感じた。

この発表を通して、日本と朝鮮の両方につながりをもつ在日コリアンの言語使用について多くの人に理解してもらうことができ、なぜ日本語も朝鮮語もうまく話せるかという疑問に答えることができる良い機会であったと考える。

これからも自分の立場を通して、多くの人に在日コリアンについて知ってもらえる機会を増やしていきたいと考えている。

○最終発表—外国にルーツを持つ子供たちへの日本語教育・母語教育のあり方について—

(1) 発表内容

大きく4つの項目に分けて発表をした。

- ①年少者日本語教育の現状
- ②公立学校における外国人児童への対応
- ③日本語教育と母語教育のあり方について
- ④在日外国人への学校における言語教育の問題点

である。

①では、港区立筈小学校における日本語学級を見学した際の経験から、そこで行われている取り組みや、子供たちの背景について発表した。②では、増加する公立学校における外国人児童に対する対策や、地域・家庭との連携の重要性について発表した。④では、学校における外国人児童の学習の問題について、言語能力の不足、人材不足、ルーツが多様化していることなど、様々な観点から見た考えを発表した。

私が発表した、③日本語教育と母語教育のあり方について詳しく述べたい。

主として、朝鮮学校とブラジル人学校の例を取り上げ、日本語教育と母語教育について比較しながら今後の展望について考えた。

まずブラジル人学校についてであるが、日本語の授業もある程度は行われていても、家庭内使用言語がポルトガル語であるため、子供たちのほとんどが日本語を話せていないという点が大きな問題であると考えている。ポルトガル語を話すことにより、自分のアイデンティティに自信をもつことができても、日本語が話せなければ日本人とのコミュニケーションの機会が失われてしまうのである。母語教育の成果であり、日本語教育の不十分がもたらす問題点である。

次に朝鮮学校についてである。朝鮮学校においても日本語と朝鮮語の両方の授業が行われるが、語学の授業は均等に行われることと、家庭内使用言語が日本語であることから、子供たちは日本語も朝鮮語も不自由なく話すことができる。母語を話すことができるという自信と、日本社会におけるコミュニケーション能力につながる高い日本語力を身に付けることができるのである。しかし、ほとんどの教科科目は朝鮮語で行われるため、高校入試においてなど、日本社会に適応できない場面も多々存在する。母語教育のバランスが問われる問題である。

これらをふまえて私は、これからの日本語教育と母語教育において大切なことは、社会参加において重要な役割を担う日本語力と、アイデンティティ形成に深く関わる母語力のバランスであると考えている。またここにおいて、家庭内使用言語がもたらす言語力への影響はかなり大きいとも考えられるであろう。

(2) 質問・評価、成果・課題、今後の展望

朝鮮学校での教育のみでは高校入試に対応しきれないのであれば、朝鮮高校から大学入試を試みるにあたっての問題はどのようなものがあるのかという質問を受けた。私自身が朝鮮高校を出ていないため詳しいことは答えられなかったが、知人から聞く話によると、一年の頃から予備校に通わざるを得なかったり、日本の高校と比べて日本大学への進路サポートが薄い場合があるという懸念点もあるそうである。ほかにもどのような状況があるのか、さらに調べてみたいと考えている。

クラスの人からのコメントシートに書かれた評価によると、朝鮮学校での経験やブラジル人学校訪問といった自身の経験から発表していたことがとてもよかったという意見が多くあった。やはり調べたものだけでなく、実際の経験から発表するほうが説得力があるのだと考えられた。また、内容だけでなく発表方法も落ち着いていて分かりやすかったという意見をもらった。発表する際には、大きな声で、聴衆をしっかり見て落ち着いて話すことを心掛けているので、その点を評価してもらえたことは成果であると考えている。

自身が考える反省点としては、スライドにももう少し図や写真を載せたり、発表においても身振り手振りを行ったりして、さらに聴衆の興味を引けるような発表ができればよかったと感じている。

2. 授業全体の感想

この授業では、アイヌの言葉やろう者の言葉、危機言語、また様々な留学生の出身言語など、普段触れる機会がないような文化を学ぶことができたので、とても貴重な経験であった。すべての授業を通して自分が一番感じたことは、「言語はただのコミュニケーションツールではなく、その文化を表すものであり、その集団をつないでくれるものである」ということである。アイヌの言葉はどのように守られなければいけないのか？という素朴な問いに答えてくれるのは、言語を守ることが民族の歴史を守ることであるという人々の考えであろう。実際に授業で、アイヌの言葉でバス案内を行ったり、youtuber が動画を作る様子を見たが、今の時代の若い世代が言葉を守ろうと活動している姿がとても印象に残っている。

授業を通して不十分であったと考えられるものは、学んでみて面白いと感じたことをもっと深くまで掘り下げることができなかったことである。アイヌの言葉を学んだり、ろう者の人の話をきいたときには、「もっと知りたい、学びたい」と感じるが多かったのだが、実際にその後に本を読んだり、自分で調べてみる行動にはあまり移せなかった。これからは、授業を通して学びの接点に出会えた時には、その学びをさらに深いものができるように、自分でさらに調べたり本を読んだりして学びを発展させる力をつけていきたい。

文化共修科目 B レポート課題

1

今回の多文化共修科目 B の最終プレゼンテーションに際して、私は在日外国人の学校での言語教育における問題点に関して考察を進める事にする。このテーマを選んだ動機としては、自身が多文化共生教育学科である為、外国人児童に対する多角的なサポート体制を専門的に学習していることや、来年度からフィリピン共和国へ英語学習を学びに約 1 年間留学をする為、何か生かすことはできないかと考えた為である。

始めに、考察される問題点は 5 つある。1 つは、外国人児童の言語能力不足により学習能力が身につかないことである。日本に暮らしていることで、日常会話等に必要となる基礎言語能力はある程度であれば自然と身に付ける事が可能であるが、教科学習に必要な高度な言語能力を周囲のサポートを無しに会得する事は困難であると考えられる。理科や実技教科等、図式やイラスト等を用いれば問題は少ないが、算数や国語など高度な説明を必要とする教科は、言語能力が乏しい子どもにとっては、理解するのは難しいと考えられる。日本で生まれ育ち日本語が堪能な子どもでさえ小学校へ入ってから覚える熟語や漢字が多いが、日常会話もままならない子どもが、それらを同時に学ばなければならない環境におかれた際に予想される障害は大きい。そうしてクラスの授業についていけなくなった外国人児童が進学を断念し、低所得者層を築き上げるという流れもある。教科学習のサポートだけでなく、それに必要な言語を文法などの基礎から見直すことも大切だと考える。また、外国人児童が学習に遅れが見られる際に、言語能力不足を原因とする学習の遅れであるのか、別の発達障害を抱えている可能性があるのか判断が難しいという問題点もある。前者であれば言葉的なサポートで改善する事も可能だが、後者であればまた違った面での支援が必要となる為、早急かつ正しい判断を下さなければならない。しかし、それらを明確に判断することは専門的な知識を持ったエキスパートでない限り難しいであろう。

2 つ目は、人材不足に関する問題である。現時点の日本では、移住してくる外国人の出身地は多様化しており、言語や文化面に際してそれぞれの国への対応が間に合わないという事態が起きている。また、学校外での日本語教室など外国人児童に対するサポートを行っている人らはボランティアが多いため、それらの供給は、非常に不安定であったり、時間帯が限られていたりする。ボランティアの人々も高齢化してきている傾向があり、新たな担い手が不足している現状だ。2019 年 6 月に、「日本語教育推進法」が可決され、施行された。同法の第一条には、「日本語教育の推進に関する施策を総合的かつ効果的に推進し、もって多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現に資する」とある。これによって、外国人児童に対する教育は国の責務とされ、注目も深まった。専門性に優れた人材を育成することが目標とされているが、依然として人材不足は解決しておらず、地方団体や個々のボランティアなどに頼ってしまっている状況が続いている。

3 つ目は、外国人の多様化である。上にも記したが、年々日本へ移住をしてくる外国人の

数は増え、その出身国もバラエティ豊かになっている。インターネットで出身国に関する複数のカラーの円グラフなどを見ると、どの円グラフも中国、韓国を始めとし、ベトナム、ネパール、ミャンマー、インド、タイ…非常にカラフルだ。この際に生じてくる問題が、受験言語等の対応が間に合わないことである。進学に言語による不公平が生じないよう、日本の学校は受験に際して幾つかの言語を設けている。しかし、それにも限りがあるため、全ての言語に対応する事は困難だと考える。マイナーな言語を母語とする外国人児童は不利にならないを得ないのであろうか。

4 つ目は、閉鎖空間による子どもへの影響である。ブラジル人学校、朝鮮人学校等、国に特化した学校があるが、子どもが文化や言語にストレスを抱えない、同じ状況の子どもと過ごせるなどのメリットも存在するが、同時に閉鎖的空間となってしまう可能性も否めない。今後自立して日本で生活をしていくのであれば、幼少期からの日本社会との接触は必要である。日本社会との関わりの少ない学校で過ごした後、日本の慣習や働き方に上手く馴染めない、周囲から社会不適合者と見なされる等の障碍を抱えてしまう。実際に外国人労働者を雇う側の意見として、細かい指示が正確に伝わらない、習慣や文化の違いにより問題が起きている、習得までに時間がかかる等の不満が多い。通常の公立学校で過ごすことはデメリットも多いが、日本の慣習や文化に慣れる点では最も適した環境であると考えられる。国に特化した学校であれば、今後は日本人との日本の社会科見学等の機会を増やすべきだと考える。

5 つ目は、外国人児童に対する「いじめ」問題である。以前、他講義にて、「ハーフ」という映画を見た。公立学校において、ブラジル人と日本人のハーフである子どもは、日本語が堪能でないことを理由にいじめを受けた。以来彼は、吃りを抱えるようになってしまった。このようにして、ほかの日本人の子どもに比べて、日本語が出来ない、文化が違う等を原因としてクラスメートからいじめを受けてしまうケースが多い。中にはお弁当に入っていたおかずを原因として差別をされてしまうというような事もある。これらのようなパターンは公立学校に多い。日本人のマイナスな習性として、内向的で多様性を認めず、よそ者を受け入れないという面が子どもに顕著に現れてしまうのであろう。外国人児童に対するいじめに対しては、先生やクラスメートの親も含めて周囲の文化的な教育や理解が不可欠である。

今回のプレゼンテーションにおける反省点としては、質問を受けた際に、その場で内容を明確に説明ができなかったため、発表前に扱う項目の再確認が必要であると感じた。また、参考文献等の情報の出資元が不明確であった為、次回は気を付けたい。アイコンタクトに際しても、やはり緊張などがありメモを見てしまったりパワーポイントを見て話してしまったりしたので、視聴者に視線を向けるようにしたい。

本講義は、多くの留学生と一緒に講義を受けるため、他の授業と違い意見交換の場等が賑やかで、言語に関して様々な情報を得ることが出来て、非常に刺激的であった。ただ、フィールドワークに関して、土日は他の用事やアルバイトやサークル、平日は他の授業が忙しく中々行けることの出来る機会がなかったのは残念である。欲を言えば、授業時間内にフィールドワークを設けて頂けたら、参加出来たように思う。留学生のそれぞれの出身国に関するプレゼンテーションなどが非常に興味深かった。また岡先生の授業があれば、参加したいと思う。

【参考文献】

映画「ハーフ」(2013年)

監督・西倉めぐみ、高木ララ

ウェブサイト

http://www.ritsumei-human.com/hsrc/resource/08/open_research08_001-017.pdf

<https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00520/>

https://www.zenroren.gr.jp/jp/koukoku/2018/data/259_03.pdf

<https://www.bridgers.asia/recruit/gaikokujinroudousya01/>

https://www.soumu.go.jp/main_content/000601286.pdf

多文化共修科目 B 期末レポート

母語と第二言語学習について

・発表内容について

秋学期の授業では、私が「青島方言」と「母語と第二言語学習」について発表した。また、その場で岡先生からの質問を受け、「母語と第一言語のズレ」や「バイリンガル教育」についても、具体的な例を挙げ、説明していきたいと思う。

①「青島方言」について

インターネット資料により、中国語の「方言」は共通の文字組織、すなわち漢字を持っているものの、異なる方言話者との会話による相互理解は事実上不可能に近い。よって、方言話者では学校教育や公共放送で使われ、公用語とも言われる「普通話」とのバイリンガルとなっている事が多い。

そして、中国の方言区分に関しては、いくつに分けるか学者によって異なっている。一般的には七大方言がよく使われている。長江が南北の等語線とほぼ等しく、これ以北と西の内陸部が「北方方言」、これ以南がその他の「方言」地域に分類する。

「青島方言」に関しては、青島市¹が中華人民共和国山東省に位置し、「北方方言」の一つとして知られている。歴史から見ると、青島がドイツと日本²の植民地であったため、ドイツがこの町に与えた影響は大きい。例えば、ドイツのモデル植民地として街並みや街路樹、上下水道などが整えられ、今なお残る西洋風の町並みや青島ビールなどに限らず、青島方言には、ドイツ語と日本語に由来する専門語が多い。

例えば、“大嫚儿” (Dame)「若い女性」、「古力」 (Gully)「下水道」、「喽吼」 (Look)「見る」、「榻榻米」 (たたみ)「畳」、「米达罗」 (メートル)「バケツ」など、外来語から変遷してきた方言も沢山ある。

そして、青島方言は大きく分けて、狭義の「青島話」と広義の「青島方言」に分けられる。つまり、従来の「市南区」、「市北区」、「李滄区」という「老青島」エリアで使われている「青島話」と、青島市の境界域の変動により、嶗山-李滄方言、城陽方言、即墨方言、膠州方言、黄島方言、平度方言、莱西方言を含め、我々が「青島話」と思わないほど、広義の「青島方言」がある。

発音の特徴をいくつかを紹介したいと思う。一つは「声調減少」であり、標準語の四声と

¹ 青島は中国の海洋産業の中心都市であり、東部沿岸の重要な経済と文化の中心であり、2008年の北京オリンピックや2009年の中華人民共和国全国運動会のサブ会場であった。

² 第一次世界大戦、日中戦争で、青島は日本軍の占領下に置かれた。

比べ、青島方言の場合は三声しかない。また、「声母细分」という特徴があり、子音「r」の場合は、①一部の発音の中で、抜いている（「零子音」）日（rì）→意（yì）、②「l」に置き換えられる 仍（réng）→稜（léng）、③「y」に置き換えられる 肉（ròu）→又（yòu）、
もう一つは、「韻母簡化」であり、母音合併（「eng」→「ong」）横（héng）→紅（hóng）という特徴が見られる。

確かに、中国の他の大都市に比べ、青島の歴史は比較的短く、近代経済・文化の発展が迅速で、人口の流動も頻繁であり、境界域の変動も大きいと、地方の方言と「青島話」、そして、青島の各方言の間で相互に影響し、現在の多様な青島方言になっている。

しかし、青島市は全国の標準語の使用が比較的早い都市の一つであるため、方言の特徴が形成された後に、その影響を受け、青島方言の中のいくつかは標準語と大きく異なる音声、語彙、文法の多くがすでに見られなくなった。

地方言語文化を保護するため、青島市は2012年に地方方言資源データシステムを構築し、方言の音声、語彙、文法、物語などのデータを科学的な採集モデルにより、オーディオやビデオで記録し、「青島方言データベース」を構築した。

②「母語と第二言語学習」について

まず、「母語」について論じる際に、「母国語」と「母語」の定義を明らかにする必要がある。「母国語」とは、文字通り、話者が国籍を持つ国で、つまり、「公用語」または「国語」とされている言語である。それに対して、「母語」とは、人間が幼少期から自然に習得³する言語である。最も得意な言語という意味で第一言語ともいうが、厳密には両者の間にはずれがある。例えば、日本国籍のアメリカで育てきた海外子女の場合、「母国語」が間違いなく日本語であり、「母語」が日本語か、英語か、もしくはほかの言語である可能性もある。多くの場合、子育てをする母親の母語からの影響が大きいと考えられる。もちろん、特例もあり、それは国際結婚で生まれた子どもの場合、判断基準が曖昧になってしまい、母語と呼ばれる「第一言語」と「第二言語」が子どもの成長とともに、変わっていくことも少なくない。

では、第一言語が第二言語にどのような影響を与えるのかを考えると、「学習⁴意欲」、「学習環境（実用性）」、音声・語彙・文法・文化など、「母語習慣」からの影響が大きいと思う。すなわち、何のためにある言語を学ぼうと思ったのか、その目的を明確しなければ、学習意欲を高めることができなく、うまくいかない場合が多い。さらに、学習環境も学習効果に大きな影響を与える。ここでは、「社会的環境」と「教室的環境」に分けられる。

以下の表の通り、学習過程に関しては、第二言語学習者のほとんどの場合、特定の時間に学校という「教室的環境」でカリキュラムに従い、教師の解説を受け、自らの練習しつつ、

³ 「習得」(Acquisition)とは、第一言語のように、幼児の頃から自然な環境の中で、意味ある会話を観察し、やがてそれに参加して、次第に言語能力が発達してくること。

⁴ 「学習」(Learning)とは、学校など特定の環境で、外国語を学ぶやり方。

単音から始め、音・形・意を覚えていく。しかし、母語習得者は「形」を除き、すなわち、日常生活の中、練習せず、苦勞も感じず、無意識のうちに、「音」と「意」を覚えるようになった。

対象	成人（第二言語学習者）	幼児（母語習得者）
学習過程	単音から （音・形・意）	語彙から （音と意）
文法	意識 （解説・練習があり）	無意識（練習せず、 苦勞も感じず）
環境	学校 （カリキュラム通り）	家庭や日常社会 （方言）

ここでは、在外日本人学校に通っている海外子女の話思い出した。例えば、インドの日本人学校では、子どもの安全確保のため、すべての生徒がバスで登下校することが分かった。それによって、現地社会との関係性が薄くなり、さらに、インドで暮らしても、家庭教育において、食文化や風習、習慣などが日本と変わらず、学校教育も母国文化がメインで行い、インド文化が政策上の理由で「プラスアルファ」と位置づけられる。

つまり、外国と呼ばれる大きな「コミュニティ」の中、いくつかの小さな「コミュニティ」が同時に存在し、アイデンティティの定着に大きな影響を与えるとと言えるだろう。

・考察

グループメンバーのウさんのところけれども、言語、文化そして教育について少し話して行きたいと思う。まず、言葉とは、人と人がコミュニケーションを取るための道具の一つであり、いわゆる、交流する手段である。それだけでなく、物事の差異を表すこともできる。さらに、言葉によって、国民に政治政策や思想などを伝え、国家統治のため、非常に重要な手段でもある。

次に、文化とは何か、例えば、「〇〇文化」が本当に存在しているのかを考えて欲しい。確かに、「日本文化」と呼ばれる部分、つまり、伝統的なものもあるが、それが「日本文化」と呼んで本当にいいのか。外国人が大好きな茶道、書道などが実際は中国から日本へ伝えられた文化であると主張する人が少なくない。しかし、それぞれが中国に残されているものとは異なる部分もある。すなわち、ゼロから生み出したものもあるが、ほとんどの文化が変遷してきたものであることが分かった。

そして、教育とは何かを考える際に、一般的な意味では学生に教えることを表す。「リベラルアーツ」という言葉が大学教育の中でよく聞かれるようになってきました。日本語に直すと「教養教育」が最も近いけれども、内容は少し違う。我々が小さい頃から、学校教育を受け始め、いい点数を取るため、正解を求めてしまうのも大きな問題になっている。

注目して欲しいのは、答えがない問題にどう対処するか、評価できない場合どう対応する

ことである。「正解」を求めていると不安だという意識で、自分たちの生きる未来、そして、コミュニティの未来を創造するためには、既存の枠組みを政治，経済，社会，歴史などという大きなコンテクストとのつながりから見直し、必要があれば変えていこうとする批判性（批判的な意識・視点・姿勢・態度）を育てていくことが大切だと考える。

【参考文献】

・劉澤海 2008 『母語が第二言語習得への影響』吉首大学学报（社会科学版）Vol. 29, No. 3
・ 「 中 国 の 七 大 方 言 」
<https://blog.goo.ne.jp/qdyingda/e/ddb7f7141358c85b1fd91222e846ded4>（最終閲覧日
2020年2月15日）

多文化共修科目B多言語社会とコミュニケーション最終レポート

母語発表（内容）

個人発表にはスウェーデン語について発表しました。日本人にとってはなかなか触れることのない言語だと思い、概括的な情報（和者数、語族、特徴など）と基本的な特徴（語順、文字、母音の数など）から始めることにしました。本題に入ると、文法が取り上げられます。基本語順は英語に同じものの、より長い文になると語順がどんどん英語から外れていきます。定性の表現法も異なる。定冠詞がなく、定性は語尾により表現される（bil→bilen）。不定冠詞は名詞の種類により2つ使われます。ロマンス諸語と同様に名詞は2種類あるが、ルールなどもなく一つ一つ覚えていかなければなりません。

母音は硬母音と軟母音という2種類に分類され、それぞれ短音と長音で発音が異なり、合計で18あると言えるでしょう。子音の方が容易に発生できると思われがちだが、スウェーデン語独特の発音の[ɧ]は他の言語にないとされるもので、かなり習得しづらいでしょう。ほとんどのスウェーデン語単語の子音を成す子音は18あるが、その上に[ɧ]や[n̥]のような主に語尾に現れる子音もあります。日本語のようにアクセントもあるが、これは揚音符と抑音符という2つに分けられ、ネイティブが言われても意識しないほど繊細なものです。有気音と無気音は両方とも存在し発声されるが、発声による意味の区別はありません。

日本語同様、スウェーデン語には熟語が豊富にあり、これは英語との相違点の1つです。一部の熟語には、接合辞が現れ、2つの形態素を繋げるものとなります。日本語のように意味が分からなくなるほどの長さのある熟語も存在します。スウェーデン語には、塾語は極めて重大な機能を持ち、分ち書きで書いてしまったら意味ががらっと変化する例がたくさんあります。

日本語学習において気付いたことなのですが、いくつかのスウェーデン語の単語の根本的な意味がそれに相当する日本語と同じであるケースがあります。

日常会話に使う挨拶も少し紹介しました。

最後に Jaha, Nehej, Joho という反応語句と、ことわざとスラングも紹介し説明し、発表を締め括りました。

母語発表（振り返り）

2019年の春学期に言語学を勉強し、そこで得たスウェーデン語に関する情報と、自分の経験や日本語を学習する上で気付いたことをもとにし、個人発表を作りました。脚注がないのはそのためです。ある言語のすべてを一つの発表で説明するのはやはり規模が大きすぎるので、自分の詳しいところや歓心を持っているところを取り上げることにし、長文の文法説明や言語と文化の関連性の説明などはありませんでした。そういったところも含めて紹介すればより正確な印象を与えたのではないかと思います。私自身は日本語で演説する際は支障なく流暢に話せる程度ではないのもう少し練習すればよかったですと思います。時間を過ぎたのも改善できると思います。大まかにいうと、凸凹な部分もあったけれどもスウ

スウェーデン語のことを多少紹介できたなと思います。発音全般や、特徴的な部分や単語などを取り上げられて思っていたよりうまくいったと思います。30分で発表するのが初めて（どの言語でも）で、とても緊張しました。この発表で勉強したことと指摘していただいたところを踏まえ、今度よりが作れるよう努めます。

最終発表

最終発表にはスウェーデンの言語教育・言語政策・複言語主義について発表しました。前の授業で色々話した上でまとまりにくく、グループ内でばらつきが少々あったと思いますが、授業の唯一のスウェーデン人なので上記のことについて話すのにちょうどいい機会だと思い、スウェーデンについて発表することにしました。

内容

一番最初にスウェーデンの言語教育を取り上げました。スウェーデンの言語教育においては、必修となる言語はスウェーデン語、英語、と選択言語という3つです。選択言語には基本的にフランス語、ドイツ語、とスペイン語があります。これらの選択言語は、小学校6年から中学校の終わりまで必修となります。他の言語を母語とする親のいる生徒のために課外言語教育制度が設置されているが、これには教師の質が詰問されると共に不足していません。英語の授業は英語で行われます。私自身はこれを受けたことがあり、あまりためになるとは思わなかったため、やめることにしました。

言語政策を見ると、スウェーデン政府が認める5つの言語があります。アイスランドのような保守的で厳しい言語政策はないが、英語の立場が非常に強力で、重視されていえるでしょう。

スウェーデン人は大体英語が話せるが、主とする言語はスウェーデン語です。近年、特に若者の間で、スウェーデン語の単語を忘れた時の道具として英語が使われるようになってきて、スウェーデン語の使用が薄れるのではないかという議論も弾んでいます。スウェーデンのようなヨーロッパの国の人が多数の言語が話せるというイメージは強いが、英語とスウェーデン語の他に外来語が理解できる人の数は限られ、社会のごく一部です。

振り返り

時間の問題ですべてが発表できなくてちょっと残念に思いました。もう少し早くしゃべるか、内容を短縮した方がいい発表になれたと思います。とはいえ、発表できた分でスウェーデンのことをある程度紹介できたのではないかと思います。同じような発表をまたするならば、より簡略な内容になるように頑張ります。

授業感想

非常に興味深く勉強になる授業だったと思います。日本語学習者として言語について色々気付いたことがあり、この授業を通して言語に対する理解と意識が深まったと思います。2019年の春学期に勉強した言語学といくつか重なった部分もあった（危機言語など）

が、どちらかというこの授業の方が実用的・直接的で、直に問題に取り掛かることができたというのが印象に残りました。具体的に言えば、課外活動の見学、ろう者の発表や、他の留学生・日本人学生との交流・グループワークなど、様々な経験をもたらす授業になったと思います。

この授業では、主に他の学生たちやゲストが発表してくれるおかげでたくさんの言語や方言、特に日本の方言のことを知ることができました。自分自身も発表することによってパワーポイントの作り方や演説の能力を鍛えられたと思います。学んだことの中で最もびっくりしたのはブラジル人学校でした。ブラジル人学校には行きませんでした。行った人の話を聞いたら、学校だけでなく買い物などをする際にもポルトガル語が伝わるというのに驚かされました。スウェーデンでもああいっただ社会の隔離が多少起きたりしていますが、外国人の少ない日本でも同じようなことが起きているというのは予想外でした。アイヌ語は授業を受ける前に聞いたことがあったが、講義を受けて思ったより面白かったです。

授業の改善点を取り上げていうと、時間のことが思い浮かびます。いくつかの授業が時間切れに終わり、次の予定に遅れる場合がたまにありました。その要因は発表の時間だったと思います。私自身も含め、個人発表にはほとんどの人、最終発表にはほぼ全員、時間を過ぎてしまい、連鎖的に遅れることになりました。そのため、各自でもう少し時間を厳しく守る必要があると感じました。私はもっと課外活動に参加したかったのですが、都合を合わせるのが難しかったためなかなかできませんでした。

多文化共修科目最終レポート

- 1 秋田の方言について 私は母語・方言紹介の授業の際に、私の出身地である秋田県の方
言を紹介した。はじめに、秋田方言は本土方言の中の東北方言に含まれる。東北方言は
さらに北奥羽方言 と南奥羽方言に分けられ、秋田方言は前者に区分されている。北奥羽
方言には青森県の方言 や、岩手県、山形県、新潟県の一部地域の方言も該当している。
秋田方言は秋田県内でも地域差があり、秋田県北部地方、中央部、そして南部の3区画に
大きく分けられる。県内全体で共通する特徴はあるが、北部地方と南部地方では明らかな
方言の違いが認められる。例えば、北部地方の鹿角地域では、青森県の八戸でよく使わ
れている「～すけ」「～だすけ」という助詞が方言で使用されている。この助詞は「～か
ら」(理由) という意味であり、関西地方の「～さかい」という言葉と用法が類似してい
る。これは鹿角地域が八戸市と地理的に近いことが理由であると考えられる。その一方
で「～すけ」「～だすけ」という言葉は中央部や南部では使用されていない。次に、秋
田方言の発音は標準語として使用されている日本語と大きな違いがある。まず、共通語
における「カ行」と「タ行」は、基本的には、「ガ行」と「ダ行」に変化する傾向があ
る。例えば、オトトイ(一昨日)はオドトイ、オトウト(弟)はオドート、ハガキ(葉書)
はハガギ、という変化をする。また、秋田方言の母音要素は標準語より1つ多く、/a/、
/i/、/u/、/ɛ/、/o/の6つが確認されている。さらに、子音/s/、/c/、/z/と、母音/i/
と/u/ が結合する時、2つの母音は/i/に統合され、共通語のシとスにあたる音節は[si]、

チとツにあたる音節は[tsi]（語中では [zi]）、ジとズにあたる音節は [ɬi]と発音されて区別がない。つまり、標準語の/su/、/cu/、/zu/ という音節が欠如しているとみなすことができる。これは 北奥羽方言に共通する特徴である。秋田方言がなぜ上記のように発音を変化させるのかについて「気温が低い環境で、口を大きく開けなくても会話ができるように」と伝えられ、私もそのような認識であった。しかし、それを示す証拠を探ることができなかった。その一方で、東北地方は農村型社会という限られたコミュニティで過ごす人々が多い。つまり、いつも同じ相手と対話するから短い言葉でも伝わり、このような変化をしたという説もあったが、これも信用に足る情報でなかった。これから言語の学習をする際になぜそのような発音の変化をするのかに視点を当ててみたいと思う。

2 発表を振り返って 自分の地元の方言を改めて考え直すとてもいい機会でした。上京してきてから「恥ずかしい」と思い、あまり方言を使うことはなかったのですが、誇らしいと認識が変わるきっかけになりました。授業内の発表では実際に使う言葉を多く取り上げ、うまく資料をつくることができました。強調する際にもう少し身振り手振りを加えたり、抑揚をつけたりできたらよかったです。

3日本の英語教育政策の変遷について 私は最終発表で日本の外国語教育の変遷について興味を持ち発表をした。欧州のほとんどの国々では、中等教育及び高等教育の段階で、外国語教育として英語が必修科目、さらに もう一つの言語が選択科目として学習されてい

るとスウェーデンからの留学生の友人から話を伺った。そこで私が住んでいる日本ではどのような外国語教育政策がとられているのかに興味を湧き、中でも世界で広く学ばれている英語教育に注目し発表した、外国語教育の始まりは古く、明治時代まで遡る。明治時代初期の日本が行った大々的な革命である明治維新の際に、西洋のものを規範とした近代的な学校制度が創られ、この時外国語教育がはじまった。官立の外国語学校が各地に設立され、それに伴い外国語私塾が発足した。特に英学私塾が多く、この時英語を指導をしていたのは主にキリスト教徒の外国人であり、日本へのキリスト教布教と密接に関連している。中でも1876年に開校した札幌農学校では、英米人が農学校教師としてほとんどの科目を担当しており、英語での授業を行っていた。明治中期になると、1885年に伊藤博文内閣が打ち出した「教育の国語主義化」政策により、それまで独自に続いていた「英語を英語で学ぶ」「英語で専門科目を学ぶ」といった授業から、現在行われているような「英語を日本語で学ぶ」「日本語で専門科目を学ぶ」に変化した。つまり、実学的な英語から文法解説や和読中心の英語へと変化したのである。翌年1886年に高等小学校の科目に加えられたが、この英語教育実施率は明治30年代から明治40年代にかけてわずか6%ほどであった。中学校では、第1外国語として英語が、第2外国語として独語または仏語が、それぞれ課せられた。その後「外国語」は「英語、独語または仏語」となり多様な選択ができた。明治末期に入ると、英語雑誌の創刊や英語研究所の創業があり、さらにその動きは加速した。そして、日本語での説明がなされた英語辞書や英語教科書、英文学作品の翻訳版などが発売され、文法解釈主体のスタイルが確立された。大正時代では、英語学と英文学の専門性がさらに深まる一方で、第一次世界大戦

の影響で 国家主義の思想が広がりを見せ、日英同盟を結んでいたが、英語教育廃止論が浮上した。さらに、昭和時代に入り太平洋戦争が没発すると、多くの人々は敵国の言語として敬遠し、人々の英語教育への関心は大きく衰退した。戦後になると英語学習の人氣が再び高まり、1961年には高等学校において、外国語教育として英語が必修科目となった。その後、高等学校の入試科目に含めるべきだという主張が増え、採用する学校も多くなるにつれて、中等教育では選択科目であるにもかかわらず、実

質的な必修科目として学ばれることになった。戦後から平成時代初期に英語教育の改革が求められていたものの、2002年の学習指導要領改訂まで大きな変化はなかった。2002年の改訂では小学校高学年の「総合的な学習の時間」で「英語活動」の実施、中学校では外国語が必修科目になった。2008年の改訂では外国語の授業は英語で行うという変化があったものの、実践できている学校は依然として多くはない。2018年の改訂では2020年から小学校の中学年の「総合的な学習の時間」で「英語活動」の実施、小学校高学年で「外国語」が必修科目に加えられた。また、中学校の外国語の授業は英語で行うことになっている。このように日本における外国語教育は次第に早い年齢から学習することになり、今後は小学校低学年から外国語と触れ合うようになるのではないかとと思われる。このような政策改善がなされているにもかかわらず、日本の英語能力は世界と比較して低いままである。国際語学教育機関「EF Education First」の2019年調査によると、英語を母語としない100カ国・地域のうち日本人の英語力は53位であった。この調査では4年連続で5段階中4番目となる「低い能力レベル」と認定された。「英語力」

が何を指すか世界共通の認識ではないことや、この調査基準や判定が正しいとは判断できかねないが、TOEFL の国別平均点でも日本の順位は低く、これをみても世界の中では低い教育レベルだと考えられる。これについては母語の影響もあるのでないかと考えられる。日本語は現時点ではルーツが定かではなく独立している言語として考えられている。その一方で、英語はインド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に属しており、イングランド地方を発祥とする言語である。そのためそれぞれの言語に類似点が少なく、ゲルマン語派の母語話者よりも習得が難しいのではないかと考える。また、カタカナの氾濫によって、発音の違い、文法的な違い、語義に対する誤解や寛容からの逸脱などの悪影響があると思われる。

4 発表を振り返って 外国語教育政策に興味が出て資料を作りましたが、時間の関係で英語教育が中心になり、他の言語がどうであったかあまり時間を割くことができませんでした。グループ全体を通してみると、戦争前後の対応について中国の言語教育政策と類似するところがあり、とても面白いなと思いました。グループ内での話合いではカタカナがあるから中国語圏内よりも英語に親しみがあり学習しやすいのではないかと、という意見もでしたが、むしろ悪影響であったことに驚きでした。英語教育制作についてはもっと早い段階から取り入れてもいいのではないかと考えています。家庭内で日本語が使われている限りは英語と日本語が混雑することはなく、正しく言語習得ができるのかなと思っています。ただ「英語の授業は英語で」という政策と現実の実施率との乖離や、人員不足などやるべきことは多く、簡単に進められないのだろうと考えています。

5 全体を通して 私はろう者の方の講演が強く心に残り、その授業の後に、考えにふけたこ

とを覚えていま す。はじめはコミュニケーションが取れることや、手話での交流に楽しさを感じましたが、、ろう者の日常生活の話聞いた時に、こんなにも支障をきたすものがあるのかと衝撃を覚 えました。これから手話を覚えたいと強く思ったほか、手話の中にも多言語あることにも驚 きました。文化というと国や地域などを考えがちだったので、ろう者や盲者にも文化が 広がっているんだなど、己の視野の狭さを思い知らされた機会でした。 また、日本語研究生や交換留学生との意見交流を通して、言語についての視点が増えた ように感じます。危機言語の講演の際に、「危機言語がなくなったらどうなるのか、あまり 経済などに影響はないのでは」というような質問をしたのですが、それはコミュニケーションツールとしての視点からしかみることができていなかったんだなどと振り返っています。 言語はコミュニケーションだけではなく、自己表現やアイデンティティを形成するものとして大切にしていこうと考え方が変わったことを嬉しく思います。

6 参 考 資 料 方 言 歳 時 記 秋 田 県 能 代 市

<https://www.city.noshiro.lg.jp/res/kanko/saijiki/1128> 秋田のことば 秋田県教育委員会編、無明舎出版（2001）

日本の外国語教育政策と共生の論理 1田中慎也 TANAKA Shiya Comptes rendus divers 各種報告「英語教育の歴史的展開にみられるその特徴と長所」盛岡大学紀要 第34号 小川修平「日本人と英語：もうひとつの英語百年史」研究社 斎藤兆史「日本の英語教育政策の理念と課題 一貫した英語教育体制の構築を目指して」上智大学 吉田研作「カタカ

ナ語の英語学習に対する影響」2019 年度日本認知科学会第 36 回大会 P2-2 原田 康也

森下 美和 平松 裕子 早稲田大学 神戸学院大学 中央大学 文部科学省 学習指導要領

文部科学省「小学校外国語活動実施状況調査 (H24)」 文部科学省 今後の英語教育の改善・

充実方策について

多言語社会における思考

1. 自分の発表内容について

今回の「多文化共生」課程で、主に二回の発表を行った。一回目は自分の方言について発表する予定だったが、同じ地域の人が先に発表したのので、自分は代わりに民族言語「土家族言語 Bijikan」のついて発表した。二回目の発表はグループで「各国の英語教育」についての発表で、自分はその中の「中国の少数民族の英語教育」という部分を担当した。それでは、二つの発表を分けてその内容と自分の考えを紹介していきたいと思う。

まず、「土家族言語 Bijikan」についての発表である。このテーマに絞ったのは、自分も土家族の一員である。恥ずかしながら、いくつかの民俗は守って生きてきたが、民族言語や民族歴史などについてはまったく知らなくて、平気で暮らしてきた。今回の発表をきっかけに、いろいろ調べて勉強できた。発表で土家族という民族の現状と Bijikan という危機言語の概況を最初に紹介した。次に紹介したのは、自分の驚いたことで、「Bijikan の仮名化企画」ということである。発音だけではなく、Bijikan は日本語と様々な類似点があると言う。例えば、SOV 語順であること、粘着語であること、動詞の変形ルールなどである。そのついでに、Bijikan の常用句をいくつか紹介してみた。しかし、自分も初めて言うので、うまくできなかった。

その発表で改めて確認できたのは、自分の民族言語を知る必要があるということ。以前は、自分の使わない言語と思って、惜しいとも覚えずに生きてきた。その時は多言語社会の重要性をわからなかった。日本に来て、アイヌという民族を知って、日本政府や民間のアイヌに対する保護を見て、勉強になった。それで初めて民族言語は守ることだと気づいた。その後、危機言語や日本手話の講座を聞いて、面白いと思いつつ、悔しいとも思った。なぜかという、自分の民族言語の面白さもきっとあるに反して、自分は何も言えなかった。それも「土家族言語」という発表テーマを選んだ原因である。少しでもその言語の面白さが話せるようになりたいからである。民族言語の発表でうまくいったところは「Bijikan の仮名化

企画」というものを発見し紹介したところだと思う。日本語を話せる共通点をつかめて、Bijikanの説明をわかりやすくしたと思う。

二回目の発表は、準備時間が少なくて、全体的にうまくできていないと思った。最初に紹介したのは少数民族の民族言語概況と使用状況であった。その現状によって、少数民族の英語教育の難しさを皆さんにわからせようとした。それで、「現代中国における英語教育と教育格差-少数民族地域における小学校英語教育必須化をめぐって-」（新保，2005）について、現在の少数民族英語教育における問題点を紹介した。それは、漢語との同時学習は難しい教員人数が足りないため、英語授業の普及度は地域差が大きい、英語専門教員が少ないため、英語授業の趣味性と専門性が欠けている→学生の学習意欲が低い、民族学校から一般学校に進学したとしても、英語授業についていけないという4つの主な問題点である。その中のいくつかは自分が予想もしなかった。最後に紹介したのは中国の少数民族への支援政策であった。「二言語併用」、「高等学校の少数民族特別パス」、「奨学金地方教員培養政策」などがあるとわかった。慌てて準備したので、実際に発表するときは時間を超えて、グループメンバーたちも迷惑かけ、うまくいかなかった点のもう一つである。

ほかの授業で勉強したところで、バイアリンガル教育においては、とても重要なのは、二つの言語教育だけではなく、二つの言語での思考力も取り入れなければならない。なぜかという、二つの言語とも、おしゃべりしかできなく、深く考えて話せない例もあったから、それを防ぐためである。その点によって、中国の少数民族言語教育にはかなり心配する必要がある。民族言語教育でも、マダリン教育でも進んでいない地域が少なくないと思われる一方、英語教育も加わっている。

感心したのは、中国の少数民族教育現状について、日本の学者も注目していることである。それに対し、中国政府も、民間もさらなる努力が期待される。

2. 授業全体の感想

今回の授業で、いろいろな国の方と交流できたことで、たくさん勉強できた。いろいろな国の言語現状を知れただけではなく、違う国の方がどのような考え方をしているのも少し知れた気がする。

課題と発表が難しいと思いつつも、自分の成長も見られた。多言語社会や多文化共生について理解が深まったと思われる。自分が一つの発表課程しか選べなかったが、皆さんの発表と意見を聞いてもらって、すべての課題に自分なりに考えられた。それから、チームワークの重要性もさらなる認識ができたと思う。自分のグループはディスカッションの段階からトラブルが少しあったため、難しさをかなり感じた。

授業で参加した課外活動も面白くて、意味深かった。朝鮮人学校見学も、ライブラリーも、日本社会のマイノリティーを直感できて、印象に残った。もっとそのような活動を参加したくて、ボランティアもやってみたくなった。

この授業で学んだことと気づいたことを、今後の勉強とか研究に活かしていたら幸いと思う。これからも、多様性をつねに意識し、謙虚な態度で生きていきたいと思っている。

第1部 発表内容とその振り返り

1. 方言紹介—大連語

中国において、大連市およびその周辺で使われていることばは、実は昔方言といわれるほどの特徴をもっている言語ではなかった。しかし、改革開放という中国の経済発展政策の実施によって、ここ30年近く観光とIT業界において、大連市は大きな発展を迎えた。それに伴い、「大連文化」の一部となる「大連語」が急にインターネットにて人気を博した。また、歴史上での出来事によって、「大連語」には日本語とロシア語からの大きな影響が見られている。そのため、今回方言として「大連語」を取り上げて見た。

まず、東京と沖縄との距離を基準にして、大連市の位置を見てみる。東京から沖縄までとほぼ同じ距離である大連(図1と図2)まで、成田空港からの直行便は毎日飛んでいる。



図1

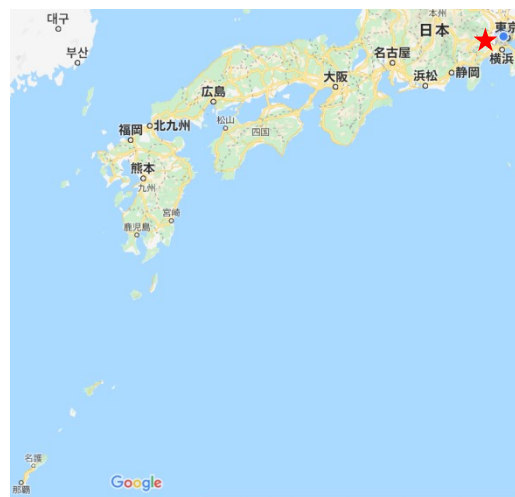


図2

また、日清戦争の時に日本人が設計して建てたの建物の素晴らしさを体験した大連人は、その後、東京の上野駅(図3)に真似して設計し、大連駅(図4)を建てた



図 3

図 4

大連駅が位置する場所は中国語で言うと、「青泥洼桥」（青泥窪橋）となる。その中、「青泥洼桥」の発音は、前の三文字は「こんにちは」から生まれたといわれ、「チンニワ」となっており、その後ろに駅の近くにある有名な橋（橋は「チャオ」と発音される）をつけて、「チンニワチャオ」となったと言われる。意味的にも、昔、他の都市とつなげる唯一の駅として、そこで人と人と会った時にまずあいさつをする、すなわち、そこでよく言ったり、聞いたりすることばとして「こんにちは」を用いられたと言われる。

そのほか、大連語において、ワイシャツのことを「晚霞子」（ワンシャズ）、醤油のことを「正油」（ジャンユウ）といった日本語の発音と漢字を借りて作られたことばは多数ある。

2. 最終発表一言語、文化そして教育

今回の最終発表で、最初、我々のグループでは、皆それぞれが発表したいテーマがあり、それらのテーマを一つにまとめることに苦労していた。しかし、他のグループメンバーから発表で使うスライドを送ってもらった後、一つの発見があった。それは、各国で行われている言語教育、またはその歴史的経緯における言語そのものと文化についての考えであった。その延長線上に、逆に考えれば、それらの言語教育政策の背景には、言語そのものとその国・地域の文化がどのような働きかけをしているかという疑問が生まれた。したがって、まとめとして「言語、文化そして教育」というテーマにした。

発表の内容に関しては、まず「言語」、「文化」と「教育」の意味について、クラスのほかの学生はどのように考えているかを質問し、その中から、現在施されている言語教育政策に潜んでいるナショナリズム性を導き出した。それに対して、人の移動がますます頻繁になってきている現代社会においては、今後の言語教育政策を考える際、現行の政策に対して批判的に考える必要がある。さらに、分野を問わず、そのような「批判性」を必要不可欠な素質として我々が身につけなければならないということをまとめた。

第2部 授業の振り返り

1. 学んだ事

一学期の講義を通して学んだことの中で、自分に最もよい刺激として、文化が言語を生んだだけではなく、それより大切なのは言語をと通して文化を考えることである。言語がなくなるといふのは、それを生んだ文化もなくなってしまうことと私は捉えている

2. 不十分だった事

卒業論文等のことによって、韓国人学校やブラジル人学校への見学に参加することができなかったことは非常に残念だと思う。今後、そのような機会があれば、必ず一度でもそういった学校に行ってみたいと考えている。

これまでの発表において用いた文献や資料などは「参考文献」および「参考資料・データ」を参照する。

【参考資料・データ】

厚生省(2018) 「外国人雇用状況の届出状況表一覧」

厚生省(2019) 「日本企業における留学生の就労に関する調査」

国際交流基金(2017) 「JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック」

経済産業研究所(2018) 「外国人の日本での就業意識に関する調査レポート」

埼玉県(2019) 「報告書 平成 30 年度埼玉県外国人住民意識調査ー日本語についてー」

文化庁(2014) 「平成 26 年度『生活者』としての外国人のための日本語教育事業」

文化庁(2019) 「平成 30 年度 国内の日本語教育の概要」

文化庁(2019) 「報告書 平成 30 年度日本語教育総合調査ー日本語の能力評価の仕組みについてー」

法務省(2018) 「特定技能外国人受入れに関する運用要領」

法務省(2019) 「2018 年 在留外国人統計 結果の概要」

法務省(2019) 「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策(改訂)」

法務省(2019) 「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策の充実について」

法務省(2019) 「出入国在留管理(2019 年版)」

法務省(2019) 「出入国在留管理基本計画(2019 年版)」

法務省(2019) 「中長期在留者の在留管理制度等の施行状況に係る検証結果について (概要)」

法務省(2019) 「平成 30 年における留学生の日本企業への就職状況」

文部科学省(2019) 「外国人の子供の就学状況等調査結果 (速報)」

最終レポート

1, 発表内容とその振り返り

自分の班は危機言語についての発表を行った。自分が危機言語について発表したいと思った動機, このテーマを選んだ動機は授業で危機言語についての話を聞いて興味を持ち, より詳しく調べて理解してみたいなと思ったからである。また, それらの危機言語はどのように普通の言語から危機言語へと変化してしまったのか, そうならないようにするためにはどのようなことを行えばいいのか, どのような取り組みがなされているかについて知りたいなと思ったからである。

自分は危機言語というテーマの中でも危機言語の歴史的背景, メディアの出現と危機言語の関連性に特に着目して調べて考察した。

調べると世界の国には戦争や時代の変化により母語が変わった, または変えざるを得なくなり他の言語を母語として使っている国がたくさんあることを知った。例えばブラジルの人々は現在でも主にポルトガル語を話しているが, この理由としては 1500 年にカブラルがブラジルに到達し, それからブラジルはポルトガル領となったことが影響している。日本人は琉球語やアイヌ語などの言語もあるがほとんどの人は日本語を話す。そして長い間日本人は日本語を主として使っている。ほかの国の植民地になったことがないというのがその理由の一つに挙げられる。そのため, 外国に比べて言語の重要性や危機言語になりかけている言語があることすら理解していない, 分かっていない人がたくさんいる。世界に目を移すと 2500 を超える言語が将来的に消滅する可能性があることと示されている。(UNESCO データ)

その理由として一つ目に挙げるのが戦争, 紛争だ。例を挙げてみていきたいと思う。アブハズ語という言語があるがこれはジョージア内のアブハジア共和国で使われている。紛争によりグルジア語が学校教育及び公教育の場で強制されたため, アブハズ語の話者は激減した。この例に見られるように民族紛争や戦争が言語の衰退を加速してしまう例は調べてみると決して少なくはなかった。

また, 朝鮮語と日本人 (危機言語というわけではないが戦争との関連, 外部的抑圧関連で) についても述べておきたいと思う。

日本人は第二次戦争期に日本語の習得, 日本語での読み書きを強要して朝鮮語を抑圧した。そして 1930 年代後半に特に強権的になった。

↓

1942 年代から朝鮮語の段階的禁止といえる日本語常用運動が社会運動の形で全朝鮮で展開

された

↓

学校についても統治末期には法令で日本語が強制された

「一般民の物資配給の際に用語は必ず国語たるべく、故に朝鮮語を使用するものに対しては、配給をなさざること」（京畿道富川郡より引用）

これらから日本語を話さなければ配給はしてやらないという内容で日本語を強制していたことがわかる。ということは…もし戦争に日本が勝利していたらこの政策が戦後も続き、朝鮮語は危機言語どころか消滅言語になっていたのではないだろうか。このような政策、強制運動は現代にも影響していて高齢の方は韓国人でも日本語を主に話す人もいる。

理由の二つ目に挙げられるのが時代の変化、メディアの出現だ。近代化する中で標準語教育が浸透した。現在危機言語として認定されているものやもうすでに消滅してしまった消滅言語の特徴の一つに読み書きや発音などが複雑でなかなか浸透しないという特徴がある。そのため話者が多く、さらには少数言語よりも習得するのが簡単で話せると役に立つ言語を母語とするようになった人が増えたのではないかと考える。

また、携帯電話などのメディアの出現により直接会わなくてもコミュニケーションをとれるようになった。メールなどのやり取りをする画面上では方言やなまりなどはあまり重視されたり、使われたりしない。そのため地域のコミュニケーションに使われてきた方言の大切さを認識し、それを育んだ地域の伝統や文化とともに守ろうという意識が薄れてきてしまっていることが消滅言語、危機言語が生じた原因の一つであると考えられる。

これらから自分は一人一人がもう少し危機言語について理解し、日本で使われている言語さえも消えかけようとしていることについてもう少し関心を持つべきだと考える。

この危機言語についての発表では岡先生から日本は単一言語国家であるという自分の発言に対して指摘を受け、改めて考えなおし、また考察して自分の発言が不適切であったことが分かった。評価のシートを見て発表の時下を向いているとの指摘があったのでこれからは気をつけたいと思った。うまくいったこととしてはパワーポイントが見やすかったと書いてくれていた人がいたのでその点はよかったと思う。また、このような発表をする機会にはほかの授業でもあると思うので今回の発表の評価を生かしてより良い発表ができるように頑張りたいと思った。

今後の課題としては今回危機言語について興味を持ち、考察して発表をしたが他にもたくさん興味がある、より詳しく学びたいと思ったテーマがあったので発表はもうないが時間のある時に調べてみたいと思う。

2, 授業全体の感想, 授業で学んだこと

この多文化共修科目 B の授業では先生が行う授業だけではなく実際に課外活動として様々な場所に行き見学したりゲストティーチャーをお招きした授業を受けたりととても面白く楽しみながら学べる授業だった。この授業で多言語多文化社会に関する理解を深めるとともに、多様な文化を持つ学生の議論や共同学習を通して多種多様な人々と対等にコ

コミュニケーションをとることが可能な能力を高めることができたと思う。自分は外国に一度も行ったことがなく、外人の方と話したことも1, 2回程度しかなかった。なので実際に様々な国の方とお話しすることで今までには知らなかったことなどたくさんを学ぶことができたし、初めての経験をたくさんすることができた。

自分はフィールドワークで立川の朝鮮学校に行き、見学をしてきた。そこで実際に在日朝鮮人が学校でどのようなことを勉強してるのか、またその学習環境はどのようなものかを見てきた。実際に行かないとわからない、学ぶことができないことがそこにはたくさんあったのでとてもいい経験になった。ブラジル学校には予定が合わずいけなかったがとても興味があるのでぜひ機会があったら訪れてみたいと思う。

ゲストティーチャーが来て行ってくれた授業で1番印象に残っているのは耳が不自由なゲストティーチャーがきてろう文化などについて話してくれた授業である。自分の中の「耳の不自由な人」の定義の一つに話すことができないという思い込みがあったのでいきなり声を出し話し始めたのがとても驚いた。しかし、たくさん苦勞をして、勉強して話せるようになったからと言ってそれが＝幸せかというそうではないと知った。話せるというのが原因で「ほんとは聞こえてるんだろ」とか「無視するなよ」といった酷いことを言われるから外では話さないで言葉を話せないふりをして手話で会話するという先生の話が本当に心に突き刺さった。

他にもたくさん面白い、楽しい授業がありそれぞれの授業で全然違う勉強をすることができた。特に多文化主義、多言語主義、複文化主義についての授業や在日朝鮮人の話には興味があったので聞いて良かった。自分はA類社会という学科でその中でも歴史の分野を専攻しているので在日朝鮮人の歴史を学ぶことはとても意義があった。教科書や授業でしか学ばなく何んとなくしか知らなかったので実際に朝鮮学校に行ったのはかなり大きな収穫であった。

自分はこの授業で学んだ多文化共生についての知識などを今後しっかりと生かせることができたらと思う。また、教師になったらしっかりと多文化共生の大切さを詳しく教えようと思う。

多文化共修科目B多言語社会とコミュニケーション最終レポート

台湾の総人口：23,598,776人（2019年11月）

漢民族：86.7%（福佬人：67%、客家人：13.1%、外省人：6.6%）

台湾の原住民総人口：570,952人，2.42%（2019年11月）

海外からの移民：797,436人，3.38%（2019年11月）

どっちでもない：7.5%

台湾は北海道と同じ、清朝の時から中国の国土に納入していた。この前でもうあっちこっこの商人達が商売の為にこの美しい島、「フォルモサ」に拠点として活動している。

朝廷が国土に納入した後で、他の国の商人達を追い払って、だから今台湾はヨーロッパと関係しているの建物と生活の文化しか残らなかった。

台湾の原住民

昔でずっと台湾に住んでいるの人達、地形によって、平原に住んでいるの平埔（へいほ）族と森が溢れるの山脈に住んでいるの高山族を分けています。

オーストロネシア語族（日本語は南島語族）の起源は台湾にあり、5000年前以降に分化し始めた。台湾の原住民達が使っているの言語は台湾諸語と呼ばれている、「フォルモサ」と言う島に住んでいる人達の言語から、フォルモサ語も呼ばれていた。

台湾に移民しているの漢人達は平原に住んでいるの平埔族の縄張りを奪って、原住民達を追い払って、種族を同化して、平埔族の人はごく少しか同化を拒んで、自分の文化を守っている。でも高山族は山の中に住んでいる、生活は難しい、そして活動はにくい、だから漢人は縄張りを余り狙ってなかった、今は沢山の文化を保存している。原住民達は狩りが得意から、漢人は沢山の獲物を買っている。

今公認された原住民は16族、公認されていないは14族。

福佬人(閩南人)

福佬、或いは河洛と記す。読み方は共に「ホーロー」。

顔思齊は1622年人を集めて、台湾に開発しに来た、メンバーは大体漳州、泉州からの人です。

私の先祖は漳州からの閩南人です、今はまだ漳州的閩南語を喋っている、多くの人は私の実家「宜蘭県」に集めている、この閩南語は今で「宜蘭弁」を呼ばれている。泉州の閩南語は「鹿港鎮」の人の方が喋っている、地域によってを「鹿港弁」と呼ばれている。

客家人

客家、元々は他の地域に移民したの人々の称呼です、でも政府の試験制度は出身地を統一しか受けられないです。

最後は移民の人々に試験を受けるように、客家で出身地として認めました。この原因で、客家人は人によって色々の言語が使っている。例えば、昔台湾に居たの閩南人と客家人は喧嘩した事が有る、でも皆は中国からの漢人から、実は余り敵や味方を区別しなかった、だからどんどん皆は言語を区別の仕分けにしていた。最後は閩南人の中では客家人が居る、粵語がメインの客家人の中にも粵語が分かるの閩南人が居る、最後は微妙な終わり方でした。客家人は閩南人より先に台湾に住んでいたの説がある、でもあまり有利な証拠がない。

外省人

主は国共内戦（こっきょうないせん）で敗戦して、台湾への撤退されたの中華民国の人々です。

中国大陸各地から集めたの軍人ですから、皆はそれぞれの方言を語ります。でもこの軍人たちの方言是北京語に近い、交流の時は閩南語、粵語の様な理解できないの状況が少ないから、国語運動の時は方言として禁止するこは無かった。

台湾閩南語の紹介

台湾閩南語は余り主詞、補語の位置を特定しない、動詞や助詞に合わせて、変える事がある。例えば A 君は B 君に殴られた、A 君はこの事実を語るだけなら「伊拍我」彼は私に殴った、もし B 君こそ殴った人を強調するなら「伊共我拍」主詞と補語は先ず言える、動詞や行動の説明は最後で言える。

台湾語は声調言語、普通の会話は地域によって、7 声や 8 声の声調が有る。

台湾閩南語の歌は音程が声調に合わせるの歌謡の様に、多段歌詞を作詞するのはとっても難しいです。数多の閩南語曲は同じループで繰り返すだけ。

台湾閩南語の曲『望春風』

獨夜無伴守燈下 清風對面吹
十七八歲未出嫁 看著少年家
果然標緻面肉白 誰家人子弟
想要問伊驚歹勢 心內彈琵琶

想要郎君做姪婿 意愛在心內
等待何時君來採 青春花當開
聽見外面有人來 開門甲看覓
月娘笑阮慳大呆 被風騙不知

日本語の由来言葉

台湾語白話字	台湾語ローマ字	中国語文字	由来文字
--------	---------	-------	------

黒輪	o-lián	關東煮	おでん
榻榻米	tha-thá-mih	榻榻米/豊蓆	畳
	thián-pú-lah	甜不辣/天婦羅	天ぷら
	lo-lài-bà	螺絲起子	ドライバー (工具)
	không-kuh-lih	水泥/混凝土	コンクリート
自轉車	chū-chóan-chhia	腳踏車	自転車
飛行機	poe-hêng-ki pe-hêng-ki	飛行機	飛行機
風邪	hong-siâ	感冒/傷風	風邪

台湾原住民語の由来言葉

台湾語白話字	台湾語ローマ字	意味	由来言葉
阿西	a-se	天然と言う事。	シラヤ語由来
𧄙	Lo	高い、主は身長で使う。	シラヤ語由来
嘆攏共	pu-loonn-gonn	空気が読めない事。	パゼツへ語由来
牽手	khan-chhiú	妻、嫁。	シラヤ語由来

南島語の由来言葉

台湾語白話字	台湾語ローマ字	意味	由来言葉	由来文字
柑仔蜜	kam-á-bit	トマト	フィリピン語	Kamatis
蓮霧	lián-bū	オオフトモモ	インドネシア語	Jambu
西谷米	sai-kok-bí	サゴパール	マレーシア語	Sago

檳榔	pin-nn ^h g	ビンロウ	マレーシア語	Pinang
----	-----------------------	------	--------	--------

ヨーロッパの言語の由来言葉

台湾語白話字	台湾語ローマ字	意味	由来言葉	由来文字
皂文/雪文	sap-bûn	石鹸	ポルトガル語由来	sabon
麩	pháng	パン	ポルトガル語由来	pão
甲	kah	エーカー	オランダ語由来	akker
賻	pak	リース	オランダ語由来	pacht/pachten

台湾閩南語の現況

若い人は余り使っていない。

面白い表現や喧嘩する時の勢いを強化する為に良く使ってる。

田舎で使った方が多い。

年上の人為のチャンネルが若干存在する。

日清戦争以来の台湾言語

1895年、清は日本に敗北、下関条約によって、台湾は日本に割譲された。

当時は国語(日本語)運動を提唱していた。

日本語が分かる台湾人はより良いの福祉が貰える。

日本語を勉強するの台湾人が増えている。

日本統治時代の台湾言語



二次戦後の台湾言語

二次世界大戦の後、日本が敗戦国になった、台湾は国土を失った中国国民党に預かった。

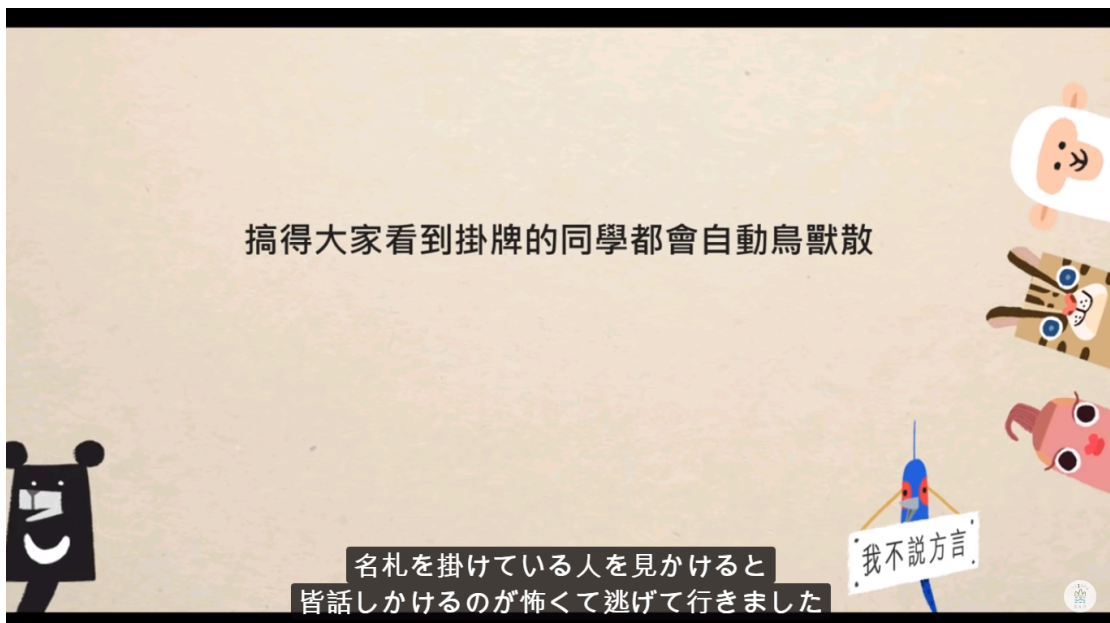
内戦で負けた中国国民党は中国大陸を回収するをずっと企んでいた。

台湾人にかかるの暇がない。

中国語以外の言語を拒んでいた。

でも国民党が連れた人達が自分の方言を制限していなかった。

中華民國の台湾言語(台湾方言)



現在の政府の対策

台湾閩南語系の人口は 67%に居ます。

台湾一番代表的な方言(母語)です。

台湾閩南語が台湾語として認識しているの人がとても多い。

台湾は今学年度で十二年国民教育を実行していた、母語教育を導入していた。

公共テレビチャンネル

より中立のチャンネル、様々の言語の番組が放送している。

今まではインドネシア語、手話、タイ語、ヴェトナム語、閩南語、客家語、原住民語の番組がある。

2019年7月1日は台湾閩南語だけのチャンネルが成立した。

私にとって母語(台湾閩南語)は？

実家に住んでいた婆さんは台湾閩南語しか喋れない、唯一の交流方法です。

台湾の方言は昔では下品な言語を認識していた、不公平と思っていた。

台湾閩南語が理解して、喋れる私が重要な役割が持つと思います。

今の台湾人は、自分が持っている文化はかんけいが余り大事にしていなかった、昔で色んな国で支配されていた事と関係が有ったかもしれない。

私はとても惜しいと思います、台湾には色々の歴史、民族、建物、生き物、そして多くの文化が共存している、もし無くなったら、余り取り返さないと、例えばもう絶滅したの台湾雲豹(ウンピョウ)、今は昔の写真しか見えない。

その為に、台湾の事を一杯調べて、理解して、皆に良く伝えように良く整理していた。

皆の評価の中で、分かり易いの評価が多い。でも赤外線をスクリーンを示したいから、視線は余り皆に移ってない、体の動きはちょっとシンプルな気がします。今後は如何やって、閩南語を自然に会話を入れる事。閩南語を使って、コミュニケーションが出来て、でも会話する相手は理解しますのやり方。

今学期の授業は色々を勉強していた、知った事や知らない事、そして色々な人と出会って、交流していた。日本に来て、長い間で住んでいるの機会は余り無いと思います、そして色々で体験して、勉強しているはもっと貴重な経験です。

日本に来て前は余り日本語の文章を作る機会が無かった、レポートや授業後の振り替えは沢山の時間が掛かっている、これからはもっと練習していると思います。

多文化共修科目B 期末課題 最終レポート

[最終発表の振り返りと課題] 私は今回の最終発表のテーマとして「危機言語」を採択した。とりわけ、言語復興の取り組みについての的を絞り、危機言語の定義を明確にするとともに日本国内において危機言語の復興のためにどのような団体が活動を行なっているのかを発表した。

このテーマを選んだ動機は、授業で琉球諸語を勉強した際に国立国語研究所所属の山田氏から「何もしなければ言語や文化は次世代に受け継がれることは難しい」と伺ったことにある。私自身、国内の危機言語の状況について知識が乏しく非常に反省した。琉球諸語に関しては絵本によって物語とともにことばや独特の文法が存在することを継承しようとする取り組みがなされている。講義を受ける中で、他の言語についてはどのような継承方法があるのか、他に復興の取り組みはあるのか大変興味を持ったので最終発表のテーマに決定した。質問は発表内では受けなかったが、授業後に「言語復興の取り組みに用いられるツールについてより詳しく説明があってもよかった」との感想を頂戴した。発表内で、冒頭に軽く紹介をしたのだが不十分であったようだ。文献で調べる際、やはり存続が危うい状況下に晒されている言語ほど話者や使用者（文字や語彙を理解している人を意味する）が少なく、聞き取り調査が困難であることを知った。これを踏まえ「音声記録、文書保存」が中心になっていることを発表内容に入れたのだが、文書の保存は書き写しなのか複製なのかによっても差異があるのなど、もっと深掘りした内容にしてもよかったと感じた。日本言語学会に取り組みについて問い合わせをしたのだが返答が得られず紹介できなかつ

たことが残念だ。発表のよかった点は、「危機言語」の定義を冒頭で説明したことで後に続く言語復興の取り組みについて、目的がより明確になったことである。国立国語研究所のデータベースも紹介し、危機言語復興への取り組みが「啓発」だけにとどまらず研究調査や保存文書の共有など多岐に渡ることを発表できて満足のいく発表となった。「危機言語復興の取り組み」の今後の課題としては、実態調査を踏まえて記録した言語の状況からどのような「復元」を目指すか、という点を挙げたい。話者を増やすことは現実的ではなく、伝承できうるほどのコミュニティが存在しない言語、方言もあるのではないかと思う。重要なのは「どう使うか」ではなく「どう伝え残していくか」であると私は考えているため、山田氏が行なっている絵本出版を例に、子どもが言語に触れる機会の創造、データベースを活用した地域学習の一環に取り入れるなど、方法を大きな視点で考案していくことが必要なのではないかと感じた。グループ内で危機言語について体系的に内容をまとめ、現状の把握から海外の動向、日本国内の復興への取り組み、具体的な危機言語の紹介など、豊富な内容で発表を行うことができ、非常に授業の学びが深まった。危機言語は他人事ではないことを改めて学んだ。

個人発表は土佐弁について紹介を行なった。土佐弁は歴史ある方言であり、標準語と大きく異なる点も多く、興味を持って聞いて頂けたのではないかと思う。発表内では具体的な使用例はもちろんのこと土佐弁特有の過去完了形が存在することも紹介した。「言語」について学ぶ際、自分の知識の中でどのように「違い」を説明できるかが大事なのだと授業を通じて学んだため、英語や日本語の間にある文法的な差異をニュアンスや雰囲気にと頼ら

ず説明することができて満足している。授業後に「土佐弁と幡多弁の使い分けは住んでいる地域によって明確か」との質問を受けた。土佐弁はやはり使用者が多く県域全体で話者が存在するが幡多弁は西部、とりわけ高齢の方が使用する感覚がある。地域と言語を学ぶ上で、土地の知識、歴史の理解も欠かせないことを改めて感じた。今後も興味を抱いた方言や言語については、使用されている現状のみならず歴史や地理知識もあわせて学んでいくことを心がけたい。様々な観点から物事を思考することが「多言語、多文化」を捉えるうえで最も重要なことなのだと私は考えている。

[授業全体の感想、振り返り] 春学期に多文化共修の授業を履修しなかったこともあり、私にとって大学に入学して初めて留学生の方とともに学習する貴重な機会となった。授業のテーマは「多言語・多文化 社会」であり、ゲストレクチャーや課外活動を通して「言語」と「文化」はそこに存在している人間の在りようであると、私は考えるようになったと感じている。特に印象に残っている学習内容は、ブラジル人学校訪問である。朝鮮学校も見学し、「言語と民族意識」について知識を得たのだが、ブラジル人学校で伺った「ダブルリミテッド」問題については衝撃であった。子どもたちは必ずしも望んで日本で暮らしているわけではないことは朝鮮学校でも同じことが言える。しかし、大きく違うのは自分のアイデンティティを確立する時期の違いなのではないかと感じた。在日コリアンの子どもたちは生まれながらにして朝鮮人としての民族教育を受けていたり、ルーツが明確だったりして 日常に使用する言語が日本語だとしても朝鮮語を学ぶ環境が整っている場合が多

い。しかし、ブラジル人学校で高校生と話をした際「親の仕事の都合でよくわからないけれど日本に来た」「卒業したらブラジルに帰るから日本語はあまり勉強しても意味がない」と聞き この状況では日本語はおろか母語の教育機会も奪われていると感じた。私はまだまだ知識が浅く、なぜタブリミテッドなる状況が生まれてしまうのか（母語の教育も日本語の教育も疎かになってしまう学校制度の問題点）という根本的な理由が明確ではないが、多文化主義を推進するためには、文化や言語が共存できる環境を整えることより、まずは個々人の母語、文化を継承し守ることが先決なのではないかと考えている。授業内で、さまざまに留学生と交流したが、「自分のルーツや言語に誇りがあること」は、他者の所有する文化と言語へ敬意と興味をもってコミュニケーションを取ることと密接に関係することを実感した。ブラジル人学校の生徒が置かれている環境は良好とはいえないが、自己の文化と言語への理解を深め、その上で生活環境である日本文化、日本語を学ぶことで少しでも異なる国籍同士と一緒に生活できる地域社会になってほしいと願っている。また、12月に参加したヒューマンライブラリーでは多文化・多言語の枠を越え、マイノリティの方々や障害、病気についても考えを深める機会となった。もっと一人一人と生い立ちや人生の困難について対話を深めたかったことが心残りだが、自分の人生にはない視点を実際に感じることができたと思う。特に、LGBTについて私は教育学部の授業で「支援」という観点から考えることが多かったのだが、寺田留架さんの「みんなで悲しさや嬉しさ、困りごとを共有する」というお言葉が大変印象に残っている。多言語主義、多文化主義にも同じ

ことが言えると思うが、様々な生き方や価値観が存在することを批評したり優劣をつけたりするのではなく「認め合う」「分かち合う」という考えが、教育や福祉の世界に携わる人間に限らず持つことが、今後重要になってくるのではないだろうか。授業内ではろう文化、在日コリアン、危機言語、方言、移民問題などさまざまなテーマを扱ったが、共通しているのは「受容と共有」というワードだったと私は思う。文化や言語は時に対立を生み、マイノリティは差別の対象にもなる。しかし、社会で生活する人々に「受容」できる価値観と「共有」できるつながりがあればそれは「共生社会」といえるのではないだろうか。半年間、自分の知見の狭さを痛感し、様々な意見を学ぼうちに得たことは、このような受容と共有のスキルを高めていくために教育にできることは何か、福祉が担うべき範疇はどこにあるか、ということだったといえる。

多文化共修科目を履修して、教育や福祉の一方向的な知識だけではなく豊富な文化と言語に触れることができ大変勉強になった。今後の学習も「文化」「言語」の視点をもって取り組み、いつでも気がつかないうちに自分の価値観だけで判断していないか自省を忘れることのないようにしていきたいと思う。岡先生をはじめ、共に文化と言語を学び、考えを深め合った留学生の皆様、履修生の皆様に深く感謝している。私の専攻は福祉であるが福祉とはいっても決して誰にでも同じ「権利」を守るべく制度や活動が存在しているかといったら必ずしもそうではない。不利な状況下に生きる人や、文化や言語を剥奪される危険下にある人を救える方法も、十分ではない。こうした問題に福祉や教育ができることはこの多文化共修の授業で学んだ「共有と受容」のマインドなのではないかと思う。今後も出

会う多国籍の人間や、マイノリティに向き合う人間、障害や不利益と戦う人間に対して私ができることは、知識を振りかざすことではなく受容し、困難や状況を共有することだけなのではないかと考えている。授業を通してこの価値観を得られて本当によかった。

岡先生、学びの多い授業を半年間ありがとうございました。今後も学んだ知識と価値観を生かして日々精進して参りたいと思います。

多文化共修科目B

最終発表を終えて、単純に準備不足な点がありました。資料ももっと集めるべきでしたし、もっと発表もよくできたと思います。ただ班全体としては、うまくまとまっていて、他のメンバーのおかげです。今回私は、日本語の危機ということをテーマでプレゼンしました。

どうしてこれを発表したかったのかというと、やはり本を読んでいる、偶に日本語自体がなくなると述べている評論家や投資家などが述べられていたからです。彼らが何も考えなしにこれを本で述べることはまずないので、私も興味を持っていろいろ調べましたが、なかなか根拠となるものはありませんでした。しかし、地方の方言はこのままでは消滅して

しまうことは十分理解できました。私の地元 の西諸弁もいずれ無くなるかもしれません。無くなっても困ることはないかもしれませんが、私たちからしてみれば、寂しいですし、故郷に帰っても帰った感が無くなる と思います。 私たちは、我々のもっとも上の上の世代が作ってきた言語、文化は守る義務がある と思います。因みに私は東京に住んで4年目

になりますが、標準語は話せません。どうしても地元の方言が出てしまいます。よく「なんて言った？」と突っ込まれますが、気にせず、使い続けています。何が言いたいのかと

いうと、若い世代がもっと方 言を使うべきだということです。そうすることで、いろんな人に興味を持たせたり、面白そうからはなしたと思う人が出てくるかもしれません。そう

言った点では、マツ コさんの番組である「月曜から夜更かし」という番組は素晴らしい番組だと思いま す。地方の方言に対しての興味を持たせ方がうまいなと思いました。要する

に、興味 を持たせる方法はいくらでもやりようがあるなと思います。そこで、私が何かできなと考えた時、今年僕はあることをしようと決めました。それが Youtube です。この youtube で方言を使って動画を配信していきます。まずは 宮崎県の中にはいろんな方言が

あって、その中に西諸弁という種類の方言があることを知ってもらう。まずは認知度を上げる。そこから始める必要があるなと思いました。そして、次に宮崎の良さを発信して行く。これは県外から移り住む人を増やして行く作戦です。どうしても地方は人が減ってきます。しかし、都会にはない素晴らしいところが地方にあるのも間違いないのです。それをしっかりと発信できれば、県外の人だけでなく、海外の人たちも住みたいと思うと考えました。僕はいずれ宮崎県の観光大使になる予定です。そのためには、まず影響力を持つことが大事だと思います。現在、経営者になるために頑張っています。20代で成功して、また自分より若い世代を盛り上げていきたいと考えています。それと同時に宮崎も盛り上げていきたいと考えています。こんな考えの人が各地方に1人でもいたら、地方の言葉は維持して行くのではないかと思います。簡単なことではないのは分かっています。しかし、どちらにせよ誰かが動かないといけません。だったら自分が動こうと思います。今回の発表でかなり自分の方言について考えさせられました。いつ自分の方言も危ない状況になるか分からないなと思いました。1人1人何ができるのか考えなければならぬ時期なのかもしれません。

この授業を通して感じたことは、やはり国境を超えて人と話したり、学習することは楽しいなと思いました。私も春学期までロサンゼルスに留学していましたが、そこでもいろんな国の人たちとコミュニケーションをとって、勉強していました。かなり学習意欲が増しました。たとえ英語がうまく話せなくとも、一生懸命話していたら、相手もちゃんと聞こうとしてくれるし、周りも助けてくれます。学習は助け合いでもあります。それを改めて感じることができました。次に、いろんな言語に触れるということです。他の国でも日本

語と一緒に方言があって、中国の中でもいろんな方言あって、こういう授業でないと思うことがなかったであろう言語もたくさんありました。特に面白かったのは、在日コリアンの発表で日本語と韓国語が混ざって話す時が、とても面白くて、印象深かったです。他にもスイスではどんな言葉があったり、台湾語と中国語の違いだったり、いろんな国の言語に触れることができ楽しかったです。また、ろう者と話者の時にも実際にろう者の方に来てもらって、話をしてもらったりした時は、彼が同じ宮崎出身だったことに親近感はもちろん。こうやって全国で頑張っている人を見て、インスピレーションを受けました。自分もまだまだこれから頑張らないといけないと強く思いましたし、ろう者、話者についても知識不足で、知らないことがたくさんありました。他にも沖縄語を研究されている方々にも来ていただいて、沖縄語についての実態や言語など教えていただきました。沖縄語に関しては他の方言とは違って、一つの外国語かのような言語をしていて大変難しいなと思いました。自分の方言でも高齢の方が話されると理解できない時があるのですが、その時以上に理解できない言葉でした。それでも面白く授業をしてくださったので、興味を持ったし、ちょっと自分である後沖縄の友達に連絡して、沖縄語について語りました。どの授業も多文化共修科目Bでなければ学ぶことができなかったのも、とても充実した時間でした。

自分としてまだまだ不十分だった点は、全員と話が出来なかったことです。確かにいろんな人と話して、いろんな言語を知ることができましたが、逆に日本人の方とはあまり話すこ

とがなかったなと今ふと思いました。自分からもっと積極的に話しにいけばよかったなと後悔も少ししています。ただ楽しく授業ができていたのでそれはそれでよかったのかなと思います。後は、発表です。自分の西諸弁の発表もだし、最後の発表もそうですが、もっと詰めて、仕上げて発表すればよかったと思います。自分の方言紹介でもあの短い時間に どうしたら興味を持ってもらえるか。そこをもっと追求してプレゼンできなかったのが心残りです。ただ、地元の自己PR動画を流したのですが、中国人の方が知っていると言ってくれました。国境を越えて知っている人がいるんだなあと感動しました。やはり、Youtubeの影響力は計り知れないなと感じました。だからこそ私も自分のチャンネルを開設しよう決めました。どんなチャンネルにして行くかはまだ決めていませんが、楽しみにしてください。この授業で学んだことは最大限生かしていこうと思います。最後のプレゼンもなかなかうまく発表はできませんでしたが、自分に何が足りないのかははっきり分かることができたのでよかったです。今年目標の一つにプレゼン力に身につけることが必要だと感じました。とある評論家がプレゼンは“人に話すことではなく、人を動かすこと”と仰っていました。その通りだと思いました。人を動かすプレゼンができるようにいろいろプレゼンを作って発表していきたくおもいました。この授業を受けて、また違う自分が見えてきましたし、良い点、悪い点も見えてきました。そこをこれから良いところは伸ばして、悪い点は改善していきたいです。この授業を最後に受けることができよかったです。先生にもですが、学生にも恵まれた環境で授業を受けることができました。今後もこのような国際的なことに関しては、どんどん積極的に参加していこうと思います。ありがとうございました。

多文化共修科目 B 最終レポート

1 自分の発表内容

【母語・方言紹介】

私の今回の発表は、出身地の奄美大島の方言について発表しました。私自身、奄美大島という土地や風土、文化がとても大好きで誇りに思っています。そんな奄美大島には特徴的で非常に独特な方言がたくさんあります。そんな自分の幼いときから育っていた奄美大島という土地やそこで話される方言をあまり知らないような人たちや留学生の学生に伝えたいと思い、この発表内容に決めました。

私の出身地である奄美大島は沖縄県の北方、鹿児島県の南西に位置する島であり、旧琉球藩や旧薩摩藩の 2 つの地域からの影響を受けており、奄美大島とその成す群島は太平洋戦争後には GHQ から北琉球として支配下に置かれました。現在では鹿児島県に所属しています。このような奄美大島の地理的特徴・歴史を最初に紹介し、奄美大島についてのことを紹介した上で島の言語についての説明をしました。特に奄美大島には、北奄美大島方言、南奄美大島方言、喜界島方言、徳之島方言の 4 つの方言があり、話者は約 2 万 5000 人とされていて、言語消滅危険度評価は“危険”と定められている。奄美大島の方言がこのように消滅危機言語となっている理由としては、数十年前まで学校などの教育機関で子どもたちを中心として、島くてい(方言)を使った者は方言札をかけさせ、処分を与えるなどの方言排斥運動の影響を受けて、純粋な島くていを話せる人が極端に減ってしまったと考えられます。40、50 代よりも下の世代のひとたちは、島くていと本土の標準語を組み合わせたような「トン普通語」と言われるような新しい方言を使っていることが多い。それにも関わらず、奄美大島の方言は非常に特徴的であり独特なものであります。このように、奄美大島の方言には数多くの魅力があります。

今回の発表では、話を聞いてくれた人たちの感想にもあったように奄美大島の魅力が伝わったのがまず最初に良かった点だったと思います。また、留学生や日本人の学生などどんな人達にもわかりやすいようにスライドショーを工夫しました。例えば、スライドショーなどは文字ばかりのスライドを作るのではなく、写真やイラストなどを中心とした文字の少ないようなわかりやすいスライドを作成することができました。その反面、上手いかなかったことは時間配分でした。分かりやすいようにスライドの文字の数を減らすと、どうしても写真やイラストを伝えるために話す量が多くなってしまいます。また、スライドを使って説明する際に、聞き手の反応がなかったり、聞き手が理解出来てなさそうな表情を浮かべる、その反対に、話を聞いている人たちがその話題に深く食いついたり興味を持っていると余計に話してしまったり、補足情報を加えたりしてしまい、ついつい言葉数が多くなってしまいます。そのため、決められた制限時間をオーバーしてしまって時間が押してしまうことになってしまいました。この点が、上手いかなかったために、反省点として挙げられます。したがって、今後の課題としては先に挙げた反省を活かして発表の仕方を工夫して時

間配分を意識しつつ、かつ、分かりやすいスライドショーを作ることを課題として取り組んでいきたいと思います。

【世界の消滅危機言語について】

私は最終発表では「世界の危機言語」についての発表をしました。私自身、奄美大島に何年間も住んでいて、自分自身の母語として奄美大島の方言を使用していました。さらに、大学の2年間は北海道の大学にいて、その土地に住み、アイヌの森探検隊という組織に参加していてアイヌの文化に触れたり、アイヌの方たちと交流する機会がたくさんありました。したがって、日本語であって、消滅危機言語に指定されている琉球諸語の方言とアイヌの人たちの言葉の魅力を知ることができました。しかし、世界各地には他にも消滅危機言語とされているような言葉・既に消滅してしまったような言葉が数多く存在しています。これらも消滅危機言語ではありますが、日本の消滅危機言語である琉球諸語の方言やアイヌの人たちの言葉のように魅力があるのではないかと考えました。琉球諸語の方言やアイヌの人たちの言葉のような魅力を知ることによって消滅危機言語を守っていこう、後世に残しておきたいという気持ちが生まれるのではないかと考えてこのテーマについて調べました。

私の発表は、世界の消滅危機言語やなくなりそうな言葉とその特徴を具体的に紹介していきました。まず最初はアイルランド語です。アイルランド語は主にアイルランド島で使用されている話者数約13万8000人の言語で、UNESCOの定める言語消滅危険度評価はさでは、「危険」と評価されています。面白い特徴としては、この言語には「はい」と「いいえ」に相当する語がありません。ボハントイーアハト (BOTHANTAI OCHT) という言葉があって意味は「ちょっと噂話でもしに行く」というものです。この言葉の母語話者たちは、お喋りが大好きでよく噂話をする目的で人を訪ねたりするという生活習慣があった。この言葉は、母語として話す人たちの生活習慣を反映したものであり、生活から生まれた言葉だと考えます。ラワン語はミャンマーやインド東北部で使用されている言語であって、主に話者数は約6万2000人とされています。ラテン語による正書法もあって、年配であるほどラワン語識字率が高いとされています。この言語で特徴的な言葉は、ドー (DO) という言葉で、弱火でじっくり芯まで通すという意味です。この言語を使用する地域は、標高の高い山間部などで非常に寒冷的な地域にあたり、主に温かいスープなどの汁物を食べています。その調理の際に必要な技術としてドーがあります。この言葉は、話者集団の食文化の影響を受けているものであり、生活文化から影響を受けて生まれた言葉だと考えられます。次に、ドム語はパプアニューギニアで主に使用され、言語話者数は、約1万6000人だと言われています。UNESCOの定める言語消滅危険度評価は「極めて深刻」だと評価されています。この言語の特徴的な言葉としては、グイカ (juika) というものがあります。意味としては、グイ「風、空気」と、カ「ことば」という2つの語からなる複合語で「携帯電話」を意味するものです。この言語の特徴としては、新しい事物が外から入ってきた時に、借用語ではなく、自分たちの昔ながらのことばから、巧みなセンスで新語を作ることが多いです。“風に乗せて言葉を伝える”ということは、ドムの情緒豊かな一面が見られると考えられる。ハワイ語は、

主にハワイ諸島で使用されている言語で、話者数は2000人程度だといわれています。UNESCOの定める言語消滅危険度評価は「極めて深刻」と評価されています。英語のchristmas(クリスマス)がハワイ語では「カリキマカ(kalikimaka)と転訛するのが有名です。ハワイ語に独特な言葉としては、マカイ(MAKAI)という言葉があります。意味は「海側」です。ハワイ諸島など火山の影響で起伏の激しい島など、海から山までの距離が近いところでは、方角の基準が地形に委ねられることが多く、東西南北だと極地では勝手が悪く、赤道直下でも真昼の太陽からは判別できません。むしろ、海の方へ行くとか、山に向かうとかの方が、間違いないといわれています。このように、この言葉はハワイ諸島という地理的特徴によって生まれた言葉であると考えられます。サタワル語は、主にミクロネシアで使用されていて、話者数は460人程だといわれています。UNESCOの定める言語消滅危険度評価は、「重大な記念」と評価されています。この言語には、kapwpa「合羽」など、歴史的影響を受けて日本語からの借用語も多いです。この言語の特徴的な言葉としては、テリン(TTAERING)というものがあり、嵐で傷ついた帆という意味です。人間が体に着いた傷を表すときに擦り傷、切り傷、火傷など区別するようにこの言語の話者集団も船の部分の傷を区別して言葉にしている。これは、この言語話者たちは主に漁をしており船は生活に欠かせないものです。この言葉もその話者集団の生活様式を大きく反映して生まれた言葉であるとかんがえられます。このように、世界の多種多様な消滅危機言語には、それらを使用する話者の文化や情緒、そこで育まれた風土を反映しているものが多い。言語とは、世界を見渡すための窓のようなものでたり、それらは大小様々であり、独自の見解が存在する。

この発表では絵やイラストを多く使いわかりやすいスライドを作ることとまとめに上手く繋げることができた。反省点としては、やはり時間超過してしまった点でした。

更に反省して、今後活かしていきたいと思いました。

2、授業全体の感想・授業で学んだこと・不十分だったこと

私は、今回の授業を履修してとても満足しています。多くの留学生や他学科の学生と交流し異言語や異文化について話し合うことで私自身の知見が広がったと思います。また、朝鮮学校やブラジル人学校などを見学することが出来て大変貴重な経験をすることが出来ました。ぜひ機会があればまた参加したいと強く思っています。ただ、授業にはやる気のない学生が数人いたため、話し合いやグループ活動など大変迷惑を被りました。その点がこの授業での1番の不満足点でした。

多文化共修科目 B Y18-DR51 最後のレポート

多文化鍋の授業

世界は大きい鍋だと思えば、文化とは調味料だと言える。鍋を作るとき、親善な材料は大事であるが、その鍋の材料の味が出るように調味料も欠かせないものである。今回、多文化共修科目 B 鍋には中国、台湾、日本、スウェーデンなどの様々な国々の材料が入っており、おいしそうである。私もタイの材料として存在している。

今回の多文化共修科目 B 授業では、日本文化だけでなく、国々から来た留学生の発表で様々な国の文かも明らかになった。さらに、自分の国の独特な文かも皆に見せ、自分のアイデンティティが強調させ、一年あまり触らない憧れのタイの文化が頭の中に入り、気が付いた。

皆さんに知られたタイの文化は、タイ料理、タイのあいさつし方、タイの行事、タイの観光地などのことであるが、今回紹介したのはタイ語である。外国人はタイ語と言えば、あいさつの言葉ぐらい知られているが、タイ語の要素、構造、言葉の作り方などの細かいところまではまだ知られていなさそうである。前、周りの友だちがタイ語を勉強したく、タイ語を教えるように何回も頼まれたが、説明し始めた後すごく難しすぎるため諦めた。今回、タイ語について発表するためタイ語の要素、構造、言葉作りの内容を準備し、自分が普通に用いるタイ語はどのように難しいの気が付いた。発表した時、皆が楽しんで聞いてくれるのを見、うれしかった。

今学期の授業に自分の言語を個人的な発表だけでなく、グループ発表もあった。私のグループにテーマは「ろう文化と手話」である。なぜなら、手話はかっこいいと思い、元々手話に興味があるが、授業でろう者の本人からリアルなろう文化と手話について勉強し、さらに勉強したくなったからである。

ろう文化と手話をテーマとする人が集まって、適当的にグループ作られたが、グループには、日本人、中国人、タイ人がいるので、多文化共修の意味を考え、それぞれの国の手話言語の特徴などを発表すれば、面白そうだと思い、それぞれの国の日常生活に使われている手話の言葉を紹介したり比べたりし、実際に社会で生活しているろう者に対応することなどのリアルな情報を紹介したい。

今学期の多文化共修科目 B のおかげで、様々な面白い文化を勉強した。それに、その文化に関して友達と意見を交換し、自分が気が付かない新しい考えを知った。文化は、人間に作られたものでその文化に対する人間の意見も大事だと考えており、価値がある授業だと言える。

多文化共修科目 B 最終レポート

多文化社会が発展している現在の社会は、どのような社会になっているのか、どのような社会背景があるのか、どのような社会風景が出現しているのかを知りたい目標として、多文化共修科目に参加してきた。

授業は大体、多言語社会コミュニケーション、言語社会ってなんだろう、英語だけでいいですか、在日外国人もいを知る(在日ブラジル人、コリアン、難民問題)、文化とはなにか、自分の母語と出身地の紹介、琉球諸語と方言、アイヌ語とアイヌ文化、ろう文化と手話などについて、授業を進めてきた。

たくさんのお話が聞けて、また様々な分野の方が来てくださって、面白いことをいっぱい教えてくれて、とても楽しかった。

中に特に読んだ後関心を持ったのは、「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会の漫画、『クラスメイトは外国人』だった。日本にいる私は当然日本人のみんなにとって外国人とされている。今はある程度日本語が話せる状態で、大学生で、自分の意志で国を出て、全く知らない国に新しい知識や自分の関心な分野を勉強しに来た。しかし、自分とは違って、自分の意志ではなく、親の都合(仕事など)で日本に来て、この国の言語や文化も知らず、年齢も小さくてたくさんのお事に迷うはずの子どもたちは、ここでどのような生活を送っているのかを知りたいためにこの漫画を読んだ。中にディエゴというブラジルから来た転校生がいて、たくさんのお事は知らないことにみんなに笑われたり、争いがあるときに、とにかく謝りなさいと先生に言われたりすることは、この子にとってはまったく理解できないことだった。ディエゴみたいにもしかしたら、両親のどちらか、またはおじいちゃんおばあちゃんが他の国の出身で、日本風の名前を名乗っていても、実は本当の名前は持っているかもしれない。そのような外国につながる人たちが、日本に数多く暮らし、日本にいる私達にとっての隣人となり、ともに生活している。そして、日本のいる人は、そのような人たちのことをどのように感じているのだろう。「あまり関わりたくない」と、敬遠したり、「なんで日本

にいるんだ」などと、差別の対象にしたりしてはいないだろうか。人と人がわかり合うためには、相手のことをよく知らないことが、偏見や差別の原因になるからだ。お互いのことを知る努力をするのは、共に生きていくうえで、とても大切なことではないだろうか。例えば、ディエゴの気持ちはこうだ。「なんで謝らなきゃいけないの、悪いのはあのこなのに」。

日本では、「なにがあったらまず謝る」という風潮がある。しかし、ディエゴの国をはじめ多くの国は、喧嘩のときは、双方が言いたいことをすべて言い合い、納得するまで話し合う。なので、どうして暴力振るったのか理由も聞かず、「ごめんなさい」っていうんだよ」という先生の言葉は、理解できないはずだ。これは、どちらが正しいとか、間違っているということではないのだ。考えの違いを知り、気持ちを伝えることにより、自分の考え方を帰るチャンスと捉えたらいいのだろうか。世界につながる隣人たちと積極的に関わり気持ち、お互いの関係をより楽しく豊かなものにしていってくれることが大切だ。国々にある世界への扉は、すでに開かれているはずだ。その物語を読んだと、大変共感した。自分も外国人で、たくさんの日本のことを知っているというわけではあないので、時々知らずうちに、相手に失礼なことをしてしまったり、悪意を持ってないのに、相手に傷ついたりした話をしたので嫌われたりすることが多いということも考えてきた。この土で生活していくためには、まずはこの国のことを知るべきだと気づいた。それはまだ子供であるディエゴのような子どもたちにとって、最初のことはきつとつらいかもしれない。

そして、『ユへの物語』を読んだ後も、たくさん知らなかったことを勉強できた。どうして日本にたくさん朝鮮人が住むようになったのかというと、一つは前世紀日本は挑戦半島を植民地にして、様々な政策の結果、多くの人が仕事を求めるために日本に渡ってきた。もう一つは、戦争のためにたくさんの日本の若い男性が戦場に行ったので、労働力不足を補うために、政府は植民地だった朝鮮半島や台湾からたくさんの男性を日本に連れてきたということだ。その人達は、戦争が終わったら、日本の帰国支援のない状態で、自分の稼いだお金も制限のあるため、長い間の植民地支配で生活基盤が破壊され、帰っても生活の目処が立

たない、などの理由で帰れない人がたくさんいた。更に、独立後の政治でまた戦争があり、仕方なく日本に留まる人もいた。結果として、約六十万人が日本に残ることになった。それで、なぜ日本にたくさん朝鮮人がいて、クラスメイトも朝鮮人が何人かいて、たくさん朝鮮料理屋がある理由は明らかにして、ようやく分かるようになった。歴史などの原因は、今の社会現象の背景になるということに気づいた。

そして、自分の出身地と方言について発表した。洛陽(中国河南省西部)は確かに歴史のある町なのだ。日本でいうと、京都のような町だ。しばしば関中の長安と並んで中国王朝の首都となった。龍門石窟、市の花の牡丹、洛陽に近い少林寺という3つの部分を分けて、それぞれみんなに説明した。古くて歴史のある町なのだが、残念なことに、京都ほど、保存されることができなかった。旅行するときに、有名な観光地でもあり、美味しいスープや牡丹ケーキもグルメとしておすすめだ。そして、中国語の各大方言の中で、官話方言はそれが際立った地位と影響がある。洛陽を中心とした北方語通行地域は、中国政治の心臓地帯であったことから、「官話」と呼ばれていた。洛陽語は河南洛陽地域で通行されている話し言葉であり、外来移民で一般的に使われている共通語と区別され、洛陽語は主に元住民(旧洛陽人)の間で通行されている。洛陽話には23個の子音、45個の母音。洛陽語と標準語の音調、発音と語彙の違いは大きい。雰囲気としては、洛陽語はよく田舎代表として、ドラマや番組をやるときによく出てくるが、洛陽出身の自分は、それを恥だとは思わない。語感としては大変面白い感じがするので、それをポイントとして、みんなが捉えているのかもしれない。

それから、最終発表のろう文化の手話の部分だったが、最初、言語は言葉にして声で表現するものだと思いこんでしまったので気づいたら大間違えだ。音のない世界にいるろう者たちにとって、指や表情で言語を表す手話は、言語になるのだ。ろう者が手話というものをコミュニケーション手段として用いているということは、すでに社会的常識になっている。しかし、ろう者の用いる手話は、狭義の言語の定義に当てはまるということは、たいてい理解されていない、手話が、音声言語を使うコチのできないための、不完全な代替品だと、一

般には考えられているのだ。声が聞こえない彼らにとって、どのような世界にいるのか、どのような心境で生活しているのか、この社会は彼らにどのような生活環境を提供しているのか、この世の彼らとは違う人はどのような考えを思っているだろうかを知るために、私達はアンケートを作って、結果を分析して、日本、タイ、中国それぞれ手話の違いを説明しながらみんなと一緒にやってから、就労と社会福祉サービスにおけるろう者の生活などについて発表した。たくさんのことを把握する上に、ろう者の方々となんとなく近くなってきた気がした。これからもろう者への支援を続けるべきだと考える。

この授業を通して、たくさんの多文化社会現象と多文化社会背景をたくさん勉強ができた。グローバル化が進んでいく背景として、様々な社会のことについて知りたい私にとってとても満足ができ、楽しんでいる。大変感謝している。

多文化共修科目 B

期末レポート

1-1 方言紹介

私は今回の言語紹介に際し埼玉県の方言について調べた。出身地は埼玉県の中でも南東部に位置する越谷市という首都圏に含まれる都市であるため、自身の経験を踏まえた地元特有の方言といったものを紹介できなかったのは非常に残念だった。また、調べて出てくる言葉の多くは“埼玉弁”というよりも、秩父地方など埼玉県内でも山の多い都心から離れた土

地の言葉であり、埼玉県出身とはいえ全く理解できない言葉ばかりであった。また、埼玉県が発祥の地で全国的に使われるようになったという言葉があるなど、面白い発見もあった。以下、埼玉県民において使用される言語（埼玉弁）と標準語・北関東の方言とのかかわりについて記述する。

埼玉県は関東地方の真ん中に位置しており、その影響なのか関東各県の方言が混ざって使用されている。埼玉弁は千葉県や神奈川県、群馬県とともに西関東方言に分類されているが、県東部では栃木弁や茨城弁、県中央部や南部では江戸言葉、県北部では群馬弁に近い言語をそれぞれ使用しているため明確な特徴をもたない言語である。また、県土は東西に広がっており、東側と西側では言語使用を含めた生活文化が大きく異なっている。とくに県西部の秩父地方で使用されている秩父弁は甲州弁とも共通点をもち、県内の他の地域と比べて古い言葉が残されている。

かつて埼玉県の大部分は現在の東京都と共に武蔵国を形成していたため、古くから江戸の影響が強いとされている。特に県南部は都心とのアクセスも良いため、共通語と似た言語を使用しているほか、住民自身の方言意識も希薄である。私もその一人で、今まで自分の使う言語が出身地域の異なる日本語話者に通じなかったという経験は全くない。

また、一つ面白い発見があった。先に述べたように、周辺地域や江戸の影響を受けて言語文化が形成されている埼玉県だが、若年層によって使用されている言葉の中には埼玉県が発祥と考えられるものが存在していた。それは、『なにげに』という言葉である。「何気なく、なんとなく、さりげなく」という意味の言葉であるが、これはもともと埼玉県で使われていた言葉が俗語化し全国的に使われるようになったという説があるようだ。全国的に広まったことで違和感なく使用していたが、身近に方言が存在していることを実感した。

1-2 最終発表

私は最終発表のテーマとして、「ろう文化と手話」を選択した。選択の動機は、普段学科では触れない内容について学習したいと思ったためである。ほかに興味があった「在日外国人への言語教育」というテーマについては、多文化共生教育コースの講義や所属するゼミに

において既に学んでいる部分があったが、ろう者や手話については高等学校までの学習や自身のコースの学習では触れたことがなかった。また、ろう者や手話について学ぶ機会がなかっただけでなく、自分から興味関心をもって調べたことがないことに気が付いた。発表の内容はゲストティーチャーの方の講義をもとに構成した。まず、講義を聞いて意外だと感じた点についてアンケートを作成し、ろう者の生活や手話について学生がどの程度の知識を持っているのかを調査した。質問項目は以下 ①ろう者と会話をしたことがありますか ②ろう者と会話をしたいと思いませんか ③手話も一つの言語であることを知っていましたか ④国によって動きが異なることを知っていましたか ⑤“声を出して話すことができる”ろう者がいることを知っていましたか ⑥5のようなろう者は声を出して話すべきだと思いますか の 6 項目である。①②③④⑤の項目に関してはそれぞれ割合に差があるものの、すべて「はい」という回答が「いいえ」を上回った。私はろう者と関わった経験がなく、また手話に関する知識が全くなかったため、このアンケート結果を意外に感じた。この調査については対象が偏っているという指摘があり、アンケートとして不十分だったと反省している。(念のため、E 類が多いという指摘に関しては、ほとんどが多文化共生教育コースの学生であり、障害者支援について特段興味関心があるという話を学科内で耳にしたことはないという点をここで補足しておきたい。)

次の項目は「タイ・中国・日本の手話の紹介と比較」である。これは、各国の生活文化によって手話の動きが異なるという話をふまえて構成した。班員の出身国に合わせてこの3か国について発表したが、東アジア圏・仏教国という共通点からか似た動作がある一方で全く違う動きもあり驚いた。また、ヨーロッパや中東など、生活や宗教が大きく異なる国の手話についても比較したいと思った。手話を練習するために様々な資料を参考にしたが、印象的だったのは話者の表情である。手話は“手で話す”と書くが、言いたいことを相手に正確に伝えるには手の動きだけでなく顔の表情が欠かせないことを学んだ。

そして最後の項目は「手話使用者からみた社会」である。手話使用者のための事例としてテレビの手話ニュースを紹介したが、その他には字幕設定がある。しかし、手話ニュースは時間が限られているうえ、字幕設定も可能な番組と非対応の番組があることから、テレビという一つのコンテンツをとっても手話使用者の生活が制限されていることがわかる。これは緊急時に非常に不便であると指摘したが、これに関連して、災害時の避難所における対応策は十分であるかを今後調べてみたいと考えている。また、就労に関する制度改正が徐々に進んでいるという現状を紹介した。この法整備というのはろう者に限らず、多文化共生の推進という観点で重要であると私は考えている。しかし、さらに重要なのは多文化・異文化に対する理解だろう。外国人やいわゆる障害者、高齢者など様々な人と共生するためには、個人対個人という関係性を築き、相手のことを理解しようとする姿勢が欠かせないと改めて感じた。

2 授業全体の感想

私は在日外国人に対する言語（日本語・母語）教育に興味関心があったため受講を決めた
が、危機言語の問題や手話など幅広い知識を身に着けることができ、有意義な授業であつた
と感じている。特に、ろう者の方のお話を聞いたことは大きな経験となつた。この講義を機
にろう者や手話に対する意識が変わつただけでなく、多文化共生という言葉の意味につい
ても考えが変わつたためである。私はこれまで多文化共生について考える際、日本人と外国
人という関係性にばかり着目していたが、多文化というのは例えば若者と高齢者や、いわゆ
る健常者と障害者など様々な人々の共生を目指さなければならないのだということを実感
した。今後多文化共生教育コースの学習の中で、この気づきを生かしていきたい。また、本
レポートにおいて私は“いわゆる”障害者・健常者と障害者という表現を使用した。これは、
ゲストティーチャーの「聞こえないことは障害（障害）ではなく個性である」という言葉を
踏まえたものである。身体的ハンディキャップを相手の個性として捉えることは概念とし
て可能であり、私自身そのように考えているが、現実的にはそのような個性が日々の生活の
なかで妨げとなっているという問題がある。個性だからといって何もする必要がないとい
うわけではなく、それらの個性を尊重しながらもよりよい生活が送れるように考えていく
ことが重要だと私は考えている。

多文化共修科目 B 最終レポート

1. 自分の発表内容とその振り返り

母語・方言紹介では、出身の群馬県の方言について紹介した。私は、方言紹介をするにあたって「あまり紹介することがないな」と感じていた。なぜなら、群馬県には関西地方や東北地方のような目立った方言がないと思っていたからである。大学に進学して様々な地方の人と話す中で、方言は自分を表す一つの手段だと考えるようになった。先述した関西地方や東北地方出身の人が方言を話すと、方言の珍しさから出身県の話や出身者自らの話まで話題が広がる。私は、特徴的な方言のない群馬県をつまらなく感じていた。しかし、今回方言紹介をするにあたってインターネットで調べたところ、群馬県には意外にもたくさんの方言があることを知った。語尾や文節に「～さ」がついたり、「歩いていく」という言葉を「あるっていく」といったり、自分では普通に話しているつもりだった言葉が方言だったことに驚いた。また、調べた中で一番驚いたことが、標準語とのアクセントの違いだった。例えば群馬県では、「いちご」という時に一番先頭の「い」にアクセントがつく。このように、群馬県にとじこもっていたり、調査したりしなければ知らなかったことがたくさんあった。また、方言紹介に伴って軽く文化も紹介したが、見てくれている人から新鮮なリアクションをもらったので、こちらまで新鮮な気持ちで発表出来た。今回の発表で自分の出身県について詳しく調べたことで新たな魅力を発見し、さらに好きになった。多文化共生においてまず一番に大切なことは、自分の文化を知ることだと私は考えている。どのようにすれば共生できるのかが、分かりやすくなると思うからだ。その点において今回の方言紹介は、とても有意義なものになったと感じている。

最終発表では、「ろう文化と手話」をテーマに選んだ。理由は、サークルの友だちが聴覚障害について学んでいて、他のテーマよりも身近に感じていたからである。私が担当したのは、「手話を使う人から見た社会～日常生活編～」だった。私は、耳が聞こえない人がどのような気持ちで暮らしているのかについて発表したかったため、耳が聞こえないとはどういうことなのか実際に体感してもらったり、私が体験したりしたことを中心に発表した。発表を通して目指していたのは、耳が聞こえない人のリアルな声を伝えることだった。そのため、ゲストレクチャーで来てくださった方の経験談や、自分が生活していて疑問に感じていることも発表に盛り込んだ。今回の調査によって分かったことは、耳が聞こえない人への支援はできてはいるが、どこかが欠如していることによって十分な支援にはなっていないということである。だから、大人たちがその支援方法を充実させることはもちろんのこと、私たちが筆談を使って会話するなどの身近な支援を行うことが重要である。発表の評価では、最初に行った「実際に耳を塞いでもらう」という取り組みを評価してくださった方が多かった。やはり、自分で相手の状況になってみないと理解できないことが多いと思う。課題としては、声の大きさ・発表時間が挙げられる。人前に立つと声が小さくなりがちなので、今後は相手に伝えるという意識を持って発表に取り組みたい。また、事前にリハーサルをしなかつ

ったせいで発表時間が超過してしまった。聞いてくださっている方に体感してもらうという時間があることも考えて、リハーサルを行うべきだったと思う。長い時間発表できるほど内容を濃くできたのは良いが、聞き手のことも考えて調整することが大切だと感じた。

2. 授業全体の感想

今回私が多文化共修科目 B を受けていた理由は、単純に「面白そうだ」と思ったからだった。授業内容についても、外国の様々な文化について学ぶのだろうという薄い認識であった。しかし授業を受けていくうちに、多文化が外国だけを対象としたものではないこと、言語には様々な形があることを知ることが出来た。特に、手話が言語の一つであることは知らなかったのが新たな発見が出来てよかった。また、普段あまり関わることのない外国の人とコミュニケーションをとる機会があったことは、とても良い経験になった。話すことがなかったとしても、発表や授業の受け方からそれぞれの国の文化を感じ取ることができた。以前は、日本を主としたアジア圏の人間は欧米の人間と比べて消極的で仲間は仲間で固まっているものだという固定概念があった。しかしそれは間違いで、育った地域によって性格が決まるということではなく、あくまでも個人個人の育ち方で決まるのだと考えを改められた。他にも、朝鮮学校の見学に行ったことはとても貴重な経験だった。私は教員免許がとれないコースに所属しているため、普通の学校見学に行くこともない。しかし、朝鮮学校というなかなか入ることのできないところを見学させていただき、自分なりに考えを深めることが出来たと思う。外国人学校に通う子どもは、ほとんどが親の都合でそこに通っている。そのため、親が学習の手助けを行うことは大切だが、それにも限界がある。それをさらに助けるのが外国人学校だ。通う児童・生徒にとってもっとも重要だと考えられているのが、アイデンティティーの尊重だ。自分が外国人なのか、日本人なのか、それともそのどちらでもないのか。それを決めるのは、あくまでも児童・生徒本人である。それを助けるために外国人学校で行われているのが、母国語での授業だ。授業で訪れた朝鮮学校は、日本語での授業を基本として朝鮮語の授業も織り交ぜながらアイデンティティーの尊重を行っていた。教師は朝鮮の民族衣装であるチマチョゴリを着ていた。また家庭科の授業では、朝鮮の家庭料理を調理実習で作っていた。日本にいても母国を忘れないでいてほしい、という思いが込められているのではないだろうか。日本人や外国人という枠でくくることのできないアイデンティティーが、児童・生徒には存在する。それを大切にすることを教える義務が外国人学校にはあると思う。外国人学校ではあるが、学校教育のみならず社会教育の役割も果たしていると考えた。

私がこの授業に期待していたことは、外国人留学生とのコミュニケーションだった。しかし、授業中の席が自由だったことによって日本人学生は日本人学生、外国人留学生は外国人留学生で固まってしまう、私はあまり外国人留学生の方と話すことができなかった。今回の授業では、多文化共生が大きなテーマだった。そのため、様々な国や地域の人間と対話をし、多文化共生や自分の文化に対する理解を深めることがこの授業において私のやりたいこと

だった。しかし、それがあまりできずに終わってしまったように思う。自ら積極的に動くことを怠ってしまい、本来ならば得られた経験やそれに伴う知識が得られなかったことは、反省すべき点だと考える。また、日本人学生が日本の文化について話すこともできなかった。先述のように、多文化共生について理解を深めるためには、まず自分の国や地域についての文化を知ることが重要であると私は考えている。だから、日本人学生として日本の文化について発表や学習をしようという意欲を持つべきだったと思った。

2020 年は東京オリンピックの年で、様々な文化を持つ人々と触れ合うだろう。今回の多文化共修科目 B で得た知識や反省を活かし、いろいろな人と関わりたい。

就労と社会福祉サービスにおけるろう者の生活

一、研究動機

ろう文化と手話の授業で、先生は簡単な手話、聴覚障害の分類やろう者の日常生活などを紹介した。初めてろう者の視点から世界を見て、ろう者の心の声を聞いた。手話も言語の一つだと分かった。大変勉強になった。このきっかけに、ろう者の生活に興味を持つようになった。しかし、授業でろう者の就労と社会福祉について話しなかった。ろう者に向いている仕事、ろう者の就労状況や社会福祉サービスについてもっと知りたいので、このテーマを選んだ。

二、発表の内容

1. ろう者の就労について

1.1 ろう者が就けない仕事

ろう者、あるいは聴覚障害者が就けない職業があると聞いたが、どんな職業であろうか。調べたら、「障害者に係る欠格条項」という言葉出てきた。「障害者に係る欠格条項」とは「目が見えない者、耳が聞こえない者又は口がきけない者には、この試験が受けられない、資格・免許を与えない」といい、障害があるという理由で免許・資格取得の制限・禁止を定めている法令である。

日本全国で欠格条項廃止を求めて200万人を超える署名活動や地方議会の請願で、1999年の政府方針によってこの欠格条項の見直し作業が始まった。見直し法案が2001年の通常国会に提出され、可決した。その結果、相対的欠格として資格、免許獲得ができるようになった。相対的欠格は、「資格を与えないことができる」などの表現で、場合によって資格の与奪を決めるという含みのあるものであり、絶対的欠格とは「資格を与えない」という表現で、免許権者の裁量の余地がないものである。

その取り組みの一つとして、2016年の4月に運転免許制度が改正され、ろう者でも補聴器を付けて一定の音が聞こえれば、バス運転士に必要な第二種運転免許の取得が可能になった。これを取得した松山さんは、東京バス株式会社に就職した。ろう者が就ける職業は広がっていると言える。

1.2 データから見るろう者の就労状況

厚生労働省が公表した「平成 30 年障害者雇用実態」によると、平成 30 年 6 月時点で回答事業所 (6,181 社) において雇用されている身体障害者は 17,903 人だ。そのうち、11.5% は聴覚言語障害者だ。

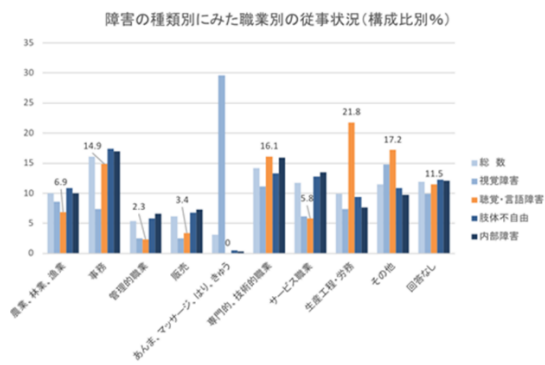
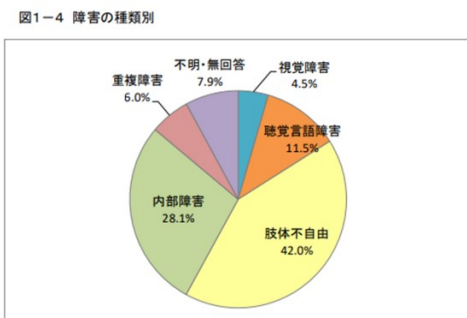


図1 厚生労働省 「平成 30 年障害者雇用実態」 図2 内閣府 「平成 18 年身体障害児・者実態調査」

障害者の種類別に見た職業別の従事状況を見ると、生産工程、労務の仕事をしているろう者は最も多く、21.8%に達した。ついで専門的、技術的なのは16.1%であり、事務は14.9%である。こちらのデータは平成18年に公表されたもので、ちょっと古いですが、ろう者に向いている職業を示すことができるんじゃないかと思う。

1.3 ろう者の仕事における困った点について

「みみなび」という聴覚障害者に関する情報サイトの調査で、仕事の困った点について、多くのろう者は下記のように回答した。

- ①. 大人数の会議や複数の会話の際に、内容が分からない。
- ②. 話しかけられている際に認識しない。
- ③. 話の内容が抜けている事が多い。
- ④. 話を聞いているけれど、内容が分からなく、失礼しないように分かったフリをしてみよう。
- ⑤. 飲み会の時、話が聞き取れないから、雰囲気には溶け込めない。

ろう者は工作中誤解を招くことが多い。ろう者を雇う会社はろう者の不便さを理解し、よ

りやさしい環境を作る必要があると思う。例えば、交流する時ゆっくりと話すこと、重要事項はメールや筆談で通告すること、会議の時に要約筆記を実施することなどだ。

2、ろう者の社会福祉サービス

2.1 法律の改正

2013年6月に障害者差別法が成立し、障害者雇用促進法が改正された。厚生労働省の調査によると、近年障害者の雇用率は増加している。ろう者たちの権利に直接に関わる日本手話言語法の制定も進んでいる。法律の改正はろう者たちの権利を保障する重要な一環だと思う。

2.2 ろう者たちに色々な生活を支援するサービス

①全国各地の警察で、音声による110番通報が困難な人のために、FAXやメールによる通報を受け付けている。専用の通報アプリを開発・運用したり、専用のホームページに接続したりしてチャットで通報するシステムを導入しているところもある。

②字幕放送と手話放送を行っている。字幕放送は聴覚に障害のある方や耳の聞こえにくくなった高齢者などのために、テレビ番組の音声などを文字や記号化して画面上に表示させるサービスである。リモコンの字幕ボタンを押すことなどで表示できる。現在、番組だけでなくCMにも字幕を付ける取組が進められており、一部のCMで実施されている。手話放送とは聴覚に障害のある方のために、テレビ番組の内容について、手話通訳を表示するサービスである。一部のニュース番組や情報番組などで行われている。

2.3 支援機関、団体とその活動

全日本ろうあ連盟をはじめとして、ろう者たちの生活、就学、就労や健康などを支援する機関、団体が積極的に活動している。



この新聞記事は去年 11 月 18 日に朝日新聞に掲載されたものである。大阪聴力障害者協会は聴覚障害を持つ子供が自然に手話を習得できるために、サポートを行なっているということだ。

三、発表の振り返り

発表の前に何度も練習しても、本番で緊張しすぎたので、単語を読み間違えたり、ポイントを言い忘れたり、発表時間を超えたりしてしまった。それに、グループでのアンケート調査を行ったが、協力者の人数が足りなくて、C類特別支援教育の学生と留学生に集中したので、客観的な結果とは言えなかった。残念だと思う。自分にとって良い発表ではないが、先生が送ってくれた最終発表評価表を見て、「ppt がカラフルで見やすかった。」「データの提示があり、理論的だった。」「内容がとても豊かで、面白かった。」といったコメントがあり、うれしかった。皆さんにありがとうございます。今後は、うまくいかなかった点を踏まえて、よりよい発表をできるように頑張りたいと思う。

四、今後の課題

今回の発表はグループでアンケート調査を行ったが、私が担当した部分の内容は公表されたデータやネット上の資料に基づいて作られたのだ。今後は、ろう者の支援セーターに訪ねたい。直ちにろう者たちにインタビューしようと思う。よく知っている問題以外、生活や就労における困った点があるかどうか、政府や社会団体が提供しているサービスを実際使用しているかどうか、便利かどうかなどを聞きたい。乳幼児の手話教育という新聞記事を読んだら、子供の手話教育に興味を持った。今後の一つの課題にしたいと思う。

五、参考資料

神奈川県聴覚障害者福祉センター 「聴覚障害者が就けない職業」

厚生労働省 「平成 30 年障害者雇用実態」

内閣府 「平成 18 年身体障害児・者実態調査」

朝日新聞 「手話と出会い、乳幼児から」 2019 年 11 月

みみなびサイト <https://ohmiminavi.co.jp/category/work/>

NHK 福祉情報総合サイト <https://www.nhk.or.jp/heart-net/new-voice/bbs/41/3.html>

授業全体の感想

多文化共修科目という授業名と同じように、私はこの授業で多様な知識を勉強した。多言語主義、複言語主義と言語教育の授業を受けて、英語教育について考え直した。以前は英語を勉強しなければならないと思っていたけど、今は自分が好きな言語を勉強したらいいと思う。人は複数の言語を習得する能力がある。多言語社会における言語教育は英語だけに集中してはいけないと思う。国の政策は他の言語をもっと支援すべきだと思う。琉球諸語とアイヌ語の授業で、日本のマイノリティの言語の特徴を勉強した。中吉さんが言ったように、言語は文化の窓だ。琉球諸語とアイヌ語を通じて、それらの文化も理解するようになった。特にアイヌの昔話は面白くて、印象に残った。

個人の発表を準備した時、自分の方言を新たに理解した。今後、他人にふるさとの言語と文化を紹介する時、役に立つと思う。韓国語の発表を聞いて、韓国語を勉強したくなった。来学期、韓国語の授業を受けようと思う。この授業を受けて、様々な視点から日本社会を理解することができた。多文化を楽しんでいた。とてもよかったと思う。

言語の問題で、先生の説明や他のクラスメートのお話を聞き取れなかったり、グループのディスカッションに積極的に参加しなかったりしたことがある。不十分で、残念なことだと思う。春休みに、日本語力を高めるように頑張ります。